聖女に嘘は通じない
ArianRose
アリアンローズ
日向夏
Hyuuga Natsu
イラスト
しんいし智歩
Shinishi Chiho

目次

聖女に嘘は通じない
ArianRose
アリアンローズ
日向夏
Hyuuga Natsu
イラスト
しんいし智歩
Shinishi Chiho

アリアンローズ

聖女に嘘は通じない

著者 日向夏
イラスト しんいし智歩

聖女に嘘は通じない――目次

この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件などに一切関係ありません。

序章 ―― 賭博師と商人

I

晴れた空、心地よい風。
よく言えばのどかな、悪く言えば田舎。
美しき女王が治めるミュトス王国の辺境、とある教会の庭では元気よく子どもたちが走りまわり、神官たちがその姿をほほえましく見ている。
この時季は、洗濯屋たちに喜ばれる。もちろん、洗濯屋だけでなく洗濯を任された神官見習いたちにとっても嬉（うれ）しいはずだが──。
「一枚、二枚……」
うひひひ、と気持ち悪い笑い。
クロエは、自分でも気持ち悪いと認識してしまう声を止められなかった。
癖のある赤毛を頭巾（ウィンプル）で隠し、丈夫だけが取り柄の体を白い装束で包もうが、この声は聖職者とは思えぬ世俗にまみれたものだった。
目のまえには銀貨が百二枚。銀貨一枚で本が一冊買える値段。百二枚ともなればけっこうな大金だ。それをたった一晩で稼いだとあれば、楽しくて涎（よだれ）が出てきてしまう。
「いいカモだった」
このままずっと銀貨を眺めていたいが、そろそろ次の仕事の時間だ。
袋に銀貨を詰めて立ち上がったちょうどその時、クロエの元へ白い神官服を着た中年の女性神官がやってくる。
「クロエ。どこにいるの？」
「はい、こちらにいます。どうかしましたか？」
クロエの先輩にあたるその女性神官の朗（ほが）らかな印象は、孤児を多数扱う教会にぴったりだ。服の袖には、赤い花が二つ咲いた蔦（つた）模様が入っている。
対して、クロエの服も真っ白な神官服で、裾と袖に蔦の刺（し）繍（しゅう）が入っている。ただし、花ではなく蕾（つぼみ）だけの刺繍。アルブ教の神官見習いである証（あかし）だ。
「あら、お洗濯は終わったのね」
「はい」
クロエは仕事が早い。時間が余って銀貨を数えていたくらいだ。
「なら、すぐ来てちょうだい。あなたにお客様よ」
「お客様ですか？」
クロエは首を傾（かし）げる。
クロエを訊ねてくるような人などいるだろうか。ろくでなしの父は五年ほど前に失踪し、母は赤子の頃にどこかへ消えたらしい。今更、ク

ロエがどこにいるかなんて知らないはずだ。
（まさか、昨日の——）
クロエは、ローブの中に隠した銀貨の袋をちらりと見る。
（いや、大丈夫。ばれてないばれてない。何より合法的に手に入れたものだし）
心を乱して良いことはない。気持ちを落ち着かせよう。
クロエは軽く深呼吸をして、女性神官の後ろに続いた。

II

歩いているうちに、クロエは軽い面会ではないことに気付く。普段使われている対話部屋ではなく、貴賓室へと向かっているようだ。
（いや、誰だ誰だ？）
皆（かい）目（もく）見当がつかないクロエは、先輩神官の顔を窺（うかが）う。
「着替えなくてもよろしいのですか？」
クロエは洗濯を終えたばかりだ。袖が濡れていて、清貧と言えば聞こえはいいが、正直みすぼらしい。
「お客様は、問題ないとおっしゃっていました」
（一体誰が？）
クロエが考えているうちに、貴賓室についてしまった。
「失礼いたします」
クロエはゆっくり頭を下げつつ中に入ると、そこには二人の男性がいた。
一人はこの教会の神官長、養護院もやっているので院長とみんな呼んでいる。優しいおじいちゃんだ。
そしてもう一人、若い男が座っていた。
（……誰だ？）
本当に見覚えがない。年齢は二十歳すぎくらいだろうか。癖のない黒髪に青い目をしている。切れ長な端整な顔立ちだが冷たい感じはしない、どちらかと言えば育ちが良さそうだ。
（白い外（がい）套（とう）に蔦の留め具、聖騎士か）
聖騎士とは、騎士の中でも教会に所属する者たちのことをいう。聖騎士なら外套に所属のエンブレムが刺繍されているはずだが、座っていて見えない。
（その聖騎士さまが、何のご用？）
と、クロエは太（ふと）腿（もも）にくっつく銀貨袋の感触を思い出す。
（まさか……）
たらたらと嫌な汗が流れた。昨晩、荒稼ぎしたことでこの男はやってきたのではないか、と不安がよぎる。

いや、クロエが銀貨を稼いだ方法は合法だ。合法だが、少々体裁が悪い。
「ご挨（あい）拶（さつ）なさい」
院長に言われ、クロエはもう一度頭を下げる。落ち着け、と一呼吸ついた。
「神官見習いのクロエと申します」
「聖騎士のエラルドです」
クロエもエラルドという聖騎士も、ファミリーネームは名乗らない。教会に所属する者は、表向き家の権力は関係ないとされるためだ。しかし、出家のように思えるが家族の縁が切れているわけではない。家柄は関係ないとしても、聖騎士と神官見習いではどう考えてもエラルドのほうが偉い。クロエは、エラルドが口を開くのを待つ。
エラルドは切れ長の目を細めると、テーブルに一枚の紙を置いた。
「神子選抜試験を受けてみませんか？」
古めかしい書式の羊（よう）皮（ひ）紙（し）には、『神子候補者推薦書』と重々しく書いてあった。
「ええっと、これは……？」
院長がいぶかしみながら、クロエとエラルドを見比べる。クロエとてどうすればいいのか、混乱している。
「確かにクロエはしっかり者ですが、神子としての能力などは……」
先輩神官も口を濁しつつ言った。
（うん、言わんとしていることはわかるよー）
『神（み）子（こ）』とは何か。それは十年に一度、特殊な祝福（ギフト）を持った者の中から二人選ぶ国の代表だ。ついでに言えば、毎回選ばれるのは美女が多く、神秘的な力を使うことから、一般的に『聖女』などと呼ばれている。
（いやいやいや、聖女って）
クロエは、近所の精肉店と青果店のおじさんたち以外に『美人』と呼ばれた記憶はない。養護院の悪（わる）餓（が）鬼（き）どもには『ブス』と憎まれ口を叩かれることもしばしばある。自身はそこまでひどくないと思っているが、それでも美人という言葉はお世辞でしか縁がない。
美女でもなく祝福（ギフト）も持っていないクロエが、なぜ『神子』候補に推薦されるのか、理由がわからない。
「ご心配なく、勘違いでも間違いでもありません」
「で、でも」
院長が心配そうにクロエを見る。クロエは院長に「私に聖女は無理ですぅ」という顔を見せる。
「ははは。なにか誤解があるようですが、僕は聖騎士を名乗った人買いではありません。ですが、この件につきましては、一度二人で話を

させていただけますか？」
エラルドは二人の神官に席を外すように頼んだ。ド田舎とはいえ、一介の聖騎士が神官長に退室を申し出ることはできない。
だが、エラルドは聖騎士としてではなく、別の立場を利用する。
「僕の名は、エラルド＝ビルツです。ミドルネームは長いので省略させていただきます」
ビルツという、どこにでもありそうなファミリーネーム。だが、そこにミドルネームが入ると話は別だ。
エラルドは、ご丁（てい）寧（ねい）に家紋入りの懐中時計を見せてくれた。
（聖騎士で、なおかつ貴族階級）
教会関係者に、表向き家の権力は関係ない。だがあくまで表向きだ。
クロエだけでなく、院長と先輩神官も固まってしまう。
「ビルツ宮中伯のご子息であられますか？」
院長が恐る恐る聞いた。
「宮中伯なんておこがましい。皆さん、成金伯と言いますよ」
ビルツ伯爵家。かつては王族相手にすら意見することができた歴史ある家。
だが、先々代の当主が放（ほう）蕩（とう）者（もの）で財産を食いつぶしたのは五十年前。先々代の妹であった先代当主が家督を奪ったことは今でも有名である。
それでなぜ成金伯と言えば、その先代当主の夫が商人だったためだ。
青い血を好む貴族にとって、ビルツ家は成り上がりに乗っ取られたといって等しいだろう。
そして、成り上がりというイメージを消したいためか、アルブ教への寄進が多く、それだけでなく身内を聖職者にすることも多いと聞いた。エラルドもまたその一人だろう。
院長と先輩神官は不安そうにクロエを見る。クロエも必死に二人に目で訴えかける。
「男女で二人きりだと体裁が悪いようでしたら」
エラルドは手を大きく叩く。
「お呼びでしょうか？」
すっきりした顔立ちの女性が入ってきた。身長が高くすらりとして、目立たない恰（かっ）好（こう）をしているが、美人だ。声が低く落ち着いており、所作からは知性が感じられる。
「実家で母の小間使いをやっているイネスです。こういうことも想定して、ついてきてもらいました」
用意周到すぎて、クロエたちはぽかんとなる。
院長と先輩神官は申し訳なさそうにクロエを見つつ、退室していった。

III

一人取り残されたクロエは、汗をだらだら流しながらエラルドとイネスを見る。

「さて、クロエ嬢。お話の続きをしませんか」

「お話と言われましても……。私はこの通り平々凡々で、聖女さまになる資格なんて寸分もありません。何かの間違いですよね？」

クロエは思わず早口になる。

「いえ、間違いではありません。イネス」

「はい、エラルドさま」

イネスはエラルドの前に重そうな革袋を置く。ガチャン、となんだか妙に愛着のある音がした。

「な、なんですか、これは？」

クロエは、革袋を凝視する。

エラルドが革袋をひっくり返すと、中から何よりも愛（いと）おしい金貨が落ちる。一枚で銀貨二十枚分の価値があるのに、それが一枚二枚どころじゃない、数十枚、いや百枚以上あるのではないか。

目玉が落ちそうになるほど、クロエは金貨を凝視してしまう。

「時間がもったいないので、単刀直入に言います。僕はクロエ嬢を雇いたいのです」

「や、雇うって言われても、私はただの神官見習いで」

高額で雇ってくれるならクロエは嬉しい。だが、それに見合う能力がなければ、どう考えても怪しい。普通なら、身売りされるなどと考えてしまう。何より、クロエ自身に金貨百枚分の価値があるだろうか。

「『豪運の聖女』、などと言われているそうですね、この近辺では」

「!?」

クロエは思わず心臓が鳴った。必死に平静を装い、顔に出ないよう努める。

『豪運の聖女』とは、誰が呼び始めたかは知らない。ただ、ヴェールで顔を隠し、酒場でカードをやっているうちに、いつしかそう呼ばれるようになった。

（いやいやいや、聖女とかやめて欲しいし）

今、クロエが持っている銀貨も、昨晩のカード賭博で手に入れたものだ。

どう誤（ご）魔（ま）化（か）すか一瞬考えたが、エラルドの目は確信に満ちていた。

「そんな話をどこで？」
クロエは、肯定も否定もしない曖（あい）昧（まい）な言い方で返す。
「私はビルツ家の人間ですので」
金と権力を持った人間相手に、個人情報など無意味なのだろう。エラルドは聖騎士であり、いかにも麗（うるわ）しい青年だが、妙なしたたかさがある。
「この国では聖職者が賭博をするな、などという規範はありません。かつて『幸運の聖女』は、他国に侵略された辺境の地を交渉術とカードによる賭けによって、無血で奪い返しました。誰が夜な夜な酒場に行っては荒稼ぎするクロエ嬢を責めることなどできましょうか」
エラルドは芝居がかった言い方をする。後ろではイネスが無表情のまま、突っ立っていた。
『幸運の聖女』の伝承、おそらくここからクロエが『豪運の聖女』などと呼ばれるようになったのだろう。変な通り名をつけられたくなかったが、この名前のおかげで大負けした相手からも変に恨まれる数が減ったことは否（いな）めない。
『聖女』という名前は、それだけこの国に浸透している。
クロエがここでしらばっくれても、証拠は集められている。だからはっきり言うことにした。
「はい。確かに私はカードを趣味としております。だから何でしょうか？」
カード賭博というが、あくまでこの国では合法なのだ。ミュトス王国では、一回につき銀貨五枚以内、詐欺やいかさまでなければ、賭博は違法とされない。クロエの銀貨百枚はちまちま勝ち続けた結果で、さらにいかさまはやっていないので、問題ないはずだ。
「昨晩、隣町の酒場にてカード賭博。近くの鉱山で働く鉱員たちから銀貨百二枚をせしめる。対戦相手の皆さんは、あなたが『豪運』の祝福（ギフト）を持っていると確信していました。どこをどう見ても、クロエ嬢がいかさまをしている証拠はなかった。祝福（ギフト）でもなければ、こんなに勝てないだろうと」
「申し訳ありません。私はカードが強いだけで、祝福（ギフト）なんて持っておりません」
クロエはきっぱり断言する。
祝福（ギフト）とは、神から与えられた超常的な力。魔法と言ってもいい能力だ。
かつて、魔女として追い立てられた者たちが行きついたのが、このミュトス王国の地。もう何百年も前に魔法は衰退したが、この国では祝福（ギフト）という魔法とは違った力を持つ者が時折生まれる。
魔法と祝福（ギフト）。その差はよくわからないが、魔法は魔力さえ

あればどんな系統のものでも使える。対して、祝福（ギフト）は個人によってその性質がかなり違う能力だ。
絶対にカードゲームで勝てる祝福（ギフト）。生（あい）憎（にく）、クロエにそんな便利なものはない。
「では、本当に運だけで二十回以上勝ったということですか？ それはあまりに〝豪運〟過ぎませんか？」
「正しくは二十五勝三敗ですね。昨日は特に調子が良かったんです」
さっきまで笑いながら銀貨を数えていた自分を呪いたくなるクロエ。
「調子が良かった？」
聞き返すエラルドに対し、クロエは正直に答えることにした。
「はい。カードゲームにもコツがあるんです。もちろん、運の要素も強いですけど」
クロエは懐（ふところ）からカードを取り出すと、慣れた手つきでカードを切り、裏返して並べていく。
本当は教えたくない、企業秘密だ。
「基本的にカードは記憶力と確率、それから相手の心を読むゲームです」
クロエは裏返したカードを一枚表に返し、もう一枚選んで返す。二枚には同じ数字が書かれてある。また二枚選ぶと同じ数字。
次々とカードを合わせていくクロエを、エラルドとイネスは凝視する。
全てのカードを難なく当てると、クロエは軽く息を吐いた。
「私の場合、数十枚のカードならどこに置いたのか一瞬で覚えることができます。どのカードが残っているか、自分に必要なカードはどの割合で来るのか考えつつ相手の動向をうかがえば、自（おの）ずと勝ち筋が見えます。祝福（ギフト）などという不可思議な神秘の力ではなく、誰でも訓練をすれば手に入れられる能力です」
「誰でもですか？」
いや、無理でしょうとエラルドの顔は言っていた。
「誰でも……、多少コツと忍耐力は必要ですけど」
クロエも、すべて記憶するコツを得るまで時間がかかった。ろくでもないクロエの父は、賭け事を飯（めし）の種とし、娘のクロエですらその道具とした。毎日の食事がかかっていただけに、クロエも必死だったのだ。
「なるほど、記憶力については努力の賜（たま）物（もの）として理解できました。では、心を読むと言うのは？」
「これも話さないと駄目ですか？」
「実は祝福（ギフト）であり、凡人には説明できない話でなければ、是非お伺（うかが）いしたいですね」
にこやかに意地悪な顔をするエラルド。暗に、クロエに正直に答えろ

と言っている。
「僕が今どのカードを持っているかわかりますか？」
エラルドが当ててみろと、卓上から選んだカードを背にして見せる。
「……ハートの三です」
「クロエさま、やはり祝福（ギフト）持ちでは？」
エラルドの傍（そば）に立っていたイネスが聞いた。
「いいえ。普通にエラルドさまの透き通るような目に数字が映っています」
「えっ。なんか女性にそんな口説き文句言われたの初めてです」
エラルドは少し戸惑いつつ、己の目を押さえた。
「そんなにくっきり映るものなのですか？」
イネスが疑いの目でクロエを見る。
「いえ。判別できるようになるには、やはり訓練が必要ですね。カードに慣れた人であれば、もちろんそんなへまをすることはありません。相手の一挙一動を観察し、些（さ）細（さい）な動きを見逃さない。相手の癖を短時間で読み、わずかな感情の変化を逃さない。相手の行動の虚と実を見極めることが大切です。もちろん、カードなので運がかかわってくると負けることもあります」
クロエの場合、わざと負けていた手前もある。面倒くさそうな相手なら、本気を出さないでいたほうがいろいろと都合がいい。
「ほうほう。それは僕でも訓練すればできますでしょうか？」
「できますが、どの程度までと言われると難しいところですね。嘘が上（う）手（ま）い人はどこにでもいますから」
エラルドはイネスを見る。イネスはこくりと頷いた。
「すばらしい。思った以上の逸材ですね」
クロエはぽかんと口を開ける。
「だから、祝福（ギフト）なんて持っていないって……」
「祝福（ギフト）など持っていなくてもかまいません。僕はあなた自身の能力を買いたいんです」
「意味がわかりません。祝福（ギフト）がなければ、聖女さまになんてなりようもないでしょう？」
「神子になる必要などありません」
エラルドはきっぱり言った。
「えっ？ でも、聖女候補と……」
「クロエ嬢には神子候補として大教会に潜入し、調べてもらいたいことがあります」
「調べてって……」
クロエは、思った以上に面倒なことに巻き込まれていると察した。
「二年前、神子候補チーロを殺害した犯人を見つけてもらいたいのです」

（さ、殺害!?）
クロエはゴクンと唾（つば）を飲み込む。
エラルドの表情に嘘はなく、イネスにもまた変な動揺は見られない。
（嘘か本当か）
おそらく本当。エラルドの瞳（どう）孔（こう）は開いていない。人間は嘘をつくとき動揺を見せる。いかに隠すのが上手い人間であろうとも、瞳孔の大きさまで調整できる人間は少ない。
また、緊張すると発汗する。かすかな体臭の変化もクロエは見逃さない。
先ほど、努力すれば手に入る能力だとクロエは言った。だが、クロエほど明確に嘘を見破れることはなかろう。
エラルドの目に本気さが見える。
「報酬は前金で金貨百枚。成功報酬金貨五百枚でいかがでしょうか？」
目玉が飛び出るような報酬を提示され、クロエはもう一度唾を飲み込んだ。

一章 ―― 五人の聖女候補者

Ⅰ

前金で金貨百枚、成功報酬で金貨五百枚。なお、必要経費は別途請求して良し。
聖騎士エラルドの持ってきた仕事はおいしいことこの上ないように思えるが、世の中そんなに甘くないとクロエは知っている。
「おみやげかってきてねー」
孤児たちに見送られ、クロエはビルツ伯爵の別邸に泊まり込むことになった。数か月、聖女候補として訓練を受けるためだ。
最初は、やたら豪華な邸宅に感動したり、料理の豪華さに目をまんまるにしていたが、そのワクワク感は一日で消えた。
クロエに待っていたのはイネスのしごき、もとい聖女候補としてどこに出してもおかしくないような淑女教育だった。
賭博で飯代を稼ぎ、孤児たちをどやしながら生活していたクロエにとって、コルセットとハイヒールに身を包んだ生活がどれほどのものかは言うまでもなく――。
頭に本を載せ、ひたすら歩きつつ礼儀作法のレッスン。茶会の心得。他の聖女候補やその後援者などの人間関係の把握。
おそらく、貴族の子女にとっては当たり前に受ける教育。だが、十数年かけて受けるはずの授業を数か月で終わらせるとなれば、どれだけ大変かわかるだろうか。
普段のイネスは冷静で無表情な侍女だが、クロエをしごいているときはなんだか楽しそうに見えた。イネス曰（いわ）く、「クロエさまのことを想って」だそうだが、クロエに嘘が通らないことくらい知っているだろう。
（サ、サドだ）
美しい立ち振る舞いというのは筋肉を使う。毎日、筋肉痛で苦しみながらやった。無表情な侍女は眉一つ動かさず、的確に痛みがあるところをつついてくれた。
滞在最終日、クロエは完全に疲（ひ）弊（へい）していた。
（長かった……）
もう二度とやりたくない。
「ようやく人並に仕上がりました。とはいえ、まだまだ神子候補としては不十分ですけど」
（仕上げられました）
クロエはコルセットで締め付けられ、無地のローブを着ている。模様は蔦のみ、蕾すらついていない。
ローブとは、本来ふわっとした物だとクロエは思っている。なぜ、コルセットなど締めなくてはいけないのか。

（確かに、神子というより聖女だわなあ）
飾り気の無い服だが、ローブというよりドレス。神官というより姫といういで立ち。
クロエは頭に何冊も本を載せた訓練を思い出しつつ、別邸にやってきたエラルドに丁寧なお辞儀をする。
「お久しぶりです。エラルド卿」
聖騎士とはいえ、騎士。なので、『さま』付けよりふさわしいとイネスに言われた。
「お久しぶりです。クロエ嬢。ご機嫌いかがでしょうか？」
「あまり好ましくありません」
クロエは正直に答える。今も、ふくらはぎの裏がぴくぴくしている。
「最悪でなければ上々です」
エラルドは笑顔で答える。この男、顔はいい。中身も、イイ性格をしている。イネスといいエラルドといい、侍女が侍女なら主人も主人だ。
「クロエ嬢が神子候補者として正式に受理されました。来週より試験を受けてもらうため、今から王都に向かってもらいます。基礎教育が間に合うか心配でしたが、よかったです」
「エラルドさまの命（めい）とあらば、イネスはがんばりました」
「一番頑張ったのは私です」
クロエはこれだけは言わなくては、と口にする。
「では、早速向かいましょうか」
クロエはエラルドに手を取られ、馬車へと向かった。

II

馬車は二頭立ての立派なものだ。
馬車に乗り、ふかふかしたクッションに座る。目の前にエラルド、横にイネスが座った。クッションはいいが、道のりからして腰が痛くなるだろう。
「では、これからの試験についてと、今までのおさらいをやっておきましょうか」
「はい」
クロエは、ぼんやり外の景色を眺める時間もないんだなと痛感する。なにせ、淑女の『し』すら知らぬまま生活してきたのだ。最低限の聖女候補らしさを身につけないと、犯人を見つける前に失格になりかねない。ギリギリまで教育したほうがいいというのがエラルドの判断だったのだろう。
「試験は王都の大教会で行われます。試験内容は僕にもわかりませんが、護衛騎士一人、使用人一人をつけることができるので、僕とイネスが同行します。わからないことがあれば適（てき）宜（ぎ）、聞い

てください」
簡単に話をまとめてくれるのが、この聖騎士のいいところだ。と同時に、いろんなことを省いているとクロエは思う。
「質問をよろしいですか？」
「はい。どうぞ、クロエ嬢」
「私はまだビルツ伯爵にお会いしていないのですが、問題ないのでしょうか？」
クロエにとって、かなり気になるところだ。一応、後見人として名前があがっている以上、一度くらい挨拶をすべきではなかろうかと思う。
「父は、今回の件を僕に一任しております。前回の神子候補を推薦したのは父であり、そのことについてかなり思うところがあるようです」
「どういうことですか？」
クロエは首を傾げる。
「前回の試験で亡くなった候補者チーロは、ビルツ伯爵家所縁（ゆかり）の者です。父は身内を神子にしようとしました。私と祖母が反対したにもかかわらず推薦し、二年前のような事態になったため、意気消沈しております」
クロエは金貨に目がくらみ、エラルドの提案を受けた。二年前の聖女候補チーロ殺害の犯人を捜せと言うが……。
（これってかなり責任重大だよね？）
改めてクロエはずんと重くなる。
「事件の概要については忘れていませんね？」
「忘れていませんよ」
クロエは頭の中で、チーロ殺害事件について聞いたことを思い出す。
聖女候補チーロは二年前、ビルツ伯爵すなわちエラルドの父によって推薦された。動物と心を通わせる祝福（ギフト）を持っていたという。
チーロは最終選抜試験中、クロスボウの矢に撃たれ殺害された。
殺害現場は、大教会の裏庭の聖獣の森。大教会は大きな外壁に囲まれており、クロスボウで狙える距離にいたとなれば、犯人は教会関係者しか考えられない。
その後、いろんな人間の思惑やしがらみによって、最終選抜試験は無効となり延期された。
しかもチーロの護衛騎士がいないときを狙った犯行であり、内部犯の可能性もあることから、聖女選抜試験は一度白紙に戻り、ようやく二年後、クロエを加えて試験が再開される。
チーロは聖女候補として、かなり有望だったらしい。誰が聖女になるかによって、利権が大きく動く。

なお、他の聖女候補もしくはその背後にいる人物が容疑者に上がったが、チーロ殺害の決定的な証拠はなかった。
「一応聞きますけど、私の身の安全は問題ないんでしょうか？」
「……大丈夫です」
「いや、間が空きましたよね!?」
クロエは目をそらすエラルドを睨（にら）む。
「大丈夫です！ 僕を信じてください！」
エラルドは、きらきらした目をクロエに向ける。妙に元気な語気が逆に怪しい。
「嘘か真（まこと）か微妙なところですね」
「僕の目を見てくださいよ！ 嘘なんて言うはずないです！」
さらに、数か月の間に妙に砕けた口調になった気がする。
「いえ。口ではいくらでも言えます。なので、こちらにサインを」
クロエは、さっと懐から紙を一枚取り出した。
「なんです？ これ？」
「危険手当の誓約書です。大教会滞在中、一日あたり金貨一枚でいかがでしょうか？」
クロエとて、ただで転んだりはしない。金払いが良い相手とわかれば、貰（もら）えるものは貰っておきたい。
「……かしこまりました」
「支払いは日払いで」
「クロエ嬢はお金で解決できるからいいですね」
「今、思っていても言っちゃいけないことを言いましたね」
クロエは思わず金額欄を増額するが、エラルドは大人しく署名した。馬車で揺れるので字が歪（ゆが）んでいる。
「ついでに、前の契約書をもう一度確認させていただけますか？」
何事も口約束は信用できない。「絶対返すから」という言葉は、賭場では「こんにちは」の挨拶よりも飛び交う軽いものだ。
「いいですけど、もう八回も確認しましたよね？」
「念のため。証票がはがれていたら、困りますから」
「……はい。イネス」
イネスは書類をクロエに渡した。汚れないように、薄いガラス二枚に挟んでいる。なお、写しはクロエ確認のもとで銀行に預けてあるので、反（ほ）古（ご）にはできない。
「日付良し、署名良し、証票良し」
「……見れば見るほど、神官見習いに見えない」
クロエがお金にがめついと言いたいのだろうか。
「その言葉、そのままお返しします。聖騎士さま」
エラルドこそ見た目は見事な騎士なのに、金で人を操ろうとする。大金をはたくのは、ボンボンだからというわけではなさそうだ。

しかし、次代の聖女を立てることより犯人捜しを優先させているように見える。ビルツ伯爵家にとって、チーロという人物が殺害されたことは余程問題らしい。
「犯人は聖女候補のうちの誰かでしょうか？」
「わかりません。少なくとも実行犯は違いますから」
「クロスボウですもんね」
クロスボウは殺傷能力が高い武器だ。殺意がなければ用いられないし、そんなものを聖女候補が大教会に持ち込めるとは思えない。
「思うんですけど、犯人捜しに特化した祝福（ギフト）を持った人はいないんですか？ 私みたいな不確定な特技じゃないほうがいいでしょう？」
「そんな都合のいい祝福（ギフト）を持つ知り合いはいませんね。いたとしても、祝福（ギフト）を使うのは無理です」
「どうしてですか？」
「あれ？ 説明されていませんでしたか？」
エラルドはイネスを見る。
「私はエラルドさまに『クロエさまに貴族の子女に混じってもおかしくない教育を』と命じられました」
イネスの顔は「そんな暇あるか」と言いたそうだった。確かにギリギリまで忙しかった。
「はい。わかりました。僕の説明不足です」
エラルドとイネスの関係性もなんとなく把（は）握（あく）しているクロエ。イネスのほうが年上のようなので、小さい頃から頭が上がらないのだろう。
「祝福（ギフト）は、祝福（ギフト）を持つ人間には効果が薄いのです。圧倒的に能力差があれば効果はありますが、ほとんどの場合は相（そう）殺（さい）されてしまいます」
「じゃあ、魔道具は？」
魔道具とは、名前の通り魔法が込められた道具のことだ。現代では魔法が使える者はほぼ絶えてしまったが、過去の魔道具は貴重だが残っている。また、便（べん）宜（ぎ）上魔道具と言っているが、祝福（ギフト）が込められた道具も魔道具と呼ぶ。
「魔道具も無理ですね。犯人捜しに使える魔道具があったら苦労しないんですけどねえ」
「今、さらっと流していますけど、つまり何の祝福（ギフト）もない私って、他の聖女候補に比べて大変弱い立場にあるのではないですか？」
「ははは」
「ふふふ」
エラルドとイネスは上品に微笑む。

（いやいやいやいや！）
クロエは舌打ちしそうになりながら、なんとか踏みとどまった。
「クロエ嬢、お手を」
「……」
クロエは無言で左手を出す。
エラルドはクロエの手首にバングルを付ける。銀製で、裏側に細かく文字が刻まれている。
「これは？」
「魔道具です。効果は五感を多少強化する程度ですけど、他の神子候補に何かしら祝福（ギフト）を使われた場合、身代わりになってくれるはずです。祝福（ギフト）は精神感応系の能力が多いので」
クロエが犯人捜しのために潜り込んだとはっきりさせるのはまずいということだろう。
「身代わり……ということは、これは使い捨てですか？」
「相手の祝福（ギフト）の力にもよりますが、何度も相殺すると魔道具の機能を失います。本当なら、もっと効力が強い物を渡したいのですが、神子候補が強い魔道具を身につけていると勘（かん）繰（ぐ）られますので、精々四回しか防げません」
「いや、四回って言っても……」
魔道具はかなり貴重だ。使い捨てとか言いながら、家一軒くらいは建つ値段だろう。
（これ、売ったほうが……）
「売ろうなんて考えないでくださいね」
「……」
「出どころなんてすぐばれるので、やめてくださいね」
念を押してくるエラルド。
「とまあ、他に何かあれば聞いてください。そろそろ……」
エラルドが馬車の外を見る。
建物が立ち並ぶ中、馬車は大きな通りを駆け抜ける。お上（のぼ）りさんではないが、クロエは声を出しそうになった。
辺境の鉱山の町とは全然違う。洗練されたたたずまいに、目をきらきらさせてしまう。
「あれが王城です」
大通りの突き当たりに、大きな門と壁が見える。
「大教会に行くのでは？」
「少し回り道をして見ておいたほうがいいと思いまして。正式に神子に就任された暁（あかつき）には、いくらでも呼ばれますので、入りたかったら頑張ってください」
「うふふふ、ご冗談はやめてください」
クロエは数か月の淑女教育の賜物を見せる。口元を手で隠すのを忘れ

ない。
エラルドとしては、自分の家が推薦した候補が聖女となったら色々便利なのだろうけど。
（祝福（ギフト）も何もない私にはお門違い）
せいぜい凡人であることがばれないようにするしかない。
馬車は王城に向かうことはなく、そのまま右へと進路を変えた。
王都を出て十五分ほど馬車を走らせた先に、これまた立派な建物が見えてきた。
王城とはまた違った荘厳な雰囲気を持っているその建物は高い城壁に囲まれており、二つの尖（せん）塔（とう）が見えた。大きなバラ窓が入口から見下ろすように出迎え、柱には聖女と聖獣の石像が彫られてある。
「王国一美しいと言われる大教会の大聖堂です。宿舎はその裏にありますので、しばらくそこに滞在します」
中央の大聖堂の後ろにも大きな建物がある。あれが宿舎なのだろう。
王城や大聖堂に比べるとかすむが、それでも立派な建物に違いない。
「時間はちょうどいいですね」
エラルドが懐中時計を確認すると、イネスがクロエの髪や服を丹念に調べる。
大聖堂の前には、別の馬車が止まっていた。クロエが乗っている馬車よりも質素だが、しっかりした造りのものだ。
「本当は荷物を置いてから行きたいところですが、もうお待ちの神子候補もいらっしゃるようです。このまま、大聖堂へと入りましょう」
エラルドは先に馬車を下り、クロエの手を引く。
ふわりとローブの裾がなびく。靴はシルク生地を使ったハイヒールだ。
（聖職者がハイヒールとか、変なの）
などと思いもしたが、聖女となると話は別なのだろう。外交に出ることも多く、他国の重（じゅう）鎮（ちん）と渡り合うためには、少しでも自分を大きく見せる必要がある。地面すれすれまで長いローブを踏まぬよう、指先でそっと摘まむ。
爪は甘皮まで綺（き）麗（れい）に処理され、髪も化粧も派手ではないがしっかり整えられている。すっぴんではないのに、まるで素顔のような素晴らしいメイク術は、聖女選抜試験が終わる前にクロエも会得しておかねばと思う。
よくもまあそれなりに見せてくれたものだとイネスに感心しつつ、クロエは大聖堂へと足を踏み入れた。

III

聖女選抜試験は四次審査まで行われる。一次審査は、推薦状と神子と

しての規定を満たしているかの書類審査で合格済みだ。クロエは途中の審査はやっていないが、今の時点で数百名いた聖女候補が五人まで絞られている。ほぼ最終選考と言ってもいい。
大聖堂の前室に入ると、神官見習いらしき少女が出迎えてくれた。
「お待ちしておりました。クロエさま」
少女は深々と頭を下げる。袖の蔦の長さと蕾の膨らみから、クロエと同じ位の神官見習いだとわかる。
「こちらへどうぞ」
大聖堂の身(しん)廊(ろう)を歩くクロエ。後ろには、推薦者代理兼護衛としてエラルドがいる。イネスは荷物を持って先に宿舎へと向かっていた。
少女はクロエの案内役のはずだが、クロエではなくエラルドをちらちらと見ていた。
(見た目がいいもんね)
エラルドは、まさに聖騎士という風貌だ。クロエが多少は聖女候補として見えるとしたら、エラルドというオプションのおかげかもしれない。せめて少しでもマシに見えるように、クロエは背筋を伸ばす。
(頭に本が載ったイメージで)
アーケードを通ると、祭壇が見えてくる。バラ窓からステンドグラスの色とりどりの光が零(こぼ)れ、神秘的な光景が出来上がっていた。
祭壇の前にはすでに聖女候補が二人。それぞれ一人ずつ護衛の聖騎士がついている。
(あら、可愛い)
一人は、クロエよりも若い小柄な女の子だ。栗色の髪に青い目をしており、ほわんとした印象を受ける。護衛には、ひげを蓄(たくわ)えた中年の男性がついている。
(神官見習いモニク、十五歳)
クロエはイネスに叩きこまれた情報を思い出す。渡された資料にあった顔だ。
敬(けい)虔(けん)なアルブ教信者を両親に持つ。五歳の時、娘が祝福(ギフト)を持っていると両親が言い、教会が引き取る。神官見習いらしく、化粧っ気は全くない。紅(べに)の一つも引いてないが、桜(おう)桃(とう)のようなぷるんとした唇と、桃のような頬を持っている。
ビルツ伯爵家の情報網は恐ろしい。調べられることは徹底的に調べ上げられている。クロエもまた同じように他の聖女候補たちに調べられているとしたら、心臓に悪い。
五感強化の魔道具をつけているせいか、ステンドグラスの光がちらつく中でもはっきりモニクの顔を確認できた。

クロエは、もう一人の聖女候補を見る。
（こちらは、ぞっとするような美人）
息をするのも忘れそうな儚（はかな）げな美女は、ストレートの黒髪に赤い目が白いローブによく映えている。護衛は細身の青年……いや、女性のようだ。
（商家の娘サロメ、二十一歳）
両親は平民であるが、十三歳の時、子爵家の養女に入っている。数年後、養父となった子爵はあまりに美しく成長してしまったサロメを養女にしたのを後悔したという話まである。つまり、国を傾けそうな美女だ。
幾度となく彼女の前には求婚者が現れ、敗れ、時に刃（にん）傷（じょう）沙（ざ）汰（た）となっている。彼女の類（たぐい）まれな美貌と異性をひきつけてやまない魅力こそが、神から与えられた祝福（ギフト）だと言われている。バラ窓のステンドグラスからこぼれる光さえ、彼女の美しさを演出しているように見えた。
来た順番に並んでいるので、クロエはサロメの隣に立つ。特に問題がない行動だと思ったが──。
「どきなさい」
後ろから、いかにも高慢な声が聞こえた。振り返ると、見事なブロンドに菫（すみれ）色の瞳を持った長身の美女がいた。護衛は三人、皆美青年だ。
エラルドから護衛は一人と聞いていたが、まずこの時点でオーバーしている。
（侯爵令嬢ヴィオレット、二十歳）
聖女候補者の中では、一番地位が高い。
「中央には私が立ちます。あなたはどきなさい」
扇を手にしたヴィオレットがそう言い放つ。真っ白なドレスは皆同じだが、ヴィオレットのものは蔦模様の他に、レースや細かい刺繍が至るところに見えた。あと、胸とくびれが強調されている。ギリギリ品は保たれているので、そこは仮にも侯爵令嬢といったところだ。

実家は名門貴族で、家系には優秀な者が多く、王家の信頼も厚く重鎮として幅を利かせている。ただ一人、末娘のヴィオレットをのぞいて──と報告書には書かれていた。
家系からは聖女候補を多く輩出しており、十年前はヴィオレットの叔母が候補になっている。
「……」
聖女候補になった時点で俗世のしがらみは関係ないというが、完全に無視している。とはいえ、平民、よく言って神官見習い程度のクロエ

が逆らう意思を見せるわけにはいかない。
クロエは、そっと横に移動する。
「わかればいいわ」
ふふん、と鼻を鳴らすヴィオレット。
（どうしよう、腹立つタイプだわ）
こんなのが聖女候補者になれるというなら、アルブ教も腐敗しているのではなかろうかと勘繰る。まじまじ観察していたら、難（なん）癖（くせ）をつけられかねない。
クロエは距離を置きたくて端っこに立ったことで、最後に来た聖女候補者がその間に入った。
銀色の髪に青灰色の目をしている美少女。彼女の護衛も女性騎士のようだ。
（伯爵令嬢ゾエ、十七歳）
クロエと同い年だ。まだ少女っぽさが抜けきれない表情をしており、ちらちらと周りを見ている。
この四人は、二年前の選抜試験を受けていた。
（さてここで）
神官見習いクロエが加わる。他の四人が美女、美少女ぞろいの中で、少しいたたまれない気分だ。
（癖がある赤毛に、どこにでもあるとび色の目を持った普通の子が混じりまーす）
かろうじてイネスのナチュラルメイク術のおかげで、いくらか盛ることはできた。しかし、同じ衣装を皆着ているだけ比較しやすくなるとは因果なものだ。
（書類審査の対象に容姿が入ってる！）
エラルドはどれだけ金を積んで一次審査を受からせたんだ、と突っ込みを入れたかったが、当の聖騎士さまは清（せい）廉（れん）潔白という顔で堂々とクロエの後ろに立っている。
そうして並んで待っていると、聖堂に大神官がやってくる。ふくよかな体型をした老人だ。長々と説教を行い、一人ずつ聖女候補の名前を呼ぶ。
クロエはいたたまれない気持ちをなんとか押し込めて、背筋を伸ばす。
金貨五百枚のために、自分のみじめさなんて気にしている暇はなかった。

サロメ
聖女候補の一人。絶世の美女で、過去に彼女をめぐって刃傷沙汰も起きている。
ヴィオレット
聖女候補の一人。名門貴族の令嬢だが、振る舞いは非常に高慢。
ゾエ
聖女候補の一人。神秘的な雰囲気を纏う、お洒落好きな伯爵令嬢。
モニク
聖女候補の一人。ほわんとした雰囲気で周囲を和ませる、可憐な神官見習い。

イネス
長身の美人で、クロエの侍女として調査に同行する。鉄面皮だが、可愛いものには目がない。
エラルド
クロエに殺人事件の調査を依頼した聖騎士で、自身も護衛としてクロエと行動を共にする。美形の好青年だが、商人気質で食えない一面も。
ラズ
青い体毛と金色の目を持つ聖獣。ナッツが大好物。
クロエ
辺境の教会に勤める神官見習い。賭け事が得意で、相手の心理を巧みに読んで勝ちを重ねる姿から『豪運の聖女』とも呼ばれている。エラルドからその特技を見込まれ、多額の報酬と引き換えに、二年前の殺人事件の調査を請け負うことになる。
登場人物紹介

二章 ── 聖獣の森

I

お偉い大神官さまのありがたくも長い長い話が終わったのは、一時間ほど経った後だった。
立ちっぱなしで疲れたところで、ようやく部屋に案内される。
宿舎は大きな棟が二つあり、男女別に分かれている。しかし男子禁制というわけではなく、女子寮にエラルドもついてくる。護衛だから特別なのかなとクロエは思う。
「こちらです」
最後までクロエではなくエラルドを見ていた、案内役の神官見習いの少女。
（名前おぼえてやんねーぞ）
クロエは些細なことを恨みつつ、部屋に入る。大きな照明が天井からぶら下がり、猫足の家具が置いてある。平民なら十人くらいは住めそうな広さに、寝室は別らしく入口の他に扉が四つついていた。一つは寝室、もう一つはバスルーム、あと二つは何だろうか。
神官見習いの少女は簡単に部屋の説明をすると、名残惜しそうにエラルドを見ながら部屋を出ていく。ドアの閉め方が雑だったのか、やたらバタンという音が大きかった。
「クロエさまは丁寧にドアを閉めてください。気を付けないとすぐ音が響きますので」
「わかりました」
イネスは荷物を完全に片付け終わっており、今はお茶の準備をしていた。
クロエは豪（ごう）奢（しゃ）な部屋の造りに、驚きと共に呆れが混じる。聖職者ならもっと清貧を美徳にすべきではないだろうか、などと自分のことを棚に上げて思う。
「お布（ふ）施（せ）の無駄遣い」
「いえいえ、経済を回しているんです」
クロエの率直な感想に、エラルドが突っ込みを入れる。
「経済を回すって……」
クロエはレースのテーブルクロスを手にする。
「いいレースでしょう。大量生産できないので人材育成を頑張ったそうです」
クロエは棚の花瓶を眺める。
「釉（ゆう）薬（やく）の青が美しいでしょう。独占状態から販路を取るのが大変でした」
クロエは毛足の長い絨（じゅう）毯（たん）を見る。

「一枚織るのに五年かかるそうです。緻密な絵柄が人気なんですよね」
エラルドは、したり顔だ。
「全部、アプトビルツ商会ですか？」
クロエは確認するように訊ねた。
正解と言わんばかりに、エラルドとイネスが拍手する。
『アプト』というのは、エラルドの祖父の旧姓だ。確かビルツ家とアプト商会がつながったことで『アプトビルツ商会』になったと聞いたことがある。
「ええ、うちはたんまりお布施しておりますから、教会も気を使ってくれるんです」
キャッシュバック方式らしい。とことん、エラルドは見た目にそぐわぬ性格をしている。
「さて、僕の部屋はこちらですね」
エラルドは残りのうちの一つの扉を開ける。
「隣の部屋なんですね？」
クロエは不思議そうな顔で見る。のぞき込むと、小さいがちゃんとした部屋の造りになっている。普通なら侍女あたりが待機していそうな部屋だ。もう一つ部屋があるので、そちらはイネスの部屋になるのだろう。
「ええ。護衛なので特別です」
「失礼ですが、大丈夫ですか？」
「何が？」
首を傾げるエラルド。
（純情ぶりやがって）
「いえ、エラルド卿ではなく、他の護衛や聖女候補たちについてなんですけど。あんな美女、美少女ばかりいるので」
クロエは他の聖女候補者たちを思い出す。クロエはともかく、他の美女、美少女たちが異性と隣接した部屋だというのは、どんなに信頼がおける聖騎士を護衛にしていたとしても、周りは気にするのではないか。
（女性騎士もいたけどさ）
基本、聖騎士は男性で構成されているので、護衛を全員女性に替えることなどできないだろう。
（いや、聖女候補っていうからそういう人選はしっかりしていると思うけど）
クロエは気になりつつ、挙手する。
「質問いいでしょうか？」
「なんなりと」
「女子寮なのに、男性騎士が寝泊まりしても大丈夫なのでしょう

か？」
少し遠回りして聞いてみた。
エラルドはクロエの意図がわかったらしく、少し気難しい顔をする。
「……そこのところはご安心ください。聖騎士は、人格的にも問題がない人選です。さらに何かあってはいけないので、何も起こらないように一時的に処置してあります」
「処置？」
「……お察しください」
エラルドの表情が曇った。クロエの視線は自然とエラルドの股に移動する。イネスが壁を向いて笑いをこらえていた。たぶん追及すると、護衛の皆さんに恥をかかせる内容になるとクロエは察知する。
（話題を変えよう）
イネスが椅子を引くので、クロエはそこに座る。
「じゃあ、作戦会議といきたいんですけど」
壁に耳があるから気を付けろということわざがある。ここはビルツ伯爵家の別邸でもないので、堂々と話していいだろうかと目配りする。
「安心してください。神子候補たちの部屋は、他の部屋よりも防音性に優れています。あと、念のため音を消しておきますね」
エラルドは懐から巻貝を取り出す。おそらく魔道具だろう。
（どんだけ金持ちなんだ？）
クロエは報酬を金貨五百枚と言わず、千枚、いや二千枚にしてもらってもよかったのでは、と後悔した。
イネスが淹（い）れたお茶の波紋を見ながら、クロエは口を開く。
「他の聖女候補って、それぞれどんな祝福（ギフト）があるのでしょうか？」
「いきなり難しい質問しますね」
「難しいも何も、私が嘘を見破るように相手も心を読めたりしたら意味ないじゃないですか？ そのためにこれをつけているんですよね？」
クロエは左手首につけたバングル型の魔道具を見せる。
「まー、そうですけど」
エラルドはふざけつつも言葉を選ぶように、一息つく。目を瞑（つぶ）るのが彼の癖のようだ。
（目はしっかり開けて欲しいんだけどな）
クロエは、相手の目を見て嘘を見破ることが多い。いかに表情は平静を装っても、瞳孔の変化は隠し通せない。他に相手の癖や、体臭の変化も確認する。五感強化の魔道具は、クロエにとって相性がいい。
「正直なところ、四人の神子候補者たちの祝福（ギフト）はわかりません。むしろ、祝福（ギフト）自体があるかもわからないですね」
「……ど、どういうことですか？」
クロエは思わず前のめりになるが、横でイネスの目が光っているの

で、すかさず元の姿勢に戻る。
「祝福（ギフト）とは、人が本来持たぬ異質の能力のことです。けれど、絵本に出てくる大魔法使いの魔法ほど万能ではない。なので、時に〝神子として扱うに準ずる能力〟があれば、候補者として指名できるわけです」
「ちょ、それは……」
クロエは手を震わせながら伸ばす。
「私のことも最初から……」
「はい。商売柄、嘘を見破る人を多く見てきました。クロエ嬢ほどの精度の方はいませんでしたけどね」
エラルドは、朗らかな口調で言ってくれる。
「じゃあ、神子とか聖女とか言いながら、結局は普通の人ってことなんですね？」
「それは違います。人智及ばぬ力を持つことはなくても、神子候補者の中に無能な人はいません」
エラルドが断言する。
「つまり、クロエ嬢もまた認められた一人ということですよ」
「その言い方はずるいですね」
クロエはむうっとなりつつ、思った以上に難航しそうだと考える。
「正直なところ、四人の中で一番怪しいのは誰でしょうか？」
「先入観を与えたくないので話したくないんですけど」
「優先順位をつけたいんですよ」
正直、一番わかりやすいが一番付き合いたくないのはヴィオレットだ。あの金髪女の名前が出そうで怖い。
「そうですね。サロメ嬢でしょうか」
「サロメさま？ あの飛び切り美人ですか？」
「はい、飛び切り美人です。社交界で彼女がデビューした舞踏会では、彼女を取り合う男たちの乱闘で十七人の重軽傷者がでたということです。サロメ嬢、十四歳のときですね。他にも何度か傷害事件が起きています」
「うわあ、魔性」
エラルドは、報告書に書かれてある内容より詳しいことを教えてくれる。
「ええ。あまりに人が魅（み）入（い）られるものですから、神より賜（たまわ）った祝福（ギフト）ではないかと言われています」
「言われていますね」
祝福（ギフト）かそうでないかは別として、サロメは『魅了』を使う人だとわかった。
「そんな国を傾けそうな美女が怪しい理由はなんですか？」
「チーロとサロメ嬢は、前回の選抜試験の中で比較的仲が良かったそ

うです。チーロと最後に話していたのはサロメ嬢だという目撃情報がありました。ただ、チーロが殺害される数日前、何かもめている雰囲気だったそうです。何やら、サロメ嬢がチーロに対してしつこく話しかけているようだったと」
（わーお）
しかし、これだけでサロメがチーロ殺害犯だと立証できるわけがない。
「他には？」
「チーロが死んだとされる時間、サロメ嬢は部屋で待機していたと供述していました。侍女だけが一緒にいたそうです」
「侍女ならアリバイの証明にはならない、ということですよね？」
クロエは護衛が待機する部屋を見る。護衛は聖女候補者一人につき、最低一人はついている。
「護衛はどうしたんでしょうか？」
「護衛もサロメ嬢のアリバイを主張していますね。ずっと部屋にいたわけではなかったようですけれど」
ふうん、とクロエは頷（うなず）く。護衛の証言も、証明にはならないだろう。
「今回の騎士は、前回と同じ騎士ですか？」
「そうです。彼女の魔性の美貌では、護衛を男性騎士にするのは問題があります。サロメ嬢に興味がない人が選ばれました。女性騎士だったのは覚えていますか？」
「なるほど」
下（へ）手（た）に美人すぎると面倒だという一例だ。
「エラルド卿は大丈夫なんですか？」
クロエは正直に聞いてみる。
「ご安心を。僕には金の力など色々あるので」
「……そうですか」
説得力のある答えだ。クロエに魔道具を持たせているので、本人も何かしらの魔道具を持っているのだろう。
「わかりました。まずはサロメ嬢に接触をはかります」
「よろしくお願いします」
丁寧に頭を下げるエラルド。
「では、夕食の時間まで、好きなようになさってください。教会を散策するもよし、図書館で読書するもよし、聖堂で祈るもよし」
「サロメ嬢が好んで出没する場所はどこでしょうか？」
「現在はどうかわかりませんが、前回の試験では大聖堂の裏庭、聖獣の森近くの東屋（フォリー）で読書することが多かったそうです」
「聖獣って、確か……」
クロエは大聖堂の柱にあった彫刻を思い出す。

「なんかリスみたいな動物ですよね？」
クロエは聖獣を絵本や教本の挿（さし）絵（え）でしか見たことがない。ふさっとした尻尾（しっぽ）を持った小動物だ。
「はい、そうです。正式名称は百字以上になりますが聞きますか？」
そう答えたのはイネスだった。彼女はなぜか聖獣絵画集なる本を持っている。そして、心なしか目が輝いていた。
「遠慮しておきます」
「聖獣はリスのような生き物で、毛並みの色は個体によって多種多様。希少で絶滅危（き）惧（ぐ）種（しゅ）と言われています。なぜ聖獣と呼ばれるかと言えば、アルブ教の伝承によります。死んだ聖者は一度聖獣に生まれ変わり、さらに神子へと生まれ変わると言われています。聖獣の色は、生まれ変わった聖者の魂の色だと言われますが、どこまで本当か怪しいところです。あくまで伝承なので」
正式名称の代わりに聖獣の説明を始めるイネス。
「イネスさん、ここ数か月で一番饒（じょう）舌（ぜつ）ですね」
「ここでは立場上、敬称略でお願いします」
クロエは聖女候補、イネスはその侍女だ。
「さん付けしないと落ち着かないんですけど」
「心の中で敬称を忘れずに」
（イネスさん……）
いい性格した侍女だ。
「大教会では聖獣を保護しています。一度見てみたいですか？」
「余裕があればお願いします」
「かしこまりました。クロエ嬢。騎士としてお供いたします。聖獣の森へとご案内しましょう」
ちょっと茶目っ気を含んだ言い方で、エラルドが膝をついた。
「エラルド卿、一つ注意を」
「なんでしょう？」
「ほいほい女性の前で膝をつかないでください。勘違いしてしまいそうになるので」
クロエとて、金にはうるさいが一応年頃の娘だ。
「ご安心を、私はクロエ嬢の護衛なので、他の女性の前では膝をつきませんよ」
にこにこと笑うエラルド。
（本当かな？）
クロエは疑いの目を向けた。
こういう顔がいい男には気を付けろ、と酒場の女将（おかみ）が言っていたことを思い出す。
「では、行きましょうか」
「そうですね」

クロエに代わり、イネスが返事をする。妙に目を輝かせていた。手にはナッツを持ち、小動物を手懐ける気満々に見える。
「イネスは留守番です」
「チッ」
（今、舌打ちした。舌打ちしたよ！）
クロエは、エラルドとイネスの主従関係が心配になってくる。
「クロエ嬢」
「なんですか？」
「聖獣の森に向かう前に、こちらを付けていただきたいのですが」
エラルドが渡してきたのは、黒いレースのリボンだった。
「別にいいですけど、どうしてですか？」
エラルドは少し悲し気な笑いを浮かべる。
「聖獣の森で、チーロは亡くなりました。祈る時間をいただけませんか？」
「……わかりました」
クロエは頷くと、癖のある赤毛を黒いリボンで束ねた。

II

煉（れん）瓦（が）が敷き詰められた歩道、その脇には花壇。教会ということもあって、表には白を基調とした花が植えられていたが、裏庭は逆に絢（けん）爛（らん）さが現れていた。
薔（バ）薇（ラ）が色とりどりに咲き乱れて、アーチを作っている。小さな薔薇は足元を彩るように配置され、香りが充満していた。今が真っ盛りだ。
落ちた花びらを踏むのももったいない。綺麗な花びらだけかき集めて、煮詰めてジャムにしたいくらいだ。
（養護院の子どもたちが好きなんだよな）
ろくでもない悪餓鬼ばかりだが、ちゃんと飯は食っているだろうか。
薔薇のアーチを過ぎたところに、大きな東屋（フォリー）がある。
ドーム型の屋根に円柱（エンタシス）が伸びている。東屋の中央には、羽根を付けた聖獣の石像が立っていた。小動物が神聖化されていて、少し面白く感じる。
「いないですね」
クロエは小声で話す。
「そうですね、聖獣が見たければ、奥の森へ向かいましょうか？」
エラルドがそう返事をするが、ここでいうクロエの「いないですね」にかかる言葉は、サロメのことだ。エラルドもわかっていて、こう口にするのは周りの誰かが聞いていないか確認するためだろう。
東屋を通り抜けると、広葉樹林の森が広がる。地面は落ち葉が堆積し、ふかふかしていた。

「この教会は、元は要塞だったとご存知ですか？」
「イネスの授業で簡単に習いました」
ミュトス王国は、かつて魔女と呼ばれ追い出された人間が集まってできた国だ。魔女の末（まつ）裔（えい）たちは建国の際、幾度となく戦（いくさ）を行った。その時に造られた要塞の名残が、大教会の外壁だという。
「籠城の際、この森のどんぐりや城壁の蔦の汁をすすって餓えをしのいだそうです」
「知っています。だからですよね？」
クロエはローブに刺繍された蔦模様をエラルドに見せる。過去の歴史を忘れないために、神官のローブには蔦が、教会関連の構造物にはどんぐりがあしらわれる。なお、聖獣は餓えた民にどんぐりを与えてくれたことで神格化されたらしい。
「こちらです」
エラルドについて森を突き抜けると、小さな泉があった。泉の周りでは、様々な色の小動物がくつろいでいる。
「……これが聖獣ですか？」
挿絵で見るのとずいぶん雰囲気が違う。ふわふわとした大きな尻尾に、口いっぱいに食糧を詰め込んだ頬袋。リスに似ているが、明らかに違うのは特殊な体毛の色と、くるんと額についた羽毛のような毛だ。鬣（たてがみ）に分類されるだろうが、どちらかと言えば──。
（あほ毛っぽいなあ）
ちゃんと切りそろえているのに、ちょんと出てくる髪の毛みたいだ。
小さい聖獣がエラルドとクロエに近づいてきて、くんくん鼻を動かしている。
「野生の聖獣は警戒心が強いのですが、ここの聖獣たちはこの通り」
「とても賢い生き物じゃなかったんですか？」
これでは、まるで飼いならされたリスと変わらない。近づくだけでなく、青い聖獣がエラルドの足から上へと上っていく。
エラルドは、肩に乗ってすりよってくる聖獣を指先で撫でる。
「まだ若い個体ですね。生まれて数年くらいでしょうか？」
「数年で若いんですか？」
「聖獣は五十年以上生きる個体もいますので。しかし、こんなに人に馴（な）れているのを見るのは初めてです」
（長生き！）
クロエは首を傾げつつ、エラルドの肩に乗った聖獣を見る。他の個体に比べて一回り小さく、毛色は青く、目は金色をしている。
青い聖獣は、小さな前足をちょんちょんとクロエのほうに向けていた。
「青金石（ラズライト）みたいですね」

青い聖獣が小さな前足をぱたぱたさせると、クロエとエラルドは、ほわーっと毒気を抜かれる。イネスを連れてこなくて正解だったと思う。
「ずっと見ていたい」
エラルドは名残惜しそうに、青い聖獣を木の上に置く。
「じゃあ、行くね」
聖獣は何かを訴えるように前足を振るが、何が言いたいのかわからない。
「まるで人語を理解しているようですね」
「かなり賢い動物だと聞いています。でも、さすがに人語はわからないでしょう」
エラルドは森をずんずん進む。クロエはその後ろをついていく。
青い聖獣以外にも、赤や黄色、紫の毛色もいた。さっきの聖獣とは違い、他の聖獣は木の上からクロエたちをじっと見ているだけだ。
「この先が、チーロの亡くなった場所です」
森の中に、ぽつんと広場がある。大きな切株があり、まるで絵本の挿絵のような光景が広がっていた。
その切株の上で、聖獣たちが木の実を並べている。さっきの青い聖獣も、いつの間にか加わっていた。
「ここで、切株の上にうつ伏せになって死んでいたそうです」
クロエは首にかけた蔦のリースに触れると目を瞑り、膝をついて祈りをささげた。
まだ幼い少女が死んでしまった。たしか十三歳だという。それを思うと、社交辞令抜きに、しっかり追悼の気持ちを込めなくてはと思う。
エラルドも、祈りをささげる。
数分黙（もく）祷（とう）をささげたあと、クロエは立ち上がる。
「クロスボウの矢に撃たれたんでしたね」
エラルドは頷く。
クロエは周りを見るが、木に囲まれた森の中、どこからクロスボウで狙ったというのだ。そして、森の中で撃たれたというのならば、この場所も危なくないのだろうか。
「ご安心を。物理攻撃なら跳ね返せる魔道具を持っております」
さすが、金で殴るタイプの聖騎士だ。
「いくつ魔道具を持っているんですか？」
「今あるのは、これくらいでしょうか？」
指を三本立てるが、嘘の匂いがする。あと一つ二つ、隠し玉があるのだろう。
「嘘つき」
「嘘は言っていませんよ」
ニコニコと笑うエラルドを問い詰める気はないので、話に戻る。

「クロスボウの射程距離ってどれくらいなんですか？」
「大きさによりますね。大型だと百トワーズくらいですが、有効射的距離は二十トワーズくらいだと思います」
大人の両手を広げた長さが一トワーズ（二メートル）。クロエはぐるりと周りを見る。森の外から撃ったとしても、当たるものとは思えない。
「殺害されたのは、本当にこの場所ですか？」
「クロエ嬢はするどい。歩きながら話しましょう」
クロエはエラルドについていく。
「なぜ、殺された場所が違うと思ったのですか？」
「普通にクロスボウの使用に向かない場所でしょう？ 矢が的に当たらないと意味がないです。犯人は聖獣の森までクロスボウを所持できる状況でしょうか？」
「無理でしょうね。僕ら護衛の聖騎士ですら、所持が許可されているのはあらかじめ登録された剣を一振りのみです」
「はい。私が犯人だとして、そこまで近づけるなら普通にナイフを隠し持って刺すほうが早いと思います」
わざわざクロスボウを用意する理由はない。
「いやあ、その通りの見解ですよ」
「じゃあ、実際はあの場ではないんですね？」
クロエは確認する。
「そういう証拠はありましたが、実際どこで殺害されたかについてはわかっておりません」
「どうして？ 周りの状況や遺体を調べれば、わかることじゃないですか？」
エラルドは眉を下げる。
「父……ビルツ伯爵が、チーロの遺体の検分を拒んだのです」
「は？」
クロエは呆れた声を出した。
「犯人を捕まえるために必要なことでは？」
「ええ。教会側の抵抗もありましたが、犯人捜しを優先するためにやるはずでした。でも、ビルツ伯爵は許さなかったのです」
「……何それ」
まだ十三歳、子どものような聖女候補の遺体を、死してなお辱（はずかし）めを受けるような真似はさせたくないという道理もわかる。でも、結果として苦労しているのはどういうことだろうか。
「遺体を検分する優秀な医者が、父とは反対の派閥だったのも理由かもしれません」
エラルドは微妙な表情を浮かべている気がしたが、クロエの視点では彼の表情は見えなかった。

「私、ビルツ伯爵に会わなくて正解だったかもしれないです」
「はい。僕も父とは反りが合いませんので」
ぽつぽつと話しつつ歩き続ける二人。
「ここが教会の敷地の一番北側です」
森の端に行きつくと、城壁が見えた。蔦に囲まれて完全に緑に飲まれていた。
年に一度、蔦を刈り、汁を煮詰めた水飴を作る。普通に店で売っているケーキのほうが美（お）味（い）しいが、宗教的にありがたみがあるということで、配られた一瓶の水飴は辺境の教会でも大切に振る舞われるのだ。
城壁の前には、大きなテーブルのような石と、椅子のように配置された石がある。
「ここは、かつて最初の神子たちが話し合ったという場所です。蔦の水飴と、どんぐりのクッキーで茶会をしたとか」
「質素ですね」
エラルドの説明を聞きつつ、クロエは周りを見る。
城壁の高さは四トワーズを超えている。城壁の周りには堀はなかったはずだ。
城壁の外では騎士団が訓練しているのか、掛け声が聞こえる。
「教会の北側には、聖騎士団の宿舎と訓練場があります」
クロエは蔦が茂った城壁をまじまじと見る。
「蔦を使って外壁を上れますか？」
「無理ですね」
エラルドは外壁の蔦を引っ張る。太い蔦だが、意外にもあっけなくぶちっと千（ち）切（ぎ）れる。
「この蔦は繁殖力が強い一方で、脆（もろ）いんですよ。また、下から上に生えているので、上るのは無理ですね。何より毎年、水飴を作るために太い蔦は伐採していますから」
「城壁にロープを引っかけるのも難しいですか？」
「簡単に引っかけられるようにはできていないはずです。何より、チーロが殺害された時刻は昼間。不審者が訓練中の聖騎士団の目をかいくぐって城壁を上るのは不可能でしょう」
クロエは唸（うな）る。
「思ったんですけど、こういう風には考えられませんか？」
「どんなです？」
「まずチーロさんをナイフや毒、とりあえず違うもので殺害。その後、クロスボウを使わずに矢だけチーロさんの体に突き刺すと」
そうすれば、矢さえ持ち込めればいい。
「なるほど。でも、致命傷はクロスボウの矢でした。専門家による検死は行われていませんが、背骨を砕き、心臓を貫かれていました。腕

力だけでそれだけ深く突き刺すことは不可能でしょう？」
心臓を貫くほど強く矢を刺す。しかも背骨を砕くほどに。
（返り血が飛ぶ）
聖女候補たちのローブは白、そんなことをすれば目立ってしまう。護衛騎士がやったとしても難しい、いや不可能だ。
「たとえ私が聖女候補たちの誰かが犯人かわかったとしても、凶器の持ち込み方法が判明しなければ断罪は難しいでしょう」
（証拠不十分で立件できなくても、前金は絶対返さないからな！）
クロエは視線でエラルドにそう訴えかける。
「質問ですけど、遺体の第一発見者は誰なんですか？ やはり、サロメさまでしょうか？」
「いえ」
エラルドは視線をそっと森の方へとずらすと、人影が出てくるのが見えた。
「あっ」
可愛らしい声に、素朴な笑み。
そこには、野花を体現したかのような可憐な少女、モニクが立っていた。
クロエと同じ平民出身で、聖女候補の中では最年少だ。彼女はおじさん騎士を連れていた。
クロエはローブの端を掴（つか）み軽くお辞儀をすると、モニクも真似するように返す。
「改めまして、モニクさま。今回、新たに選抜試験に加わった聖女候補のクロエと申します」
本来、聖女候補に階級の優劣はないが、とりあえずクロエが先に挨拶をすることにした。エラルドもクロエに従って礼をする。
「クロエさま。わたしはモニクと言います。よろしくお願いします」
実年齢よりもいくつか幼い雰囲気が残る喋（しゃべ）り方だ。お付きのおじさん騎士は、そんな彼女を微笑ましそうに見ている。
クロエは、石テーブルを見ながらモニクに笑いかける。
「モニクさまも巡礼ですか？」
クロエは何事もなかったかのように話し出した。
「かつて聖女さまたちがこのテーブルについて国の将来を話し合ったと思うと、すごいですよね」
辺境出身の者にとって、大教会は生涯に一度は向かいたい憧れの地だ。しかも、一般教徒が入れるのは、門から大聖堂の中の一部だけ。こうして歴史上、意味ある場所に向かうことはそれだけで巡礼を意味する。
「いえ。わたしの場合」
モニクの髪の中から聖獣が顔を出した。それも一匹や二匹ではない。

「みんなでお茶をしようと思ってたんです」
モニクは何食わぬ顔で、石の椅子に座る。テーブルに布包みを載せ開くと、中からたくさんの木の実が出てきた。
わらわらと聖獣たちがやってきて、モニクに木の実をねだる。
（勝手に座っていいんだ）
クロエはそう思いつつ、木の実を食べる聖獣を見る。さっきの青い聖獣も、木の実争奪戦に混じっていた。
（楽しそうだけど）
一応、クロエにとっては誰しも疑ってかかるべき人物だ。
「一緒にどうですか？」
クロエに胡桃（くるみ）を渡そうとするモニク。
「ありがとうございます。でも、私はまだこの場に不慣れなもので、今日は巡礼だけをやっていこうかと」
一人だけ新入りなのを利用して、教会内部をしっかり確認しておきたい。人間の心情を読むには、周りの環境も確認しておいたほうがいいのだ。
「残念です」
アーモンドを齧（かじ）るモニク。食べる仕草が小動物っぽい。
「それではまた」
「はい」
にっこり笑うモニク。聖獣に囲まれて楽しそうだ。まるで聖獣たちと話しているようにさえ見える。
「クロエさま」
「はい？ なんでしょうか？」
「チーロさまは、クロエさまがあぶないことをするのを嫌だと思っています」
クロエはぞくっとした。
まるで見透かされたような言葉だ。
「……そうですか」
何食わぬ顔で背を向けて歩くが、クロエは内心緊張していた。

モニクたちから十分離れたところで、クロエはエラルドに話しかける。
「話していたのが聞こえていたのでしょうか？」
「いえ、たぶん違います」
エラルドが神妙な面（おも）持（も）ちをしている。
「おそらく、モニク嬢の祝福（ギフト）が関係しているかと」
「祝福（ギフト）……」
「詳しくはわかりませんが、モニク嬢の祝福（ギフト）もチーロと同

じく、動物と心を通わすものであると聞いています」
「つまり、さっきの会話が聖獣を介して筒抜けじゃないですかー」
「詳細まではわからないと思いますけど、厄(やっ)介(かい)ですよねえ」
「もしかして、チーロさまの遺体の第一発見者というのは?」
「ええ、モニク嬢です」
第一発見者で、なおかつ祝福(ギフト)を持っている。
そんな相手に対して何か情報を引き出せるのだろうか。クロエは不安になりつつ、肩を落とす。なんだか頭も重い気がする。
「きゅっ」
「きゅっ?」
クロエの耳に妙な鳴き声が聞こえた。
「おや」
エラルドが微笑ましそうにクロエの頭頂部を見ていた。
クロエは自分の脳天に触れると、普段のくせ毛とはまた違った、ふわっとした毛並みの感触があった。
「きゅぅ」
青い聖獣が、クロエの頭に乗っかっていた。

三章 ―― 聖女のお茶会

I

クロエは、無表情のまま踊る侍女を見ていた。
「どうしましょうか？」
「飼う気満々ですねえ」
エラルドも呆れている。
クロエの頭に乗った聖獣は、そのままクロエたちの部屋までついてきてしまった。あとで森に戻そうかと思っていたら、イネスに見つかり、今に至る。
イネスは口をきゅっと閉じ、でも頬を赤らめ、目を潤（うる）ませていた。ついでに鼻血も垂れていた。
有能な侍女は現在、『小動物の飼い方』という本を片手に見ながら、軽やかにベッドメイキングをしている。どれだけ器用なのか。
そして青い聖獣の前には、山盛りのナッツと果物が置かれている。
「それ、僕のゴブレットなんですけど……」
エラルドの酒杯は、聖獣の水入れにされていた。彫金が施された高級品も、こうなると形無しだ。
「イネスは小動物が大好きで、やりすぎることがあるんです」
「見たらわかります」
クロエはグラスに水を入れて飲む。普通なら侍女がお茶を用意してくれるのだが、その侍女は小動物の世話で忙しいようだ。
エラルドの分も水を注ぐと、歩いたので喉が渇いていたらしく、ごくごくと飲みほした。
「昔からなんですよ。だから、チーロとはとても気が合ったんです」
「たしか、チーロさまは動物と心を通わせる祝福（ギフト）があったとか」
「ええ、息が合って前回の試験にもイネスがついていたんです。今回の試験も、無理を承知でやってきたのです」
「初耳ですけど」
「まあ、あんなことがあったのであまりイネスも言いたくないのでしょう。でも、捜査に関する質問なら聞けば教えてくれるはずです」
イネスにそんな過去があったとは、とクロエはイネスを見る。
イネスはベッドメイキングを終え、青い聖獣にきらきらした目を向けていた。聖獣は鼻血を垂らす侍女をつぶらな目で見返している。
クロエは、さっきのモニクの姿を思い出す。
「モニクさまの祝福（ギフト）は、チーロさまと同じようなものですよね？ これって、聖女選抜に何か影響はないんですか？」
「……鋭いですね」
エラルドはグラスに水を注ぎ足す。

「実は、チーロとモニク嬢の祝福（ギフト）はかぶっていると言われていたんですよね。神子は十年に一度、二人ずつ選ばれます。言い換えれば、二人しか選ばれません」
「同じ祝福（ギフト）のかぶりだと、普通はどちらかが落とされるということですね」
「その通り」
（つまり、モニクさまにも動機があるということ）
さっき見た限りでは到底、人殺しなどできそうにない。何より、二年前だとまだ十三歳だ。だが、本人がクロスボウを使っての殺害は難しくても、彼女を聖女にしたい誰かが起こした可能性もある。
「うー」
「悩ましいですか？」
「ええ、金貨五百枚かかっていますから」
「がんばってください」
他人事のようなエラルドをちょっと睨むクロエ。
「クロエさま」
頬を薔薇色に染めたイネスがやってきた。その頭には、青い聖獣が丸くなっている。クロエにあてがわれた部屋のはずが、一画が聖獣さまのお部屋に様変わりしていた。
「お留守の間にこのような物が届いております」
イネスが渡してきたのは、手紙だった。
「ヴィオレットさまからお茶会のお誘いです」
「お茶会？」
「神子候補は、選抜試験期間中に親睦を深めます。神子を選ぶ際、互いの相性も審査対象になりますから」
エラルドの説明が入る。
「だから頻繁にお茶会のレッスンがあったわけですね」
クロエは納得した。
どの聖女候補と仲が良いかも審査対象となれば、茶会の一つ二つ受けるに決まっている。同時に、聖女になりそうにないクロエあたりは蔑（ないがし）ろにされそうだ。
「ヴィオレットさまは仮にも侯爵令嬢です。多少、高慢ちきな印象は強いですが、お手本となるようなお茶会をやってくださるはずです。しっかり勉強してください」
イネスの声はきりっと聞こえるが、顔はもふもふのしっぽで緩（ゆる）みまくっていた。あと、微妙にヴィオレットに対する言葉がひどい。
「うふふ、ラズさんったら、おやめください。くすぐったいです」
イネスは表情だけではなく、ついに声まで緩んできた。
「ラズって？」

「色合いから名前を付けたみたいですね。青金石（ラズライト）」
エラルドが補足説明した。
「聖獣ってペットにしていいんですか？」
「あとで返します」
きりっとした顔でイネスが言うが、聖獣に頬ずりしたままだ。
（返してくれんの？）
クロエは不安になりつつ、ヴィオレットからの招待状を開いた。
「確かに、仮にも侯爵令嬢だ」
貴族のお手本ともいえる文面と美麗な筆致に、ほほうと思わず唸ってしまうクロエ。
「代筆屋でも雇ってるんじゃないですか？」
青い聖獣ことラズが来たおかげで、どこかテキトーになっているイネス。
「ヴィオレットさまは何かと貴族至上主義が目に付く方ではありますが、その分、貴族としての嗜（たしな）みはわきまえている方です」
「そーですかー」
イネスの目が節穴になっているので、クロエもつい雑になってしまう。常に張りつめているのも疲れるのだ。
「返事が必要ですよね」
クロエは、机の上に置いてある荷物からレターセットを取り出す。
封筒も便（びん）箋（せん）も一種類で味気ないが、そのかわり香水の量が半端ない。今の流行は香りを付けた手紙だとのことで、逆に便箋や封筒は地味だが質が良い物を選んでいる。
「茶会は貴族式のものならイネスから一通り習いましたが、聖女候補としての茶会はどうすればいいでしょうか？」
エラルドは顎（あご）に手を寄せる。
「手土産（みやげ）は必要ありません。ドレスコードもありませんので、神子候補の服のままで結構です。ただ、その他の礼儀については貴族様式をとっていると思ってください。つまり、和気あいあい団らんに見せかけた、腹の探り合いです。お得意分野ですよね？」
（はいはい、お仕事ですね）
「では、差しさわりのない程度に会話しますね」
変に目をつけられても困る。ヴィオレットあたりは特に面倒くさそうだ。
「申し訳ないのですが、クロエ嬢にはできるだけ強者ムーブをかましていただきたいですね」
「きょ、強者ムーブ？」
エラルドは、本当に見た目と全然イメージが違うことを言ってくれる。
「神子候補は互いにライバルであると同時に、ビジネスパートナーに

なる可能性もあります。神子選抜試験は神子としての能力を示すとともに、誰と一緒に合格するかが大きな課題となります。神子候補は選ばれると同時に、選ぶ側でもあります」
「てっきり、偉い神官方がお決めになるものかと思っていましたけど」
「神官以外にも、王族や貴族代表など複数の意見を聞きます。でも、最終的に相性が悪すぎる候補が選ばれたなら、どちらか一方を落とします。お茶会は、誰が自分と相性が良く、どう有能であるか相手を見極める場です。もしクロエ嬢が神子になりそうにないと他の候補に判断されたら、どうなりますか？」
「……今後、相手にしなくてもいいと判断されますね」
「ええ。他の神子候補と接触しなければ、クロエ嬢の特技を生かすことはできませんよね？」
だから、ちゃんとやってくださいね、と笑顔の牽（けん）制（せい）が入る。
面倒くさい、とクロエは顔に出かかった。
（我慢しろ、金貨五百枚だ）
クロエは大きく息を吸って吐いた。
「具体的に、茶会でどのように振る舞えばいいのですか？」
「そうですね。神子候補たちに、自分と組めば利益があると思わせることが大切かと」
「めちゃくちゃ難しいことを簡単におっしゃいますね」
クロエは脱力する。
「なーに、相手の人間関係を把握すれば、付け入る隙はあると思います。神子がなぜ一人だけではなく二人選ばれるのか、改めて説明しましょうか？」
「お願いします」
クロエは前にもちらっと聞いたが、再確認しておきたい。
「神子の力を持つ者は、どういう人間かわかりますか？」
「普通に考えると、神秘的な存在です。人にはない能力があるのですから」
「つまり、一般人より優れているという認識を持っていますか？」
「そうですね」
クロエが肯定すると、エラルドはわかってないなあ、と妙な笑いをする。なんだか、無性に腹が立つ顔だ。
「違うと言いたいようですけど、どう違うんでしょうか？」
「クロエ嬢。僕の心読みました？」
「顔を見ればわかります。私、結論から聞きたい性格なんですけど」
もぎもぎと頬をマッサージするエラルド。なんだか可愛い仕草だ。
「まあ、ちょっと説明くらいさせてください。僕の祖母の話なんです

が、研修中にイネスから聞きましたか？」
「ええ、祝福（ギフト）を持つ聖女候補だったと」
「はい。祝福（ギフト）を持っていても、必ず神子になるとは限りません。祖母の時代は、祖母より強い祝福（ギフト）を持つ神子が一人と、もう一人祝福（ギフト）を持たない者が神子となりました」
「それは、さっき言っていた聖女同士の相性というものですか？」
「はい。同時に、祝福（ギフト）を持つ者同士だと弊害のほうが大きいのです」
エラルドは便箋を五枚取り出す。
「人間には五感というものがあります。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚。神子の力は、それに加わるもう一つの感覚に近いと祖母は言っていました」
エラルドは便箋を一枚追加する。
「俗にいう第六感ってやつでしょうか？」
「それがより明確になったものらしいです。どういう感覚かは、人それぞれなんですけど──」
エラルドは説明しながら、便箋を二枚引き抜く。
「逆に、目が見えない方は四つの感覚器官しかありませんが、日常生活はどうでしょうか？」
「不便だと思います。……でも、私の知っている方は、目が見えない代わりに耳がとてもよくて、誰が近づいてきたかがすぐわかりましたね」
「そうですね。一つの器官が使えない場合、残りの器官で補いますよね。では、感覚器官が一つ多い神子たちはどうなります？」
「その流れでいくと、他の五感が鈍くなるんですか？」
エラルドが笑う。
「祖母は年がら年中、こけていました。祖父はそんなところが可愛いと惚（のろ）気（け）ていましたが、塩入りクッキーでもてなされる孫の気持ちにもなっていただきたい」
「あっ、はい、わかりました。ええ、なんとなく言いたいことわかりました。つまり、ぽややんなんですか？」
「はい、ぽややんです。皆が皆、ぽややんというわけではありませんが、どこか抜けていたり、感情が欠けていることもあります」
「感情が欠けている？」
「他人の感情に関わる祝福（ギフト）を持った場合、自身の感情に影響を与える傾向があるようです。他人の悲しみを読み取る祝福（ギフト）の持ち主は、悲しみの情が完全に消えてしまったと記録にあります」
いくら特殊な能力があっても、他に弱点があっては意味がない。
「聖女二人の役割分担は、祝福（ギフト）を持つ本命と、本命と同じ

立場で全力サポートする補佐ということでよろしいですか？」
「ご理解いただけて光栄です」
便箋を片づけるエラルド。
「つまり、基本聖女はバディ制。私が補佐として有能であると示せばよいということですね」
「はい」
クロエは自分以外の四人の候補を思い出す。
誰がどんな祝福（ギフト）持ちかはわからない。わかっているのは、モニクくらいだろうか。
（確かに、ぽややんっぽかった気がする）
性格によって祝福（ギフト）持ちかそうでないかわかるのであればいいが、あくまで参考程度だろうか。
「では、お茶会では誰が祝福（ギフト）持ちか判別できるように頑張ります。ヴィオレットさまには、私が祝福（ギフト）持ちだと錯覚させる必要がありますよね？」
「ええ。でも、他の神子候補たちはそれぞれ面識があるので、クロエ嬢には不利かもしれません」
「いえ、逆にチャンスですよ。誰も私を知らないというのはメリットじゃないですか？」
クロエはにいっと笑うと、指先で羽根ペンを転がした。

II

ヴィオレット主催のお茶会は、宿舎の前の中庭でやることになった。
前庭は白を基調に、裏庭は薔薇を中心に絢爛豪華に、そして中庭に咲くのはアイリスだった。
（薔薇のほうが好きそうなのに）
クロエはそう思ったが、ヴィオレットの調査書を思いだす。たしか、家紋は花の形をしていた。
（あれはアイリスだったわけね）
まさにヴィオレットらしいとクロエは思う。
中庭の中心にある円卓には大きな傘がさしてあり、日差しよけになっている。一応聖職者ということもあり、華美な恰好やふるまいは禁じられているが、ヴィオレットは我関せずの改造ローブ姿であり、周りには多くの給仕もいた。
（お付きは一人までのはずだけど）
護衛だけでなく侍女も大勢連れてきているのか、プロの給仕にしか見えない聖職者がたくさんいた。おそらく、前もってヴィオレットの手引きで大教会に出家していた人たちだろう。普通の聖職者であれば、ティーポットを高らかに上げてカップにお茶を注ぐことはないはずだ。

「大した物を用意できませんでした」
「そんなことないです」
ヴィオレットの謙（けん）遜（そん）に対して、否定するのはモニクだ。
最年少の聖女候補は、目をきらきらさせてテーブルの上のケーキを眺めている。そのケーキも、高級店で売っているような代（しろ）物（もの）にしか見えない。
（手作りしかだめって聞いたんだけど）
どう見てもヴィオレットのお手製とは思えない。
イネスから聞いていた理想的なお茶会の風景に、クロエは自分で準備できるか不安になった。出せるパーティ料理といえば、キッシュかクッキーしかない。
クロエがそっと後ろを見ると、お茶会ということもあって護衛たちは遠巻きに見ている。
「お味はいかがかしら？」
ヴィオレットはお茶の感想を聞く。
「おいしいです」
クロエは正直に答えた。
他の聖女候補たちも、おいしいと感想を述べる。
ただ一人、モニクだけは目を細めてケーキばかり見ていた。
（紅茶が嫌いなのかな？）
確かに良い茶葉を使っているが、渋みが強い。甘いフルーティな香りの割に味は甘くないので、鼻と口の感覚にずれが生じる。紅茶に慣れていない頃、クロエも同じような気持ちになった。
クロエの予想通り、モニクはちらちらと砂糖の入った小瓶を見ている。砂糖を取ろうにも、ヴィオレットの前にあるので取りにくいのだろう。
クロエは、テーブルの真ん中にあるジャムを手にする。
「ヴィオレットさま、このジャムは紅茶に合うものですね」
ヴィオレットはクロエを見る。表情は変わらないように見えて、少し和（やわ）らいでいた。
「ええ、よく知っていましたね」
「たまたまです」
イネスの教育の賜物だ。最近の流行ものは覚えさせられた。紅茶にジャムを入れるのは最近の貴族の流行だ。
そのイネスもクロエの後ろについているが、どこか心ここにあらずといった様子だ。きっと青い聖獣ラズのことを考えているのだろう。
「入れてもよろしいですか？」
「どうぞ」
ヴィオレットはまんざらでもない顔をしている。せっかく流行を取り

入れたのに、誰も気付いてくれなければ面白くなかろう。
（わざわざテーブルの中心にジャムを置いたっていうのに）
パンやスコーンがあればわかるが、何もないのにジャムだけ置く理由はない。
クロエはジャムを一匙（さじ）紅茶に入れると、モニクを見た。
「モニクさま。ジャムを入れますか？ 桃とオレンジがありますけど」
確認すると、モニクの顔がぱあっと明るくなる。
「はい、ください！ 桃がいいです！」
元気よく答えるので、クロエはびっくりしつつ桃のジャムを渡す。
（昨日のアレは一体なんだったんだか）
聖獣たちを連れてクロエに対する警告を行ったモニク。今は年相応、いやそれより幼い少女に見える。
紅茶にジャムを入れたのは、クロエ、モニク、ゾエ、ヴィオレット。
サロメだけは、紅茶そのままの味を楽しんでいる。
しかし、この茶会でまともにお話をしようとするのは、ヴィオレットのみだ。モニク、ゾエは相づちを打つばかり。サロメにいたっては、ヴィオレットに無視されているようだ。
この四人の関係は、もう二年前にできているようだ。
中心となるのはヴィオレット、あまり意見を言わないモニクとゾエ、ヴィオレットに嫌われているサロメ。
（わかる気がする）
ヴィオレットは自分が一番な人間だ。聖女になったとしても、他の聖女たちより目立ちたいはず。
（少なくとも、明らかに自分より美人なサロメさまと一緒に合格しようとは思わない）
ヴィオレットもなまじ美人なだけに、きつかろう。
少なくとも容姿の面では、ヴィオレットはクロエに対して反感を持たないはずだ。ほどよい引き立て役に適した淡白な顔つきをしている。
クロエはケーキを食べる。ふんわりとしたシフォン生地のケーキに、上品な甘さのクリームがおいしい。ベリーの酸っぱさがちょうどアクセントになっている。
「このケーキおいしいです。ぜひ、レシピを教えて欲しいです」
モニクが口を聖獣のように膨らませる。
（あれ？）
クロエは目をこすった。
気のせいでなければ、モニクの周りに小鳥が集まっている。モニクの栗色の髪に小鳥が止まり、足元には聖獣が集まっていた。特に青い聖獣はテーブルの上にまで上ってきて、クッキーをねだっている。
（あれってラズではなかろうか？）
クロエはそっと後ろのイネスを見る。

イネスの顔は普段と変わらないように見える。しかし、クロエの目は誤魔化しきれない。
（心拍数が上がって血色がよくなってる。体温も上がって、瞳孔が開いたり閉じたりしてる）
簡単に言うと、興奮していた。
聖獣にクッキーをそのままやるわけにはいかないので、上にくっついているナッツだけもらっている。
「モニクさまの周りは、相変わらずにぎやかですね」
ゾエが目を細める。
（初めて声聞いた）
一見冷たく見える銀髪の美少女だが、モニクに対して表情が柔らかい。
「へへ。ありがとう」
にっこり笑うモニク。屈託のない笑みというのはこういうことを言うのだろうか。
（一番話しやすそうなのはモニク嬢だけど）
クロエは、モニク以外の三人を見る。ゾエもヴィオレットも、モニクには優しい気がする。今のところ、彼女が祝福（ギフト）を持つ聖女候補だからだろうか。
（二人とも、モニクさまと一緒に聖女になりたいんだろうか？）
そうなると、ヴィオレットだけでなくゾエも祝福（ギフト）がないのだろうか。
モニクが一番話しやすそうだが、ライバルが多いと接しにくくなる。
このまま空気になると、仕事が達成できない。どうにかして、他の聖女候補たちの気を引かねばならない。
だが、クロエとて何も考えてきていないわけじゃない。ただ、タイミングを計っていた。
「そういえば、クロエさんは神子選抜試験が初めてでしたわよね？ 交流も兼ねて、改めて自己紹介をしていただきたいわ」
ヴィオレットがクロエに話題を振ってきた。
（よし！）
テーブルの下で握り拳（こぶし）を作りつつ、クロエは笑顔を見せる。
「ご紹介の場を作っていただき、ありがとうございます。クロエと申します。十二の時に出家した身で、辺境の地にて神官見習いをやっておりました」
家名を聞かれたら、出家したと言えばいい。正しくは養護院に転がり込んだのだが、どちらも似たようなものだ。クロエの父はろくでもない男なので、探られないようにするのが一番だ。
「神官見習いだということは聞いておりますわ。なにやら特技がある

ようで」
ヴィオレットもクロエのことは調査済みのようだが、なんの特技かまでは調査には入っていないはずだ。
（賭博が趣味とは書きにくいものねえ）
そのあたりは、上手くエラルドが誤魔化しているようだ。
「いえ、私が得意なことはほんの占い程度ですから」
クロエはあくまで謙虚に答える。強者ムーブを見せろというが、祝福（ギフト）持ちか否か、どんな能力を持っているのか、簡単に口を滑らせるわけにはいかない。
「占い？」
ゾエが反応した。ヴィオレットも怪（け）訝（げん）な顔をしている。
（調査書にはなかっただろうね）
アルブ教では、占いは特別な意味合いを持つ。
神官が行う占いは、簡易神託として扱われる。数代前の聖女は、占いによって干ばつや洪水を言い当てたと記録にある。クロエの住んでいた辺境の町も、『幸運の聖女』の占いによって鉱山を当てている。
クロエはもちろん、宝探しや災害を予知できるわけではない。できるのは──。
「私はカード占いを得意としております。よろしければ簡単に占ってもよろしいでしょうか？」
クロエはにこっと笑う。ゾエとモニクは占いに興味がありそうだ。ただ、サロメは目をそらし、ヴィオレットは笑みを浮かべている。
「そうね。せっかくだから占ってもらいましょう！」
ヴィオレットがそう言えば、誰も反対する者はいない。今日の茶会の主（あるじ）はヴィオレットだ。
「せっかくだから私を占ってもらいたいところだけど──」
ヴィオレットは視線をクロエからモニク、ゾエ、そしてサロメで止める。
「サロメさんなんかいかがかしら？」
サロメの表情が一気に青くなった。
（いじめかあ？）
いじめのようだが、ここは聖女選抜試験という競争の場だ。こんなことで折れるようなら、国の外交官たる聖女にはなれない。
一見、悪役ムーブなヴィオレットだが、味方についたら頼もしい。
ルールに外れない程度に手段を選ばないヴィオレットは、他国との条約や法の穴をつくのがうまそうだ。
クロエは紫の布に包まれたカードを取り出す。枚数が多いカードと少ないカードの二種類あるが、基本クロエは枚数が多いカードを使う。酒場で小遣い稼ぎをするためだ。

けれど、今回は少ないカードを選ぶ。ゲーム用ではなく、絵柄がついた占い用のカードだ。エラルドに頼んで用意してもらった高級品で、手になじませるため毎日触っていたため、ちょうどいい具合に使い込まれているように見える。
「ではサロメさま、失礼いたします」
クロエはサロメの返事を聞く前にカードを切る。素早い動きにモニクが「ほわー」と口を開ける。聖獣ラズも不思議と同じ表情をしていた。ついでにイネスが羨（うらや）ましそうに見ている。
クロエは切ったカードをテーブルの上に広げる。クロエとサロメの間にはヴィオレットがいるので、ちょっとやりにくい。
「前を失礼いたします」
「ええ、どうぞ」
ヴィオレットは気にしていない様子だ。
「サロメさま、この中から一枚どうぞ」
サロメは並べたカードを一枚引く。カードには黒いローブを着た老人の絵が描いてある。
わくわくした表情でモニクが身を乗り出す。
「どういう意味なんですか？」
「これは『隠者』のカードです」
クロエはモニクの質問に答えつつ、サロメを見る。
「模索、熟（じゅく）慮（りょ）など、内面的に充実したことを示します」
クロエはできるだけゆっくり説明しながら、サロメを観察する。ほんの一瞬の表情の変化も見逃さないつもりだ。
「けれど──」
「これは逆位置ですね。意味は否定的に変化する。このカードの場合は、孤独や秘密を意味するのではなかったかしら？」
ヴィオレットが補足する。その瞬間、サロメの瞳孔が大きく開くのをクロエは見逃さなかった。
「サロメさんには、何か秘密があるということかしら？」
「そんなものありません。ヴィオレットさま」
（嘘だ）
クロエはサロメが嘘をついていると確信する。
瞳孔の開き、かすかな声の震え、ほんの少しの血色の変化。もしサロメの手を握れば、その脈拍は普段の倍多く打っているだろう。
誰しも、秘密の一つ二つくらいある。でも、どうということない秘密ならば、クロエにこんなはっきりと嘘と見破れるわけがない。
しかし、クロエ以外の者には何の変化もないように見えるだろう。普通は相手の瞳孔の変化に気付けるほど、視力も動体視力も良くない。
クロエとて、持ち前の視力とともに生活がかかっているからこそ手に

入れた特技だ。
「あくまで占いですから。もう一枚カードを取ってみてください」
サロメがカードを引く。さっき引いたときよりもゆるやかで、躊（ちゅう）躇（ちょ）していることがわかる。
サロメがカードをひっくり返そうとしたとき――。
「あっ！」
サロメが持っていたカードを、ラズがぱくっとくわえる。そしてそのまま、カードを持って走り去ってしまった。
「だめだよ！ ラズ！」
モニクが慌てて青い聖獣を追いかける。
（ん？ ラズ？）
クロエは一瞬疑問に思ったが、今はそれどころじゃない。
「いたずらっ子な聖獣ですね」
ゾエがラズを追いかけるモニクをほほえましく見ている。
「あら？」
その時、クロエはぽつっとテーブルクロスが濡れているのに気が付いた。空を仰ぐと雲が分厚い。
「あんなに晴れていたのに」
「そうね。こんなことなら、温室でお茶会のほうがよかったかしら？」
ヴィオレットが残念そうに言った。
「申し訳ないわ。今日のお茶会はお開きということにいたしましょう。よろしければ、ケーキはまだありますので持ち帰ってくださるかしら？」
「ありがとうございます」
クロエは本心から喜んだ。ヴィオレットはサロメには厳しいが、クロエをライバルとすら見ていないのか、それほどきつい当たりはない。
初対面での態度の悪さは、牽制だったのかもしれない。
（いじめさえなければ、腰（こし）巾（ぎん）着（ちゃく）してもいいな）
などと思いながら後ろを振り向くと、離れた場所でにこにこ笑うエラルドと目が合う。
（わかってますよ、だめですよね）
クロエはカードを片付ける。ラズが持っていったので一枚カードが足りない。
「クロエさん。カードは私が弁償しますわ」
ヴィオレットがクロエに提案する。
「いえ、大丈夫です。探しますので」
「いいえ、占いを頼んだのは私なので」
ヴィオレットは引くつもりないらしい。

（いや、貰えるならうれしいよ）
ヴィオレットがくれるカードなら、きっと高級品に違いない。聖女選抜試験が終わったら、売り飛ばせばいい値段になるはずだ。
「申し訳ありません。ではお言葉に甘えて。ありがとうございます」
どんなカードをもらえるのか楽しみにしながら残ったカードを確認しつつ、足りないカードに当たりをつける。
（『恋人』のカードがない）
『隠者』に『恋人』のカード。
クロエに占いの祝福（ギフト）があるとは思えないが、妙に意味深に思えた。

III
「あの青い聖獣、ずいぶんいたずら者ですね」
宿舎に戻りつつ、クロエはエラルドに話しかける。
イネスはラズがどこかへ行ったので、意気消沈していた。
「聖獣は大人しく、あんないたずらはしないと思うんですけど。ナッツでも食べながらカードに触っていましたか？」
エラルドは嫌味で言ったのかと思ったが、本気のようだ。
「モニクさまは、動物を操ることはできるのでしょうか？」
クロエはあまりのタイミングに、その場にいた聖女候補を疑う。
「さっきの騒ぎ、モニク嬢をお疑いですか？」
「はい。可能性としてはありうるかと。理由はわかりませんけど」
「確かにモニク嬢には、動物と心を通わせる能力があると聞きますが……。ですが、モニク嬢が何かしら企（たくら）んでいるようには思えません。それこそ、まさに神子らしい性質の方です」
「そうですか？」
クロエはエラルドに反論する。
「モニクさまの能力がチーロさまとよく似ていること。そして、選ばれる聖女は二名、けれど似た能力者同士を選ぶことは少ないこと。二点を考えると、モニクさまにとってチーロさまは邪魔だったと考えるのが妥当ではありませんか？ たとえモニクさまがそんな気はないとしても、周りがどう思うかわかりません。何より、チーロさまの遺体の第一発見者と言っていましたよね？」
「……失礼しました。ちゃんと仕事をしてくださるのですね」
エラルドが妙に感心する。
「仕事しますよ。金貨が掛かっているんですから」
クロエは下品と思いつつ、金を示すジェスチャーを見せた。
「ふむ。お金というものはたしかに生活の上で大切に思います。ですが、なぜクロエ嬢はそこまでお金に執着するんですか？ 正直、派手な生活を求めているように思えませんけど」

妙に不思議そうな顔でエラルドが訊ねる。
「うーん、何と言いましょうか。私が賭博をしているのはご存知ですね」
「ええ。見事な腕前です」
「私は一を十、十を百にすることが好きなんです」
「なんとなくわかります」
「その上で、一番わかりやすく十、百と増えるものはなんでしょうか？」
クロエの質問にエラルドは首を傾げる。
「それこそお金ではないんですか？」
クロエは否定する。
「お金じゃありません。お金は情勢により、半分にも十分の一にも価値が変わりますから」
「……なんですか？ 意地悪しないで教えてください」
「人間です」
クロエの答えに、エラルドが半歩下がる。イネスも冷たい視線を送ってくる。
「ちょ、ちょっと引かないでください」
「クロエ嬢。僕の実家は確かに手広くやっておりますが、さすがに奴隷売買は……」
「さすがに旦那様でも、その商品は取り扱っておりません」
「ち、違います！ 人材、人材のことです！」
クロエは慌てて説明する。
「子どもが成人するまでに十年かかるとします。その間に読み書き、計算、いろんな技術や作法を教えます。アプトビルツ商会では、社会に出たばかりの十五歳を雇うとして、教育を受けた者と全く受けていない者では、どのくらい給金に差をつけますか？」
「勤勉さ、身体能力も同じとすれば、おそらく初任給で二倍は差がつくでしょうね」
「さらに、十年、二十年先では？」
「本人の向上心も関係しますが、出世するのは前者で給金の差もどんどん大きくなりますね」
なるほど、とエラルドが手を叩く。
「はい、それこそ生涯賃金は十倍、百倍と差がつく者だって現れる場合もあります」
「そういう意味でしたか。しかし、投資できる人材を育てて何倍もの賃金を稼ぐようにしたとして、クロエ嬢には一体何の得になりますか？」
「そうですねえ。将来的には、その一割でも私に恩を感じて仕送りしていただけたら幸いですね。投資なんてギャンブルみたいなものです

から」
「戻ってこなくても仕方ないと」
「そういうものです」
クロエは知っている。他人に与えたとて、全部が全部戻ってくることはない。だが、その一見無駄になったようなお金によって、何人も助かることがある。
「さて、お茶会がお開きになりましたが、これからどうしましょうか？」
「うーん。収穫はサロメさまとヴィオレットさまの仲が悪いことくらいですねえ。正直、何をするかわからないですから、とりあえず裏庭の森に行ってもいいですか？」
宿舎に入る前にクロエは立ち止まった。
「裏庭に？ どうして？」
クロエは一枚抜けたカードの束を手にする。
「貧乏性なので、ラズくんにカードを返してくださいとお願いしようかと」
「お供いたします」
イネスがいい返事をする。
エラルドは一瞬、面食らった顔をして笑う。
「わかりました。お嬢さまの命は絶対でございます。私がちゃんと護衛いたします」
エラルドが丁寧に頭を下げる。
「あと、イネスはケーキが悪くなるので先に帰ってください」
「な、なんとご無(む)体(たい)な」
イネスは信じられないといった顔をして、ケーキを手にとぼとぼ部屋に戻っていった。

IV

裏庭の森には、たくさんの聖獣がいた。カラフルな毛並みの中、青色の聖獣は見つからない。
ふわふわした毛並みを横目に見ながら、森の奥を見る。
「まだ、戻ってないのかなあ？ ねえ、ラズがどこにいるか知らない？」
なんとなく、近くの枝にいた赤い聖獣に訊ねてみるクロエ。
すると、赤い聖獣は首を傾げて枝から降り、フサフサの尻尾を揺らすと、こっちに来いと言わんばかりにクロエの方を向く。イネスがいたら舞い上がっていたかもしれない。
「……すみません。聖獣って人語がわかるんですか？」
エラルドに聞いてしまうクロエ。
「賢い生き物とは聞いてますし、たまにそんな風に見える反応はしま

すけど、さすがに人語まではどうでしょう。どうしますか？ ついていきます？」
「せっかくなので」
クロエとエラルドは赤い聖獣についていき、ずんずんと森の中を突き抜ける。

「クロエ嬢」
不意にエラルドがクロエを呼び止めると、その腕を取って木の陰に隠れた。
「……あれは？」
クロエは目を凝らす。
裏庭の森を抜けた先に高い城壁があり、そこに向かうようにサロメが立っていた。
「なんでサロメさまが？」
クロエは首を傾げつつ、彼女を観察する。サロメの肩は震えているように見えた。
サロメはしばらく立っていたが、振り返る。何をしていたわけでもなく、ただ物思いにふけていたようだ。
クロエはエラルドに羽交い締めにされながら、息をひそめた。
（いや、近い近い）

クロエとしても、それなりに年頃なわけで、こうも密着されるとさすがに平常心を保つのは難しい。クロエなら触れた感覚から相手の緊張がわかるが、エラルドは気付いているだろうか。

幸いなことにエラルドと言えば、息をひそめつつ終始サロメの観察に余念がない。

（えー、そうですね）

クロエは火（ほ）照（て）った耳が一気に冷えて、心拍数も平常に戻る。エラルドにとって、若い娘との密着よりもチーロ殺害の真相を知

る方が大切なのだろう。
「何をしていたんでしょうか？」
サロメの姿が完全に見えなくなったのを確認して、エラルドはクロエを放す。
「何でしょうねー」
自分だけ心を乱されたと思われたくないので、クロエは白けた顔でエラルドに接する。
「ともかく、向こうに行ってみますか」
森を抜け、城壁の前に立つ。以前訪れた石テーブルのすぐ傍だ。
「ここは本当に訓練の声がよく聞こえますね」
城壁は厚いのに、聖騎士たちの訓練の声が響く。だが、妙に近くに聞こえるのは気のせいだろうか。
（ん？）
クロエは、ふと城壁に耳をそばだてた。
「どうしましたか？」
「いえ、訓練の声なんですけど、上からではなく横から聞こえる気がして」
「横から？」
どこがおかしいのだ、というエラルドの表情。
「普通、これだけ厚い城壁だと音は遮断されますよね？」
「そうですね」
「なので、声は少し遠く上から聞こえてくるんじゃないかと思うのです」
言われてみれば、とエラルドは頷く。
「私は他人より耳が敏感なので」
さらに、今のクロエは魔道具によって五感も強化されている。
クロエは耳に手を当てて目を瞑る。そして、些細な音を聞き分けて城壁に触った。蔦に囲まれた城壁を手探りで撫（な）でる。そして──。
「ありました」
茂った蔦をはじくと、細長い隙間のような穴があった。
「アロースリット……」
「なんですか？」
「名前の通り、城壁の隙間から矢を射るための穴のこと──」
エラルドの表情が変わった。クロエも今、まさに同じことを考えていた。
「ここからなら、クロスボウを撃つことは可能ですよね？」
クロエは城壁の隙間を指先で撫でた。
「……可能です」
クロエは壁の隙間から直線に移動する。その先には、石テーブルと石の椅子があった。

城壁に背を向ける形で石椅子に座るクロエ。
「チーロさまは背中から背骨を貫き、心臓を矢で撃たれていた。距離、角度、殺傷能力を考えるといかがでしょうか？」
「問題ありません。むしろ、ぴったり一致します」
エラルドは瞬きを繰り返し、大きく息を吐いた。緊張して、戸惑っていることがわかる。
「なんでこんなことに気付かなかったのか……」
クロエは蔦をかき分け、他のアロースリットを探す。
「そこだけのようですね。他は埋められています」
クロエはがちがちに固められたアロースリットの名残を発見する。おそらく、蔦が隙間から入り込むことを防ぐためだろう。アルブ教の象徴である蔦だが、その繁殖力の強さから一般的には雑草扱いされる。建物の隙間に入り込んで、老朽化させるからだ。
「つまりチーロさまは、この場所で殺された。そのあと、誰かに聖獣の森の広場まで運ばれたことになりますね。チーロさまの体格はどのくらいでしたか？」
「今のモニク嬢と同じか、もう少し小さいくらいかと」
クロエは、ぽやんとした聖女候補を思い出す。小柄で体重も軽そうだった。
（あの大きさだったら）
養護院で子どもたちの世話をしているクロエなら、運ぶことは可能だが――。
「女性一人で運ぶのは不可能ですね」
「僕も同意見ですが、一応見解を聞いても？」
クロエは石椅子から立ち上がり、動かない子どもを持つ要領を考える。
「私が運ぶとすれば、持ち上げることは不可能です。無理に持ち上げると、ローブに血液が付着します。血がつかないように運ぶには、腋（わき）に手を入れて引きずっていくしか方法がありません。チーロさまの遺体発見現場に、そんな痕跡はなかったですよね？」
「その通りです」
エラルドは周りを気にしつつ、「少し移動しましょう」とクロエに目配せする。クロエたちは宿舎に戻りつつ、話を続けることにした。
「最低でも、外部にいた人間と遺体を運んだ人間、二人以上犯人はいるんですね」
「はい」
クロエは小さくなっていく訓練の声を気にする。
「そして、直接チーロを殺害した犯人は、聖騎士の誰かの可能性が高いと言えますね」
「……」

クロエの無言は肯定を意味していた。
訓練中の聖騎士が多くいる中で、関係ない人間が城壁に近づくのは不可能だろう。休憩を装って城壁の傍におり、なおかつターゲットが定位置についたところで矢を放つ。クロスボウは訓練に使う物であればいい。
「殺害に使われた矢は、狩猟用の物で年間何万本と売られていました」
「でしょうね」
簡単に足がつくものを使うわけがない。
クロエは唸りつつ、さっき見たサロメの姿を思い出す。
「サロメ嬢、やはり怪しいですね」
エラルドの意見に同意する。
なぜ石テーブルの傍にいたのかサロメを問いただしたいところだが、まだ証拠がなさすぎる。
「もう少しサロメ嬢のことを詳しく調べますか」
「そうですね」
結局、赤い聖獣は何を言っているのかわかっていなかったようだが、結果的にもっと重要なことがわかった。今度、ナッツを手土産にもっていかねばならない。
クロエはどっと疲れて宿舎の部屋に戻る。
「おかえりなさいませ」
丁寧なお辞儀で妙にご機嫌なイネスが出迎えてくれた。なんで機嫌がいいんだろうと思ったら、青い聖獣ことラズが、やたら豪華な寝床の上でナッツを貪（むさぼ）っていた。

I

翌日、クロエのカードはラズの寝床で見つかった。クロエの予想通り『恋人』のカードで、汚れてもいない。
「どういう意味があるんですか？」
エラルドの質問に、クロエはどう答えていいか悩む。
「カードは正位置と逆位置で意味合いがガラッと変わります。このカードの場合、恋愛の正と負の面を表していますね」
「ほうほう」
「あんまり真（ま）に受けないでください。所（しょ）詮（せん）、占いなので」
教会の信者からたまに頼まれて占っていたが、要はクロエが相手の顔色を見て言葉を選んでいたにすぎない。
「それにしてもいたずらっこだー。なんで持っていったんだよー」
クロエはナッツを食べるラズの頬袋をウリウリする。

ラズはナッツを落とし、小さな前足をばたばたさせるが、まんざらでもなさそうだ。気が付けばテーブルの上に仰向けになり「もっとやって」とおねだりするようになった。
生憎クロエも暇ではないので、手を洗って今日の日程を確認する。
「いくら可愛くても、どんな雑菌がついているかわかんないからね」
クロエの言葉に、ラズはショックを受けた顔をしたように見えた。
「今日のスケジュールはこちらです」
イネスがクロエの前に予定が書かれた紙を置く。ついでに、傷心のラ

ズを「よしよし」と慰（なぐさ）めている。
「午前中に聖女として合同のマナーレッスン、午後に養護院の慰問。やることが多いような、少ないような」
「今日は予定が多い方ですね。分刻みの予定はそうそうないですよ。何より、大教会は信者たちの規範であるため、しっかり無働日もあります」
無働日とは、その名の通り仕事がない日だ。大変良い名前をしている。もっとも、人手が足りない辺境の教会には、あってないようなものだったけれど。
「マナーレッスンかあ」
クロエはレッスンという文字に辟（へき）易（えき）しながら、重い腰を上げた。

II

マナーレッスンは、時間通り滞りなく行われた。詳細についてはあまり思い出したくない。
結果は、成績優秀者がヴィオレット、ゾエ。
及第点がサロメ。
もう少しがんばりましょうがクロエとモニクだ。
予想通りとはいえ、クロエは自分の至らなさにへこんでしまう。
（暗記は得意なんだけどな）
作法なので、暗記だけではなく細かい身のこなしも要求される。
「お二人はちゃんと復習なさってくださいね」
クロエは頷くしかない。所詮、付け焼き刃の技術だ。長年やっているお貴族さまには勝てない。
五人の聖女候補は、先生を見送る。気を抜きたいところだが、そうはいかない。
ヴィオレットが、クロエとモニクのほうを向く。
「モニクさんはまだこれからよね」
微笑みながらフォローする。
「クロエさんもそのうち慣れるはずよ」
クロエにも優しく声をかける。お叱りの言葉じゃなくてよかったと安心する。
だが──。
「サロメさん。あなたはいつになったらまともにマナーを覚えるのかしら？」
一人にだけ厳しい言葉をかけるヴィオレット。上背のある彼女が立ち上がると、妙な威圧感がある。クロエの視点だと背中しか見えないが、しっかり巻かれた髪が揺れ、同時にサロメをまくし立てる。
確かに、サロメはヴィオレットほどはうまくできなかったが、クロエ

たちよりずっと板についた作法だった。
これは嫌がらせとしか思えない。
クロエは周りを見る。先生はもう退室し、聖女候補以外は侍女が一人ずついるだけだ。護衛は、隣の部屋で待機している。
（誰も見てないからやるのかなあ）
クロエは不安になりつつ、周囲の様子をうかがう。ちらりとイネスを見たら、いつも通り無表情だった。
（どこかでバレるんじゃないかなあ。いいのかなあ、こういうの）
もっと遠まわしに、やんわりと注意できないものだろうか。やはり報告書にある通り、ヴィオレットはどうしようもない人という括（くく）りでいいのだろうか。ライバルを蹴落とすためになんでもやるのだろう。
「あなたのような神子候補は、早々と辞退なさったほうがいいでしょう」
また巻き髪がバサッと揺れた。ヴィオレットは誰かを威（い）嚇（かく）するときに、髪に触れる癖でもあるのだろうか。攻撃的な言葉を吐くごとに、その髪が揺れる。
「あ、あのー」
声をかけたのはモニクだった。
「もうすぐお昼です。ごはんが冷めたら大変なので、反省会は次回にしませんか？」
と同時に、ぎゅるるるるるっとモニクのお腹から轟（ごう）音（おん）が響いた。
「……仕方ありませんわね」
ヴィオレットは興をそがれたらしく、小さく息を吐いた。
「ということで、次回までにちゃんとやっておくように」
（いや、あんた先生じゃないでしょ）
クロエは心の声を抑えつつ、侍女と共に退室するヴィオレットを見る。
「っふう。怖かったー」
声を出したのはゾエだ。青灰色の目をぱちぱちさせている。
「クロエさまは驚いてしまうわね。ヴィオレットさまの態度について」
ゾエはお茶会やマナーレッスンの時は寡黙だったのに、今はずいぶん砕けた雰囲気だ。
「二年前もこんな雰囲気だったのよ。前はチーロさまもターゲットにされていたから、幾分ましだったけど」
「チーロさまも？」
クロエは初耳だった。報告書には書かれていなかった内容だ。
「ヴィオレットさま、わたしには優しいんだけどな」

悲しそうなモニクの顔。
（浅はかだよ）
試験官が誰も見ていないとはいえ、聖女有力候補のモニクの前で他人をののしるのは悪手だ。ヴィオレットは、そんなこともわからない人なのだろうか。
「そうだ。せっかくですし、今ここにいる皆さんでお昼を取りませんか？」
「たのしそう！」
ゾエの提案にモニクが乗ってきた。クロエとしてはまたとない機会だが──。
「あの、私は遠慮させていただきます……」
か細い声でサロメが言った。
「どうしてですか？ ヴィオレットさまはいつも部屋でしか食事をとらないから、私たちと食事をしてもばれないと思いますけど？」
ゾエが不思議そうに首を傾げる。
「一緒にたべましょうよ。サロメさま」
モニクもサロメの手を引っ張る。
「いえ。食欲がないので三人で楽しんでください」
サロメは微笑を浮かべると、侍女と共に退室した。
「ざんねーん」
「仕方ないから三人で食べましょう？」
「うん！」
「よろしくお願いします」
クロエは頭を下げる。
「頭を下げないで、クロエさま。わたしよりおねえさんだもん」
「私はクロエさまと同い年ですね」
クロエは二人に引っ張られ、食堂へと向かった。

III

宿舎の食堂は、カフェテラスのような雰囲気だった。白いテーブルクロスが敷かれた丸テーブルが等間隔で並び、それぞれ花が飾られている。薔薇が多いのは、裏庭の花を摘んでいるのだろう。
（お布施つぎ込まれているー）
無駄遣いとは言わない。アルブ教の総本山である大教会には威厳が必要だし、偉い人もたくさん来る。
クロエは無駄遣いは嫌いだが、使うべきところには金を使うべきだと考える。ただ、ほんの少し辺境の教会にも分けて欲しいと思う。このテーブルクロス一枚で、子どもたちの寝間着が三着作れそうだ。
「こっちこっち」
モニクがクロエの手を引っ張る。無邪気な聖女候補に、おじさん騎士

は愛（まな）娘（むすめ）でも見るようにニコニコしている。
ゾエの護衛である女性騎士は、視線をうろうろさせ警戒を怠（おこた）らない。
エラルドはいつも通りで、通りすがりの女性神官から熱い視線を送られているのを流していた。妙に慣れている空気が癪（しゃく）に障る。
「この席がおすすめ」
モニクが選んだテーブルは、中庭を一望できる窓際の席だ。
「もう少ししたら暑くて座れないんだけど、今の季節はちょうどいいんだよ」
モニクの口調は完全に砕けていた。侍女が申し訳なさそうな顔をしつつ、食事の準備をする。
「護衛の方たちはあちらの席で食事をとっていただける？ お腹が空いているでしょ？」
「かしこまりました」
ゾエが指した席に女性騎士が移動すると、おじさん騎士とエラルドも続く。
（食堂だから、そう問題はないよね？）
テーブルは中庭に面しているが見晴らしも良く、なにかあったらすぐ気付くだろう。
「どうぞ」
イネスがクロエの前にスープを置く。食事くらい自分で取りにいってもいいが、侍女の仕事なので座っておく。他の二人も一緒だ。
「ありがとう」
三人の聖女候補は蔦のリースを手にして祈りを捧げた。アルブ教信者は蔦をモチーフにしたアクセサリーをつけることが多いが、聖女候補の場合、共通して首に蔦のリースをかけている。
メニューはみんな同じ。スープにサラダにパン、あとはメインに鶏もも肉のソテー。
聖女候補の割に普通の食事だが、クロエにとってはごちそうだ。
柔らかい白パンは焼き立てで、ソテーは皮がカリカリ、中はじゅわっとジューシーに焼きあげられている。ソースもおいしいのでパンにつけて綺麗に食べたいが、下品だと怒られるだろうか。
デザートにはリンゴのコンポート。シナモンが少しかかっていて、あっさりといただけた。
アルブ教は大らかな宗教なので、肉食も禁止されていない。
「クロエさまって、神官見習いだそうね」
ゾエが青灰色の目をキラキラさせて見る。すでにデザートの皿は片付けられ、ハーブティーが置かれている。
「はい。辺境にある『幸運の聖女』が占いで当てた鉱山の町近くの教

会にいました」
「まあ。『幸運の聖女』ですって！ 面白い逸話がたくさんある方よね？」
ゾエが目を輝かせる。
「ええ。有名なのは、他国との賭けに勝って無血で土地を取り戻した話ですね」
クロエにとってはありがたすぎる聖女だ。おかげで、クロエの副業ができている。
「ええ。聖女ってみなさんどなたも素晴らしい祝福（ギフト）を持っていて、どの逸話も楽しいです。確かモニクさまも好きでしたよね」
「はい。お勉強はきらいですけど、神子の歴史だけは目がさめました」
モニクが楽しそうに語る。
「モニクさまも、いつかそう語られることになるかもしれないですよ」
そう言ってゾエがにっこり笑う。大人しそうな印象があっただけに、これだけ喋っていると不思議な気がした。
「ゾエさまこそ」
「いえいえ、私は自分の立場が分不相応なのはわかっています。モニクさまが、やはり聖女として一番ふさわしいと思います」
ゾエの言葉に、クロエはぽかんとする。
「私はただ伯爵令嬢という身の上であるがゆえ、推薦されたようなもの。聖女としてふさわしいとは思えません。たいした能力なんてないもの」
（謙遜で言ってる？）
いや、違う。ゾエは本心からそう思っている。謙遜を言う時の、どこか後ろめたいサインがかすかにも感じられない。
たいした能力がないというのも、祝福（ギフト）を持っていないのか、それともモニクほどすごい祝福（ギフト）ではないのか、どちらの意味にもとれる。どちらにせよ、誰かを押しのけてまで聖女になろうとする気概は感じられなかった。
（そういう素直で優しい性格なのか？）
クロエがじっと見ると、ゾエはクロエにも笑いかける。
「クロエさまは……ええっと、うん。いいところがたくさんあるでしょうね」
「……ありがとうございます」
（あっ、気を遣われた）
ゾエはモニクを認めており、そして自分には聖女の座はふさわしくないと思っている。
「お二（ふた）方（かた）、次の無働日は空いていますか？」

「次の？ 明後日（あさって）ですよね？ 特に予定はないですけど」
「じゃあ、私の部屋に来ていただけませんか？」
目をきらきらさせたゾエは、ぱんぱんと手を叩く。
何かと思えば、侍女が冊子を持ってきた。冊子には、流行のドレスのイラストや小物の絵が描かれている。
「モニクさまには、やはり緑を基調とした柔らかい色がいいと思うんです。差し色に赤を使って引き締めて、でもラインは少し絞る。たまには違った魅力を押すのもありだと思います。クロエさまはなんでも無難に着こなせそうなので、せっかくですから派手な色合いで冒険してみてはいかがでしょうか？ そのいちごのような鮮やかな赤毛は珍しいので、せっかくならその色を推していくべきだと思います。あー、ここにサロメさまがいらっしゃったら。サロメさまは過度な装飾はなされず、シンプルに攻めていただきたい。そうなると、一番言いたいのはヴィオレットさまだわ。なんなの、あの髪型。あれだけ美しい金髪なのに、毎日こてを当ててしまったら毛先が傷んでしまう。元が豪華なんだから、するっとしたライン……いいえ、いっそ男装もありだわ」
ベラベラベラベラと、ゾエの口は止まらない。

「はじまっちゃったー」
モニクには見慣れた光景なのか、特に気にした様子もない。
「ゾエさまはね、女の子を綺麗にするのが得意なの。前の時も、皆をコーディネートしたくて仕方なかったんだって」
（聞いてないぞー）
クロエは斜め後ろに座るエラルドに思念を送る。報告書にはたくさん書き込まれていたが、やはり漏れも多いようだ。
「ええ。でも協力してくれたのは、モニクさまだけでした。本当に残

念」
ふうっと息を吐くゾエ。最初は神秘的な美少女だと思っていたけど、ずいぶんイメージが変わってきた。神官やヴィオレットの前では猫を被っているようだ。
「ヴィオレットさまはアレだし、サロメさまは過度に着飾りたくないみたい」
「サロメさまは何もしなくてもきれいだもんねえ」
「ええ。一度お誘いしたとき、なんて言ったと思う？」
「何々？」
ゾエの話にモニクが興味を持つ。
「顔をすっぽり隠せるヴェールがあれば、って。誰かに会いに行くときに便利って言われても、そんなんじゃ意味ないのよー」
ゾエの言葉もわかるし、サロメの言葉もわかる。
サロメの美貌はあまりに類まれ過ぎて、不幸も呼ぶのだろう。もし結婚でもしようものなら、戦争すら起きかねない。ただでさえ、聖女や聖女候補は女王の次に結婚相手に求められると言われるのに。
「クロエさま」
後ろに控えていたイネスが話しかける。
「クロエさまは王都に来たばかりですので、次の無働日は必要な物の買い出しに行きたいのです。ご理解ください」
大人びたハスキーな声で言われると、クロエも従うしかない。
「申し訳ありません。そういうことで、今回は都合がつきそうにないです」
「そうですか。とても残念」
ゾエはちらりとイネスを見て微笑む。
「じゃあ、モニクさまは来られますわよね！」
切り替えが早い伯爵令嬢は、モニクの手をぎゅっと握る。
「モニクさまが聖女になったとき、私が衣装を用意したいんです！」
「うん。いいよー」
完全に砕けた口調にモニクの侍女が苦笑する。もう半分諦めているようだ。
「では、クロエさまも聖女になった暁には、私を使ってくださいね。聖女は国の鏡、気高く美しい女性に仕立てたいのです。他国のろくでもない為政者にびんたを食らわせるような、そんな方に聖女になってもらいたいのです」
今度はクロエの手も握ってくるゾエ。
「は、はい」
（ありえない話だけどねえ）
ともかく、この場はゾエに合わせておく。
この感じだと、モニクが聖女になるとしても、もう一人はしっかり者

でなければならない。
（ゾエ嬢とサロメ嬢はあまりやる気がないようだし、消去法でもう一人はヴィオレット嬢になるのか。最初から出来レースじゃないの？）
クロエはハーブティーを飲み干す。イネスがカップを片づけながら、そろそろ出ますよ、と目で催促していた。
「では、私はこれで」
「午後からはどちらへ？」
ゾエが訊ねる。
「養護院への慰問ですね。皆さんは違うのですか？」
「わたしは教会でのお祈り」
「私は現役の聖女さまたちの付き添いですね。とても楽しみです」
それぞれ別の予定があるらしい。てっきりクロエは、皆一緒に向かうものだと思っていた。
「慰問って、どうすればよいでしょうか？」
（うちの悪餓鬼たちと同じ扱いでいいんだろうか？ 駄目かな？）
すぐ洗い物を増やす、いたずらばかりする、大人しく勉強しない。どうしようもない孤児を何度叱りつけたことか。院長も先輩神官も優しいだけに、クロエが喉を枯らす羽目になっていた。
「そうですね。今回が初めてでしたら、誰かが一緒に行くことになると思います。たぶん、サロメさまかヴィオレットさまのどちらかが同行するかと思いますよ」
（ぉおう）
究極の二択という気がしてならない。ここにいる二人のどちらかなら、まだ気が楽だったろうに。
「では、準備もありますし引き留めてはいけませんね」
「じゃあねー」
無邪気に手を振るモニク。
（できればサロメ嬢でありますように）
クロエは祈りつつ、部屋へと戻った。

五章 ―― 養護院訪問

I

（よかったー）
養護院に向かう馬車の前で黒髪の美女を見つけ、クロエはほっとした。憂いとあふれんばかりの色気を醸（かも）し出す聖女候補、サロメだった。
御者台の従者たちが、ぽやんと色香に惑わされている。
クロエはエラルドを見る。
「エラルド卿は本当に惑わされないんですか？」
クロエは心配になり、もう一度聞いてみた。
「ふふふ、見くびられては困ります。クロエ嬢」
自信満々なので、その言葉を信じよう。
聖女候補とその侍女たちは馬車に乗り、護衛は馬でついてくるようになっている。
「よろしくお願いします。サロメさま」
「こちらこそよろしくお願いします。クロエさま」
基本的に聖女候補同士は対等だが、皆敬意を払うのが基本だ。でも、ヴィオレットという例外もいる。
しかし、高級な馬車とはいえ狭い。色香を空気に溶かし込んでいるような美女と面と向かって間近に座ると、妙にあてられてしまう。
（私が惑わされそう）
いかんいかん、とクロエはぎゅっと自分の太腿をつねる。
（平常心、平常心）
心を落ち着け、カードゲームをする心構えに切り替える。
「サロメさま。私、養護院訪問は初めてですので、どのようにしたらいいのか教えていただけますか？」
サロメは伏せたまつ毛を上げる。
「大したことはありません。教会が用意した支給品を子どもたちに渡し、話したり遊んだりするだけです」
「支給品ですか？」
どうにもサロメの言葉が義務的に聞こえるクロエ。いや、義務なのだろうが、もう少し言い方というものがあるだろう。
「他には、神子候補自身が支給品の中に子どもたち用のプレゼントを入れることも多いです。おそらく、今回クロエさまは何も用意されていないでしょう？」
「お恥ずかしいことに」
クロエはちょっと萎縮する。イネスも、前にチーロの侍女として付いてきていたなら教えてくれてもよかったのに。
サロメは、侍女に目配せをした。

「これを子どもたちにお配りください」
サロメの侍女がクロエに渡したのは、紙で包まれたキャンディのような物だ。
「胡桃と蜂蜜のヌガーです。子どもたちに一つずつ配るといいでしょう」
「ありがとうございます。でも、サロメさまの分は？」
「クッキーも焼いておりますので、ご心配なく」
ヌガーはまだ作り立てのようだ。少し柔らかい気がする。もしかして、昼食を一緒に食べなかったのは、子どもたち用の手土産を作るためなのかもしれない。
ヴィオレットはサロメをこき下ろすが、クロエとしては彼女も聖女候補として十分な資格を持っているように見受けられた。なによりこれだけの美貌があれば、外交の顔として有利に働く。ただし、反対に戦争も起こりかねないが。
「余ったら、ご自由にしてください。ただ……」
サロメは少し気まずそうに目をそらす。
（ただ？）
「……男性より女性のほうが甘い物を好みますので、そちらに渡してもいいかと思います」
「ありがとうございます」
なぜ言いよどんだのか、クロエはその答えを瞬時に導き出した。
（男性より女性……）
サロメが余り物とはいえ、男性に菓子でも配ったらどうなるだろうか。何か勘違いした男性が、サロメに懸（け）想（そう）する可能性は十分ある。クロエに余り物を渡すなら女性に、と誘導したのもそういう経験があるからだろう。
（いや、私はたぶん関係ないし）
サロメほどの美しさがあるからこそ、勘違いする男性が続出するのだろう。そう考えると、サロメの行動原理もクロエには理解できた。
（他人と距離を置く、感情表現は控え目。無気力にさえ見えるが、基本はちゃんとしている）
聖女としての資質は十分だけど、その性格があまりに聖女には不向きだ。
「あと、もう一つあります」
「なんでしょう？」
サロメはほんの一瞬だけ唇を噛（か）んだ。
「訪問する養護院を経営する教会は、神子派です。なので、『聖女』という言葉は使わず『神子』と言ったほうが無難かもしれません」
「……神子派？」
クロエは反（はん）芻（すう）する。

そういえば、クロエは『聖女』と使い、エラルドは『神子』と使っていた。
（これ、何も説明なかったなあ）
誰にも何も言われなかったので、クロエは気にせず使っていた。隣に座っているイネスは素知らぬふりをしている。
（絶対、何か意図があって教えてくれなかった気がする）
クロエは何食わぬ顔で手のひらを口に当てる。
「あっ、すみません。勉強不足で」
「……平民出身でしたね」
「はい。つい『聖女』と口にしてしまいます。それに辺境出身なので、どうにもそういった派閥などに疎（うと）くて」
「急な擁（よう）立（りつ）だったようですね」
マナーレッスンでクロエの技量が付け焼き刃なことを理解しての反応だろう。クロエの履歴は、ビルツ伯爵家によって最近聖女としての資質を持ったように書かれているらしいので、辻（つじ）褄（つま）が合う。
（エラルド卿は『神子』としか言わなかったものなあ）
エラルドが言うように、正式名称は『聖女』ではなく『神子』だ。しかし、平民の間では『幸運の聖女』のように『聖女』として伝わる逸話が多いため、『聖女』と呼ぶのが一般的だ。どういう仕組みか知らないが、祝福（ギフト）を持つ人間は圧倒的に女性が多い。
（そういや、受験資格に性別はなかったな？）
当たり前すぎて性別欄を省いていると思っていたが、逆を言うと男性でも祝福（ギフト）さえ持っていれば神子候補になれるともいえる。
「……『聖女派』と『神子派』。呼び方の違いですが、後ろについている人たちが大きく関わってくるとだけしか私は言えません。あとはよろしくお願いします」
サロメはいちいち間を置いて話す。熟考して動く性格なのだろう。
（今の王族って、追放された魔女の子孫だっけ？）
魔女というとやはりイメージが悪いので、払（ふっ）拭（しょく）する意味で『聖女』と使いたいのだろうか。
「ありがとうございます」
かなり奥歯に物が挟まったかのような言い方ではあったが、サロメがとても親切な性格であるとわかった。ライバルを蹴落としたいなら、クロエに注意喚起などしなくてもいいだろう。

そうこうしているうちに、馬車が養護院に到着した。
『神子候補さま方、いらっしゃいませー』
馬車から降りるとともに、元気が良い声が響いた。ずらっと並んだ子どもたちに、後ろには神官たちが微笑んでいた。手作りの旗に蔦とど

んぐりの絵が描かれている。上は十四、五歳、下は三歳くらいの子どもたちが総勢二十人ほどいた。
クロエは、辺境の養護院を思い出す。
「どうぞ、神子候補さま」
前歯が抜けた子どもが、小さな花束を渡してきた。
「ありがとうございます」
クロエは目線を子どもに合わせる。
「ふふ、いくつかな」
「九さいです」
九歳、身長も体重も平均的だ。どの子も血色がいいので、いい物を食べさせてもらっているのだろう。
サロメに花束を渡した子どもたちは呆（ほう）けていた。今まで見た中で一番の美女だから、驚いているのだろう。
「みなさん、一度神子候補さまたちはお部屋に入りますので、道をあけてちょうだい」
『はーい』
皆、聞きわけがいい。
クロエたちは木造の建物に入る。荷物を置いてから、子どもたちと触れ合う予定だ。
（そういえば、ここでは神子って呼んだ方がいいんだったな）
神子候補二人の部屋は、それぞれ別に用意してあった。
「それではサロメさま、また後ほど」
部屋に入って、クロエは大きく息を吐く。窓にはちゃんとカーテンが閉めてあった。エラルドとイネスも続いて一緒に入る。
「クロエさま。先ほどサロメさまから貰った菓子はお持ちですか？」
「はい。どうしたんですか？」
イネスはクロエからヌガーを受け取ると、包装を剥がし口に入れた。
「……変な物は混入されていないようです」
「えっ、ちょっと待ってください」
イネスは毒物が入っていないか確認したのだ。
「一部とは限りませんので、一応中身を全部入れ替えます。エラルドさま」
「はいはい」
侍女に呼ばれて鞄を開けるエラルド。どっちが主人かわからない。
鞄の中には何が入っているのかと思いきや、クッキーにキャンディ、マシュマロと言った菓子が大量に入っていた。
「ヌガーはありますか？」
「ありますが、ドライフルーツですね」
「包んでしまえば問題ないでしょう。ナッツ類だと、受け付けない子どももいるかもしれません」

てきぱきとしたやり取りに、クロエはぽかんとなる。
「ええっと、最初から配るお菓子は用意していたんですか？」
「はい。神子同士で被ることがないように数種類用意するのが基本です。私が忘れているとでもお思いで？」
クロエは呆れた視線を二人に向ける。
「事前に私に話してくれてもいいじゃないですか？ それに、初めて聞きましたけど、『神子派』とか『聖女派』とか。ビルツ伯爵家って『神子派』ですよね？ 私、今まで『聖女』を連呼しまくっていたんですけど」
「まー、神子候補と後ろ盾の意見が一致しないこともありますから」
誤魔化すように笑うエラルド。いや、確実に誤魔化している。
「あー、お二方。話していてもいいですが、手を貸してください。似た包装紙に包み替えるので」
イネスが、クロエとエラルドの前にヌガーと包装紙を置く。
「『聖女派』と『神子派』って、一体何なんですか？」
クロエは教会の針仕事で慣れた素早い手つきで、どんどんヌガーを紙に包んでいく。
「『革新派』と『穏（おん）健（けん）派』ってよく言われます。『革新派』つまり『聖女派』は、今の神子外交をもっと飛躍させて外国にもアルブ教信者を増やしましょうよ、と言っている人たちですね。神子を偶像化し、他国に対してもっとアピールしたい指針です。対して『穏健派』こと『神子派』は、いやいや神子を偶像化してはいけないよと言っているわけです。建国当時の気持ちを大事に、神子を扱うのが指針です」
「それだけですか？」
エラルドの説明では納得できないクロエは、さらに切り込む。
「一番最初を辿（たど）れば、建国の話からになりますよ？」
「どうぞ。まだ詰め替え作業はありますので」
クロエは手を動かす速度を落とす。
「魔女として追いやられた人たちが集まって作られたのがこの国というのは、クロエ嬢もご存知ですね。その〝魔女〟の中には、祝福（ギフト）持ち以外にも、知識や技能が豊富なばかりに追い出された人たちもいました」
クロエの知っている昔話とは、少し内容が異なっている。
「当時の彼女らを追い出したのは、彼女らを邪魔だと思っていた人たち。大（おお）雑（ざっ）把（ぱ）に言えば、男性の権力者が多かったのです」
「だから『聖女』ですか？ でも正しくは『神子』なんですよね？ それにアルブ教の大神官さまは男性ですし」
クロエは、話の長いおじいさん神官を思い出す。

「ええ。当時追いやられた知識人の魔女たちは、この国とアルブ教の礎（いしずえ）を作りました。彼女らは賢く、ただ男性を一括りにして恨んだところで国を作れないとわかっていました。なので、国を女王制にするばかりか、アルブ教でも女性優位にするとバランスが取れないと思ったのでしょう。なので、大神官は男性と決められています。記録によれば、過去に幾度か男性の『神子』も存在しています」
だが、祝福（ギフト）を持つのは圧倒的に女性の方が多いので、自ずと『神子』は女性ばかりになる。
「なんとなくわかりました。でも、『聖女派』は男性にいい感情を持っていないんですよね？『聖女派』が全て女性とは思えません。『聖女派』に与（くみ）する男性陣のメリットはなんですか？」
「そこは複雑なところです。さっき『革新派』と『穏健派』と言ったことに関係します。『聖女派』の多くに『革新派』が含まれ、『革新派』の一部に『戦争推進派』がいるといえばご理解いただけますか？」
「あー、そういうことですね」
クロエは納得する。『聖女派』にとって、かつて魔女として追いやった国が憎い、いつか復讐をと考える信徒はいるだろう。そして、どの時代にも大義名分を用意して、戦争をしたがるおばかさんはいる。
「エラルド卿は『神子派』でしたね」
「ええ、ビルツ家では代々『神子派』の『穏健派』ですね。なお、アプトビルツ商会は死の商人の真似事などは致しません。リスクが高い割に安定しない儲けの武器商人はやりませんので」
クロエは、エラルドの商人根性には嘘がないと断言できる。
「これからは『聖女』と呼ばず『神子』と呼ぶようにします」
「よろしくお願いします。一般の皆さまにとって『聖女』は深く考えずに呼んでいるところがありますが、これは『聖女派』の恐ろしいプロパガンダによるものですね。『聖女シリーズ』と銘打って、香水やらモチーフアクセサリーやら売り出すんですもん。僕だって販売したいのに神子派ゆえに販売できない、この悔しさわかります？」
なんか違う悔しさが出てきた。
「大体の理由はわかりました。で、今まで私に教えなかったのはなんでですか？」
「クロエ嬢は隙がないほうです。数か月前に見いだされた新しい神子候補には、少し抜けた一面もあったほうがいいかと」
エラルドは嘘を言っていない。でも、やや心に動きがある。
「なんか隠してません？」
「隠してませんから。信じてください」
クロエはどうしようかと思いつつ、とりあえず養護院訪問を上手くやらねばと考え直す。

ヌガーを包み終わったので、着たままにしていた外套を脱ぐ。
「クロエ嬢」
「なんですか、エラルド卿？」
エラルドは深刻な顔をして、クロエの左手を掴んだ。一瞬ドキッとしたが、彼の視線はクロエの手首に集中している。その目は、魔道具のバングルを見ていた。
「今（け）朝（さ）は何もなかったのに……」
エラルドは、バングルの裏側をクロエに見せる。
『ⅠⅡⅢⅣ』
数字が彫られているが、『Ⅳ』だけ妙に薄くくすんで、消えかかっている。
「……どういうことですか？」
「魔道具が祝福（ギフト）に反応して、相殺されたようです。刻まれているこの数字は、祝福（ギフト）を防げる残り回数の目安です」
「えっ!?」
いつ、どこで、クロエは何をされたのだろうか。
「覚えはありませんか？」
「覚えも何も、今朝はマナー教室で神子候補全員と会っていたんですよ。全く気付きませんでした。こういうのって、キラッとかわかりやすい効果音とかついていないんですか？」
「祝福（ギフト）って魔法に比べて地味なものばかりですし、何より精神系が多いんですよ。何かしらの言葉なのか、行動なのか、それとも自動的に発動するのかは、祝福（ギフト）の使い手によって異なります」
（いや、無理無理。わかりっこない）
クロエは首を振る。
「エラルドさまがお食事前に一度確認しておけば、もっとしぼれたものを」
イネスが壮大なため息をつく。
「うるさいですねえ。ともかく、神子候補の中にクロエ嬢が祝福（ギフト）持ちか試そうとした者がいるということはわかりました。バングルの効果はあと三回くらいしか持たないので、くれぐれも気を付けてください」
エラルドはバングルの裏側の刻印を見せると、クロエの左手を離した。
「難しいことをおっしゃる」
半（はん）眼（がん）になるクロエの髪をイネスが整える。
「はい。では、しっかりクソガキ……ではなく、養護院の良い子たちを可愛がってきてください」
イネスはお留守番らしく、ハンカチを持って手を振った。

クロエは不安になりつつも、ヌガーを入れた籠を持って控室を出た。

II

最初に案内された先は、教室だった。子どもたちは机を並べて、手元の黒板に数式を書き写している。板書の内容は、簡単な足し算引き算だ。
年配の男性神官が教えているのだが──。
（ねっむそー）
昼食を終えた時間だ。育ち盛りの子どもたちは昼寝をしたくて仕方ない、気だるい空気が漂っていた。それに加え、男性神官の独特の間延びした声は、なぜか子守唄よりも睡眠導入作用がある。
子どもたちは眠気に抗（あらが）っていた。ある者は膝をつまみ、ある者はぎゅっと唇を噛んでいる。
（がんばれ、みんながんばれ！）
クロエは拳を握り、眠気に打ち勝とうとする子どもたちを応援する。
（うちの悪餓鬼どももこれくらい真面目……じゃないのもいた）
クロエは一人、堂々と眠っている少年を見つける。先生役の神官の視線も気にせず、いびきを立てていた。十二、三歳くらいだろうか。
神官はなにか言いたげに見ていたが、注意する様子はない。これが普段の光景なのだろう。
「そろそろ次にいきましょうか？」
苦笑いをしながら、案内役の女性神官がクロエとサロメを誘導する。

中庭には、まだ授業を受けるには早い小さな子たちが走り回って遊んでいた。
「みなさーん、いらっしゃーい」
『はーい！』
わちゃわちゃと走ってくる子どもたち。
サロメはハラハラとした様子で子どもたちを見る。その中の一人、五歳くらいの男の子が盛大にすっころんだ。
男の子は顔をゆっくり上げると、じわじわと目を潤ませ鼻水を垂れる。唇を震わせたかと思うと、耳をつんざく勢いで泣き始めた。
サロメは男の子に駆け寄ろうとしたが、躊躇して立ち止まった。
「あー、もう」
クロエは男の子を起こすと、泥を払う。擦（す）りむいた膝小僧からは、血が滲（にじ）んでいた。
「洗って消毒しましょう」
クロエは男の子を片手で抱えると、井戸まで運ぼうとした。
「僕が持ちます」
エラルドが代わりに子どもを抱っこする。さすがに淑女教育を施した

神子候補が子どもを片手で抱えるのは、良しとしないらしい。力仕事はエラルドに任せることにする。
「はい、しみるけど我慢して」
クロエが泣き叫ぶ子どもをなだめつつ井戸水で傷口を洗い流すと、神官が救急箱を持ってやってきた。
「申し訳ありません。クロエさま。お召し物が」
「いえ。どうせ洗うので問題ありません」
なによりクロエが洗うのではない。
細かい治療は神官にお任せして、クロエたちは子どもたちに菓子を配る。
「はいはい。手を洗ってからね」
どうしても、養護院にいると〝神子候補〟ではなく〝神官見習い〟としてのクロエが出てしまう。
授業を受けていた子どもたちも中庭に出てきたが、年齢層が高いので、お菓子への食いつきはほどほどだ。
（ここはちゃんとしているところなんだろうな）
普段から、お菓子の類は食べさせてもらっているようだ。辺境の養護院でお菓子を配るとなれば、どれだけ大騒ぎすることだろうか。
貧しい養護院では一日二食も珍しくない。しっかり食事はとらせたいが、どうしても寄付の額による。どどんと大きく寄付してくれるようなパトロンはおらず、どうせ出資するなら孤児より鉱山の開発に大枚をはたく人ばかりだ。
鉱山の町が近いこともあって、養護院には夜の女性が客との間にもうけた子や、落盤事故で鉱員の親に先立たれた子が集まる。かくゆうクロエも、賭博で一（いっ）攫（かく）千金を狙った挙句にへまをした父に置いていかれた。
辺境の養護院は、規模に対し子どもの数は多いし面倒を見る大人も少ない。クロエが養護院を出ず神官見習いになったのは、食いっぱぐれそうな子どもたちを見捨てることができなかったこともある。
クロエは一人、ベンチに座っている子どもに近づく。さっき授業で居眠りしていた少年だ。何やら木の枝を持って絵を描いており、地面に四角や三角の図形が並んでいた。
エラルドは少し離れたところで見守っている。
「何を描いているの？」
「!?」
少年は驚いて足で絵を消した。
「なんでもありません」
「そう？ はい、ヌガーだけど、どうぞ」
「……いいえ。僕は甘いものが好きじゃないので。ねとっとしているのも、ちょっと」

きっぱり断られた。いらないなら仕方ない。余ったらクロエが食べればいい話だ。
（どうして授業中に寝ていたんだろう？）
そこまで反抗的な態度ではないが、授業になると妙に態度が悪くなるようだ。
（そういえば、うちの養護院にも似たようなのいたな）
クロエの一つ下で、とうに辺境の養護院を出て働きに出ていた子がいた。
（もしかして）
なぜあんなに授業に不真面目なのか、クロエには心当たりがあった。
「ねえ、ここの養護院にいる子どもの数は何人？」
「十歳未満が十三人。十歳以上が僕も含めて八人です」
おそらく、十歳以上というのは授業に出るか出ないかのラインだろう。
「中庭に全員いるのね」
「はい」
「じゃあ、ここにヌガーがあと二十五個あるの。あなた以外の子どもたちには全員配ったけど、もう一個ずつ配ると余る、二個ずつ配るには足りない。どうすればいい？」
クロエは試すように言ってみた。
「僕以外の子どもにもう一つずつ配ってください。残り五個は、今ここで面倒を見ている女性神官五人に配るといいと思います。五人とも甘いものが好きなので」
ふむふむとクロエは頷く。
「実は同じお菓子がもう一セットあるんだけど、それを足してまた配るとしたら、どうすればいい？」
「もう一セットということは、四十五個が二セットあるということですね。なら、僕をのぞいた子どもたちにあと三個ずつ配って、残り十個は神官たちに配ればいいと思います。この養護院に今日いる神官は男性神官も含めて合計十人です」
（やっぱり）
クロエは納得した。
授業をまともに聞かないのは、この少年には授業内容が簡単すぎて聞く必要がないからだ。
（確かに簡単だったもんなあ）
授業はわからない子に合わせているのだろう。読み書きに加えて、簡単な足し算引き算ができれば大体生活できる。
（うーん、教育方針としてわからなくもないけど）
クロエは非常にもったいない気がした。
即座に暗算できる少年がどこまでできるのか気になったので、ついで

に少し難しい問題を出すことにする。
「ねえ、今から石取りゲームをしようか？」
「石取りゲーム？ どんなルールですか？」
（うん、ルールを全く知らないみたいだ）
実力を知るにはちょうどいい。
クロエはベンチの上にハンカチを敷き、残ったヌガー二十五個を置く。これが石の代わりだ。
「ルールは簡単。自分の順番の時、一個から三個石を取ります。石の数は三個までならいいですが、何も取らないのは駄目です。相手の番で残り一個にしたら勝ちです。遠慮せずに勝ちを狙っていいから」
「……じゃあ僕、後攻でも問題ないですか？」
「どうして？」
「だって、先攻だと勝てませんから」
クロエの想像以上だった。この少年は石取りゲームの必勝法を知らないのに、計算で後攻が有利だと判断した。
「どうして先攻だと勝てないの？」
「石を三つまで取れるんですよね？ つまり、自分の番で石の数が二個から四個になれば勝つことができます。なので、常に相手の番で四の倍数に一を足した数になるよう調整すれば勝てます。神子候補さまが最初にいくつ取ろうと、僕が次で残り二十一になるように石を取ればいいわけです。次で十七、次で十三、九、五。相手が五となれば、いくつとっても二個から四個。勝ち負けは決定します」
クロエはぞくぞくした。ちょっと試すつもりだったのに、予想以上に頭がいい。クロエは父に石取りゲームで散々負け続け、ようやく必勝法に気が付いたというのに。
「エラルド卿」
クロエは後ろに待機していたエラルドを呼ぶ。
「どう思いますか？」
「すごいですね。僕もよく聞いていないと、意味不明でわかりません。うちの商会で是非引き取りたいです」
神子候補と護衛騎士が話していることで、少年はどことなく居心地が悪そうだ。
「あ、あのー」
クロエは不安そうに話しかけてきた少年の肩を掴む。大粒の原石を見つけた気分だ。
「ねえ、あなたはもっと難しい勉強とかしたくないの？」
「えっ？ やってもいいんですか？」
少年の目が輝く。
「どうしてそんなことを聞くの？」
「だって、僕だけ違う授業だとお金がかかるんでしょ？ 皆は、今の先

生の授業でちょうどいいって言うし、学者になるわけでもないのにたくさん勉強する必要はないって。気になることを質問しても、先生は授業に関係ないことは話してくれないし、邪魔するくらいなら寝ていろって」
クロエはぎゅっと拳を握る。
（もったいない、すごくもったいない）
クロエは金の卵を腐らせているようにしか思えなかった。
「じゃあ、学べる機会があれば受けたい？」
「……はい」
「ちょっと待っていてください」
クロエは先生役だった神官を探し、少年の手を引っ張っていく。
「あの、すみません」
「どうかされましたか、クロエさま？ もしかして、その子が何か粗相でも」
不安そうな顔をする神官に、クロエは大きく首を横に振る。
「いえ！ そうではなく、この子の才能についてです。授業中に居眠りをするのはいけませんが、彼ならもっと難解な授業を受けてもいいはずです！」
「もっと難解な授業、ですか？」
「はい！」
クロエは思わず声が大きくなった。
ちょんちょんとエラルドが袖を引っ張る。クロエの声に反応して、皆が注目していることに気が付いた。だが、一度見つけた原石を磨かずに放置することはできない。
「ええっと、もったいないんです。この、まだいくらでも知識を吸収できる年齢の時に、本人の素養にあった授業を受けるか受けないかで、将来は大きく変わってきます。読み書きと足し算引き算ができれば、確かに十分というのが世間一般の認識です。でも、彼はさらに大きなものになりうる才能を持っています。もちろん、才能なんてものはあっても伸ばさなくては意味がありません。学校なり家庭教師なりをつけて、彼の才能を伸ばして欲しいのです。アルブ教では、祝福（ギフト）を持つ者を重んじます。でも同時に、祝福（ギフト）とはまた違った個々の才能を蔑ろにしてはいけないと私は感じるのです」
一息で言ったので、クロエは大きく息を吸った。
相手が弱気ならまくし立てろ。ろくでもないクロエの親父が、賭けで弱気な相手に揺さぶりをかける時に使っていた方法だ。。
「……院長と相談してみます」
先生役の神官はこの場では答えられないようだが、話を聞いてくれるだけよかった。
「それは良かった」

クロエの後ろで、エラルドがニコニコ笑っている。
それを見た神官の顔が強（こわ）張（ば）った。
「……もしかして、ビルツ伯爵家に所縁の方でしょうか？」
「今はただの聖騎士で、神子候補の護衛騎士です。実家は関係ありません」
（いや、ズブズブの癖に）
クロエは白けた顔を表に出さぬよう努めた。
「ただ、今後こちらに寄進する際、使い方について言及があるやもしれません」
「……今すぐ院長に話してまいります」
顔を真っ青にして、神官が去っていく。
「一度、控室に戻りましょうか？」
「そうします」
クロエはちょっと恥ずかしくなってきた。いたたまれなくなり、一度汗を拭きたいと思っていると、視界の端にサロメが映った。
サロメは菓子を配り終わり、子どもたちを遠巻きに見ている。周りには専属の女性騎士のほかに違う聖騎士が数人、取り巻きのようについていた。神子候補が外出する際は、危険だからと護衛騎士とは別に大教会が聖騎士を何人か付けてくれると聞いていた。
（対して私といえば、エラルド卿一人）
聖騎士とはいえ平等ではないことに気付いて、クロエは深くため息をつく。
（割り切ってさっさと配ってしまうか）
子どもたちにもう一個ずつ配ると、五個余った。
「余ったヌガーはどうしましょうか？」
エラルドがクロエに訊ねる。
算数問題として余らずに配る方法を少年に聞いたが、生憎女性神官は庭には二人しかいない。それぞれ仕事場にいるようなので、わざわざ渡しに行くのも面倒だ。
（全部配る必要はないかな）
このまま持って帰るかと思っていると、サロメの取り巻きをやっていた聖騎士の一人が近づいてきた。
「私が配っておきましょうか？」
笑みを浮かべる聖騎士に、クロエはどうしようかと考える。
（あっ、駄目だ）
クロエは聖騎士の目を見た。ほんの一瞬の瞳孔の動き。カードゲームの山場で相手がよくやる目。
（サロメ嬢も男性には渡すなと言っていたし）
聖騎士は騎士の中でも教会に選ばれた存在だというが、サロメとクロエに対する反応の違いからして信用できない。

断ろうとしたところ、クロエが持つ籠をエラルドが取った。
「せっかくなので、頼みましょう」
ニコニコ笑うエラルドだが、軽く瞬きをしてクロエに何か訴えかけている。
「わかりました」
クロエは目ざとくエラルドを見ると、籠の菓子を確認している。一瞬の出来事で聖騎士は気付いていないようだが、エラルドが余ったヌガーを別のヌガーにすり替えていた。
「あの、今日は護衛をありがとうございます。皆さまお忙しいのに」
クロエは聖騎士に話しかける。
「いえ、むしろ未来の神子さまの護衛につけるとなれば、光栄です」
（嘘は言ってない）
ただ聖騎士の視線はほんの一瞬泳いで、サロメがいる方向へと移動した。未来の神子さまとは、クロエではなくサロメのことを言っているのだろう。
「はい、よろしくお願いします」
エラルドが営業スマイルで籠を渡す。
「ああ……」
ほんの少し、聖騎士の顔にためらいの表情が見えた。
（ふーん）
クロエは聖騎士の意図と、エラルドの意図をなんとなく読めた気がした。

III

残念過ぎることに、クロエの読みは大当たりだった。
クロエたちはその後、養護院の院長室に呼ばれた。
待っていたのはさっきの聖騎士たちに神官、それとサロメだった。サロメには、なんで呼び出されたのかわからないという戸惑いが見られた。
「神子候補クロエ嬢。あなたの浅はかな行動に私たちは落胆しました」
「どういうことでしょうか？」
聖騎士の一人がクロエの前にやってきた。何かと思えば、ヌガーの包み紙を持っている。
「中に小石が混じっておりました。もし口にすれば、歯が欠けていたでしょう。子どもたちに配るものであれば、もっと注意するべきではないでしょうか？」
クロエは落ち着いた様子で話を聞いていた。背後にはエラルドとイネスがいるが、アウェイ感半端ない。
「私が子どもたちに配る前に見つけたからよかったものの、こういう

ことには慎重になってもらいたいものです。念のため子どもたち全員に確認しましたが、問題はなかったとのことです」
偉そうにクロエに説教するのは、さっきクロエがヌガーの籠を預けた人物とは別の聖騎士だ。
彼らは最初から菓子を配るつもりはなく、言いがかりをつけるつもりだったのだ。
クロエにもすぐさま予測できるくらい拙（まず）い行動。人数で押せばなんとかなるとでも思っているのだろうか。
（なんか目が変だ）
クロエが聖騎士たちの目を見ると、その瞳孔が開いていた。嘘をついていると共に、何かしら興奮状態にある。酒か薬物を摂取したかのような高揚感が見えた。
（どういうこと？）
さすがに勤務中に酒を飲むことはないと信じたい。でも、この馬鹿げた茶番を正気で行うほど、聖騎士とは愚か者の集まりなのだろうか。
「わかりました。神子候補として自身の行動に責任を持てということですね」
クロエは反芻するように答える。
「わかれば……」
聖騎士がふふんと笑ったように見えた。
だが──。
「申し訳ありません」
前に出てきたのは、サロメだった。困惑していた表情に憂いが混じる。
「クロエさまが配ったヌガーは、私が用意したものです。注意して作ったつもりが、異物が混入していたなんて……。申し訳ございません。すべては私のせいです」
はっきりと、サロメが自分の責任だと申し出た。
「えっ、それは!?」
聖騎士たちの顔が強張っている。
（だよねえ）
クロエは、サロメがヌガーを渡してきたとき、なぜわざわざ男性ではなく女性にヌガーを渡すように話したのかを思い出す。
あれは、彼女なりの忠告だったのだ。過去に似たようなことが、他の神子候補にも行われたのだろう。
そして、護衛騎士たちの酔った表情の理由もわかった。
クロエは酒場の歌手を思い出す。客は好きな歌手を応援する。でも歌手が公（おおやけ）に歌う場所は少ない。その結果、他の歌手の行動を妨害して好きな歌手を人気者に押し上げようとする。ライバルが減れば、それだけ好きな歌手が舞台に上がる確率が上がるからだ。

今回は歌手ではなく、サロメだっただけ。
サロメの美しさは、それこそ祝福（ギフト）だと思えるくらい魅力的なものだ。同性ですらくらくらするのに、異性ならどれほどのことだろうか。
しかし、聖騎士という立場がある人間がやらかすとなると大問題だ。
サロメはつかつかと優雅に歩くと、聖騎士が持つヌガーの包み紙を手に取り、残ったヌガーも確認する。
「確かに私が作ったものです。もし大教会に報告するようでしたら、私がやったとしっかり報告してください」
サロメがはっきり言った。
（ああ、この人）
本当に、持っている美貌とその性格のバランスが取れていない。ずる賢く、ちゃっかりした性格だったら、もっと楽に生きられただろうに。
自分の美貌がゆえに周りが勝手に暴走する。その度に苦しみ、時に別の人間にすら害を与えることに嫌悪感を抱いているのだろう。
（ヌガーの中身を入れ替えるなんてことして、悪かったな）
クロエが思っている以上に、サロメは誠実な性格だった。
そして、サロメにそんな罪悪感を与えることもなく避けることができたというのに──。
（腹黒い）
クロエはエラルドを見る。この見た目は好青年、中身は成金男。クロエに冤（えん）罪（ざい）がかけられることを知りつつ、ヌガーを聖騎士に渡したのだ。
そして、クロエもまたそれを知りつつ片棒を担いでいた。
サロメが証言しなくても、エラルドがヌガーをサロメの物と交換していたので物品でも証拠にできるだろう。
「そ、それなら、サロメ嬢に冤罪を着せるため、クロエ嬢が小石を混ぜたのかもしれません！」
聖騎士が苦しい言い訳をする。
（やっぱりおかしいよな）
神子候補の護衛に選ばれたのであれば、もう少しまともな人がいそうなのに。
「なんのメリットがあって、クロエ嬢がそんなことをするのでしょうか？ 意味がわかりません」
エラルドが凛とした面持ちで言い切った。
（まともな騎士に見える！）
くだらないことで感動しつつ、クロエは黙る聖騎士たちを見る。
「あ、あのう、これではどうでしょうか？ 幸いにも子どもたちに配られた物には、一切異物などは混入しておりませんでした。私どもとし

では、双方で話し合いをして解決されてはと思いますけど……」
自分らをまきこまないでくれという神官たちの心の声が聞こえる。
「双方、ですか。では、どちらの双方ですか？ まさかクロエ嬢とサロメ嬢の間で、という話ではありませんよね？」
エラルドは笑みを絶やさず、神官たちに確認する。
サロメがクロエをかばう以上、敵対する理由はない。なのに、本来護衛する対象であるクロエに聖騎士たちが言いがかりをつけている。
（あー、こいつは怖い）
こういう場合、落ち着きがなくなったほうが負けだ。クロエを吊るし上げようとしていた聖騎士たちの顔色が悪くなる。
「小石が入っていたという中身はどうしました？」
「ぜ、全部食べた！」
「おかしいですね。さっき『もし口にすれば歯が欠けていたでしょう』と言っていましたよね？ 矛盾しませんか？」
煽（あお）りが上手い。これはエラルドに任せてもいいなとクロエは傍（ぼう）観（かん）する。
「大体、残りを配るタイミングで中身を確認した意味はあるんですかね？ 皆さん、最初に配ったものは美味しそうに食べていたのに。クロエ嬢が配ったヌガーには石が入っておらず、あとからあなたがたが配ろうとした残りの分だけ、偶然石が入っていたと？」
「そ、そうだ」
「ほうほう。では、あなた方はサロメ嬢の分は調べなかったのでしょうか？ 同じ神子候補であれば、同様に異物混入を調べるべきでは？」
相手に非があるとはいえ、可哀（かわい）想（そう）になってくる。
「僕としてはクロエ嬢の潔白をはっきりさせたいのですが、時間がかかりそうです。中立な立場の人たちにも同席していただきたいのですが……」
神官たちがびくっと動く。
「職務でお忙しそうですね。代わりにこちらを使おうかと」
エラルドは懐から巻貝を取り出す。前に使っていた防音の魔道具だ。
「なんだ、それは？」
「音を記録する魔道具です。実はさっきから会話を記録しておりましたが、嘘の証言がないと言うなら大教会に提出しても問題ありませんよね？」
『!?』
青ざめていく聖騎士たち。
「というわけで、部屋だけお借りできませんか？」
エラルドがにっこりと神官たちに笑いかける。
「わかりました。それでは、おまかせします。何かありましたらお呼びください」

「はい」
少し安心したように、神官たちは部屋の外に出る。
「申し訳ありませんが、サロメ嬢は同席していただけますか？」
「はい」
サロメの護衛騎士も頷く。彼女はこういったことに慣れているらしく、冤罪をかけた聖騎士たちを汚らしいものを見る目で見ている。
「では」
エラルドはにこりと笑い、また懐から道具を取り出す。
（一体いくつ持っているの？）
今度は、水晶玉に台座がついたような物だった。おそらくあれも魔道具だとわかる。
「今度は写真でも撮ろうと言うのですか？」
クロエは思わず口に出す。
「いいえ」
エラルドはちらりとイネスを見た。
「失礼いたします」
イネスはクロエの視界を手のひらで遮（さえぎ）る。その瞬間、ピカッと何かが光った。
「は？」
意味がわからない。一体何が起こっているのか、クロエには理解不可能だった。
イネスがようやく目隠しをとってくれたかと思ったら、聖騎士たちが倒れていた。
「な、なにをしたのですか？」
慌てるのはサロメだ。普段は凪（なぎ）のような感情の揺らぎしか見せないのに、さすがに慌てている。サロメもイネスに目隠しをされていたらしく、なんだかわかっていないようだ。ただし、後ろにいた女性の護衛騎士は倒れている。
「ご心配なく。正気に戻すついでに眠っていただいただけです」
「正気に戻す？」
サロメが聞き返す。クロエも同じ質問をしたいところだが、サロメが代わりに話を聞いてくれそうなので見ていることにした。
「聖騎士の中にもいくらか成金のボンボンがいるからと言って、あまりに浅はかで短絡的なことだと思いました。そして、サロメ嬢の周りにはそういう騎士ばかり集まってたのではありませんか？ いうまでもなく、あなたの魅力に惑わされて」
「……はい」
サロメはそっとまつ毛を伏せる。素直に認めるとナルシストにさえ思えるが、彼女の場合は真実なので仕方ない。
「自分の意思ではないのに、周りが勝手にやってくれるおせっかい。

そんなことをされるがゆえに、同性にも嫌われ、異性は信じられない。お困りではないでしょうか？」
「な、何が言いたいのですか？」
サロメはエラルドを警戒している。サロメにとっては、エラルドも信じられない異性だ。
「そこで、ご提案があります」
さっきまで聖騎士に対して騎士っぽいふるまいをしていたエラルドだが、急に商人モードに入る。
（えっ、なんなの？）
他の神子候補の前でこっちの顔を出していいのかと、クロエは不安になる。
「サロメ嬢は、自身が持つ異性を惑わせる能力を消したいと思いませんか？」
「で、できるんですか？」
サロメは驚いた。
クロエも驚いた。
（いやいやいやいや）
「おそらく。僕の予測通りであれば、理論上は可能です」
自信たっぷりに言うエラルド。イネスも何も言わない。他の聖騎士たちは謎の光で気絶しているので誰も文句を言う者はおらず、神官たちは触らぬ神に祟りなしと院長室に近寄りもしていないだろう。きっと、防音の魔道具も作動させているに違いない。
「ちょっ、ちょっと待ってください！」
クロエは、エラルドとサロメの間に割って入る。
「どうしましたか、クロエ嬢」
「だって、おかしいじゃないですか！ サロメさまの祝福（ギフト）を消すなんて！ いくらお金の力があっても、無理なものは無理でしょう⁉」
「ははは」
「笑いごとじゃありませんよ！ サロメさまも何か言ってください！ いいんですか？ 何かとんでもないことを言われていますよ」
クロエはサロメに訴えかけるが、サロメには聞こえていないようだ。
「ほ、本当に私の呪いを解いてくださるんですか？」
（の、呪い？）
どういうことだ。サロメが持っているのは祝福（ギフト）ではないのか。
「はい。申し訳ありませんが、サロメ嬢のことは調べさせてもらいました」
イネスがさっと報告書をエラルドに渡す。確かに、サロメのことを調べると言っていたとクロエは思い出す。

「サロメ嬢がこのように異性を惑わせるようになったのは八歳の時、父親が取り扱う商品に触れてしまったせいですよね？ その赤い目も、商品に触れてから変わったのでしょう。祝福（ギフト）や魔道具によって、目の色が変わるという症例を聞いたことがあります」
「……そこまで調べているのですね」
「ええ。僕の実家も商いをやっているもので。十三年ほど前、面白い魔道具がオークションに出るという話がありました。その名も『夢魔の香水』と。かつて『魅惑の聖女』が死の直前に作り出したとされた物です」
サロメが形の良い唇を噛んだ。
「ひと振りかけるだけで異性の理想になれるという触れ込みでしたが、あくまで噂の域は出ませんでした。でも、本物であればどれだけの値がつくだろうと言われていましたが、出品はなかったそうです」
「……」
サロメは無言だ。
「サロメ嬢の本当のご両親は当時、魔道具を中心とした交易に力を入れていましたよね？ あの時、本当ならサロメ嬢のご実家はオークションに『夢魔の香水』を出すはずだった。しかし、何らかの原因で『夢魔の香水』の出品を諦めざるを得なかった」
クロエは、エラルドとサロメの顔を交互に見る。
エラルドに嘘はなく、サロメには戸惑いが感じられた。
「幼かったサロメ嬢は、なんらかの事故で本来ひとふりでいいはずの『夢魔の香水』を全部かぶってしまった。結果として出品はできず、サロメ嬢はそのような自分の意思とは関係なく異性を誘引してしまう体質に変わってしまったのではないでしょうか？」
（図星だな）
サロメの様子を見たクロエには一目瞭然だった。
サロメは祝福（ギフト）持ちではない。だが、エラルドはその真実を突き付けてどうしようというのだ。
「だから、このように聖騎士たちを惑わせてしまう。彼等のことは僕も多少知っていますが、本来なら他の神子候補を貶（おとし）めるような浅はかな行為は致しません」
「つまり、私が彼等にクロエさまの足を引っ張らせたと言いたいのですか？」
「ええ。意図せずに」
エラルドは指先で水晶玉に触れてもてあそぶ。
「自分だけでなく周りも巻き込む能力であれば、無くなったほうがよろしいのではありませんか？ 幸運なことに、僕には祝福（ギフト）はどうすることもできませんが、魔道具の力であれば消し去る方法を知っています」

クロエは左手首のバングルを見る。
（魔道具同士を消（しょう）耗（もう）させるってことか）
サロメにかかった魔道具の効果を完全に消せるよう、他の魔道具で相殺させる。
祝福（ギフト）であれば一時的に効力を打ち消すことはできても、持ち主の元の力まで消し去るのは無理だ。でも、その効力が祝福（ギフト）ではなく魔道具に由来するものであれば、消し去ることができる。クロエがつけているバングルのように。
「……なにがお望みでしょうか？ 私に神子候補を辞退せよという打診ですか？」
確かに、祝福（ギフト）持ちであることを基準に神子候補を決めているのであれば、魔道具由来とは言えサロメの『魅力』がなくなることは選考に大きなマイナスだ。
（でも、サロメ嬢はしっかりしている）
変に周りを惑わせないようになったほうがいいのではないか。補佐役としてモニクの隣にいるのであれば、ちょうどいい。
「僕が欲しいのは真実です。二年前……神子候補チーロが殺害された当日、何をされていたか真実を話してくれませんか？」
エラルドは直球で殴りかかってきた。
そうだ、エラルドはクロエの護衛騎士だ。クロエが神子になるつもりがない以上、サロメが神子候補を辞退しようがエラルドには関係ない。
「……そんなことですか」
エラルドの言葉にサロメが反応したが、クロエは返答までの間が長かったことを見逃さない。
「当時、私は部屋にいました。侍女もそう証言しています」
「本当ですか？」
「ええ」
（嘘だ）
サロメの瞳孔の大きさが激しく変わった。じわっと肌の表面が湿っている。
失礼ながら、クロエは一歩サロメに近づく。かすかに汗の臭いが漂ってきた。
クロエは、聖獣の森を抜けた先の城壁近くにサロメがいたことを思い出す。そして、あの場でチーロが殺された可能性が高いこともわかっている。
サロメは、城壁に隙間があり矢が撃ち込めることを知っていたのだろう。
（でも、何かおかしい）
「では、サロメさま。あなたはチーロさまの殺害には関わっていない

のですね？」
クロエは、そっとサロメの手に触れて訊ねた。
「そんなわけありません！」
サロメの落ち着きはなくなっていた。興奮すると動揺が見破りづらい。だが、彼女の手首から感じる脈拍は嘘をつくものとは違う。瞳孔の動きもさっきほど大きくない。
エラルドはクロエを見る。クロエに確認しろと言っているようだ。
イネスは沈黙したまま、周りを見ている。誰か来ないか精神を研ぎ澄ませているようだ。
（事件当時のサロメさまのアリバイは嘘、でもチーロさまの殺害はしてない。けれど、本来の殺害現場があそこだと知っていたとしたら？）
「チーロさま殺害に関与していないなら、どうしてチーロさまの遺体を移動させたのですか？」
サロメの脈拍が飛び跳ねるように大きくなった。明らかな動揺を見せている。
「なんのことでしょうか？」
平静を取り繕（つくろ）っても遅い。クロエを誤魔化しきれるほど、サロメは落ち着いていない。
（サロメさまはチーロさまと仲が良かったと聞いていたな）
「サロメさま、あなたは何かしらの理由でチーロさまと会う約束をしていた。ところが、待ち合わせ場所にいたのは殺害されたチーロさまだった。慌てたあなたは、自分に容疑が掛からぬよう待ち合わせ場所から遺体を移動させた。そうですね？ 護衛騎士の手を借りたら運べますよね？」
クロエは床に転がっている女性騎士を見た。サロメの護衛騎士は前回から変わっていないと報告書には書かれていた。
サロメの表情は戸惑いつつも、さっきほどは動揺していない。
（ニアピン？ だけど、全部正解じゃない？）
何が正解で、何が間違っているのだろうか。
石テーブルでチーロとサロメが待ち合わせていたということは、報告書には書かれていなかった。
チーロは石テーブルに座っているところをクロスボウで殺された。だが、ここで遺体を移動する意味はあるのか。
チーロが護衛を置いて一人で出かけたことも気になるが、行先すら教えなかったのはどういうことだ。
何かしらサロメと内密な話をするために、チーロは待ち合わせ場所の石テーブルにやってきた。でも、サロメが来るまでにチーロは何者かに殺害された。
（サロメさまとチーロさまが密会してたとして、だから何だ？ 遺体を

移動するほどの理由になるもの？）
なにより、密会にはもっとふさわしい場所があるだろう。あの城壁のすぐ傍は、聖騎士たちの訓練の声が響く。ならば、密会の声が逆に城壁の外に聞こえる可能性も考えられないだろうか。
（外の声が響く。ということは、中の声も通る？）
クロエは何か引っかかる。そこで、ラズが持っていったカードを思い出した。
『恋人』を意味するカード。
（まさか!?）
クロエは、散らばっていた記憶の断片を並べ直す。
なぜサロメが石テーブルにいたのか。
なぜサロメは城壁に穴があることを知っていたのか。
なぜサロメがチーロの遺体を移動したのか。
「サロメさまは、城の外の誰と何を話していたのですか？」
サロメの顔色が一瞬で青白くなった。まさに血の気が失（う）せていた。
（当たりだ）
エラルドとイネスは、クロエを見て黙っている。
では、城の外の人物との会話を聞かれてチーロに脅されていたか。
いや、それとも違う気がする。
サロメにとって、チーロ殺害は意図せぬものだったと仮定して――。
「その誰かが、独断でチーロさまを殺害したのですね？」
「違います！ 彼はそんなことしません！」
誰にもわかる形でサロメが声を荒らげたのは、初めてではないだろうか。サロメの美しい眉は歪み、目を潤ませてクロエに訴えかけていた。
「きっと、きっと間違いなんです！」
どこか冷めた、諦めたかのような表情の美女に、焦りと懇願が見えた。
（ああ、本当に『恋人』のカードで合っていたんだ）
クロエは、もっと占いに自信を持ってもいいかもしれない。
「彼とは一体、誰なんですか？」
サロメはそっと視線を外す。言いたくない、庇（かば）いたいのはわかる。
「聖騎士ですよね？」
エラルドが確認するも、サロメは無言だ。
「クロスボウを使う部隊といえば……」
「違います！」
サロメは否定する。大きくテーブルを叩くので、音が外に聞こえないか心配になったが、防音の魔道具を使っていれば問題ないだろう。

「彼は誰かを殺すなんて、そんなことしません！」
はっきり言い切るサロメ。だが、彼女の行動は矛盾している。
クロエは、この矛盾した行動が何を示しているのかわかった。
（恋は闇）
一体、サロメの言う『彼』とは何者なのだろうか。どちらかと言えば、男性不信に思えるサロメなのに。
『顔をすっぽり隠せるヴェールがあればって』
ふと、クロエはゾエが話していたことを思い出した。顔を隠して生き

ていたいサロメだ。
『誰かに会いに行くときに便利って言われても』
誰に会いに行くつもりでいたのだろうか。
「サロメさま。あなたはその『彼』が誰なのか、直接会ったことがないのでしょう？」
「……」
その沈黙が答えだった。図星だ。
顔も合わせたことがない『彼』を庇うサロメ。エラルドが何か言いたそうな顔をするが、クロエは手で制止する。今のサロメに正論を言っても仕方ない。
「サロメさまが『彼』を愛していらっしゃるのはわかります。彼は無実なのですよね？」
「クロエさまは信じてくださるのですか？」
サロメの大きな目には、涙があふれんばかりだった。
（心の隙をつくようで悪いけど）
「サロメさまは今、嘘をついておりません。私にはわかりますから」
クロエはその隙間にするりと入り込む。
「どんな方なんて、わからないですよね？」
「……」
サロメは無言になる。
クロエはエラルドとイネスを睨む。とりあえずあっちへ行ってくれないか、と視線で通じたらしく、二人は部屋の隅へと移動する。
遠ざかっているが、話し声は聞こえると思う。でも、ここから先はサロメの気持ちの問題だ。
「……彼は、私のことを大教会に勤める神官見習いだと思っていたようです」
ぽつりと語り出すサロメ。クロエは頷きつつ、少しずつしゃくりあげ始めた彼女の背中をさする。
「二年前の選抜試験中、たまに一人になりたくて、護衛騎士に頼んであの場所にいました。私みたいなのが人前で泣くと、ただただ迷惑なので」
（あっ）
サロメの表情の乏しさの理由。感情をあらわにすると周りがどう思うかわからない。男たちが見れば、どうしたのかと駆け寄ってくる。女たちが見れば、男を誘うための演技だと妬（ねた）む。
愛想一つふりまくことで勘違いしてしまう男ども、それが気に食わない女ども。
魔道具のせいとはいえ、幼い頃から繰り返された光景に、サロメの心はすり減ったに違いない。
「いつも通り石テーブルに座っていると、私に話しかけてくる人がい

ました。『何が悲しいのですか？』と。周りには誰もいない、どこから聞こえるかと思えば、城壁の向こうからでした。声を殺していたつもりなのに、聞こえていたんですね」
（城壁の向こうから？）
クロエは疑問に思ったが、黙って聞き役に徹する。
「十数年ぶりに、まともに男性と話すことができた気がしました。顔は見えないけれど、彼は私のくだらない愚（ぐ）痴（ち）を聞いてくれました。もちろん、名前は名乗っていませんし、神子候補としての仕事の話はしていません」
「そうなんですね」
「彼も、少しだけ話をしてくれました。彼はアドンと言って、『僕も嫌われているから、一人でいることが多いんだ』と話してくれました」
アドン、どこにでもありそうな名前だ。だが、十分な手がかりになるのだと、部屋の隅にいるエラルドの表情でわかった。
（やっぱり話は聞こえていたんだな）
ぽつぽつと話すサロメの姿は、数（あま）多（た）の男性を籠（ろう）絡（らく）してきた傾国の美女とは思えず、まだ思春期の甘酸っぱい少女のように思えた。
作法に失敗して同僚に怒られたこと、言わなくていいことを言って相手を傷つけてしまったかもしれないこと、お昼ご飯が美味しくてついおかわりをしてしまったこと。
些細なことをアドンは聞いてくれた。休憩中のほんの十数分、サロメはそれを楽しみにしていた。
「私はアドン卿のことを名前以外知らない。彼もあまり踏み込んだ話をしない。もうすぐ神子が二人決まる。そうしたら、もう彼と話すことができない。そう思うと、いてもたってもいられなかったのです」
「どうされたのです？」
「チーロさまにお願いしました。チーロさまの祝福（ギフト）で、アドン卿のことを調べて欲しいと」
「だから、チーロさまがあの場にいたのですね？」
「はい。チーロさまには最初断られました。だって醜（しゅう）聞（ぶん）にもなりかねないことだと。チーロさまは幼いけれど、私のことを心配してくれて……。でも、私は他に頼れる人はいませんでした。侍女も護衛も、養父に私の行動を報告する義務があります。決して彼女たちには話せない内容でした」
チーロが殺害される数日前にサロメと揉めていたという話は、このことだろう。結局、チーロはサロメに負けたようだ。
「チーロさまはアドン卿のことを調べるため、いつもの休憩時間に私の代わりにあの石テーブルにいてもらいました。アドン卿は鋭いの

で、私ではないと気付くと話しかけないはずです。だから、チーロさまに祝福（ギフト）を使って追いかけてもらう予定でした」
「サロメさまは一緒ではなかったのですか？」
「ええ。チーロさまは動物と心を通わせると聞いていましたが、詳細な能力については神子候補同士でも秘密です。時間になったら、石テーブルで落ち合う約束をしていました」
「そして、矢の刺さったチーロさまを発見したのですね」
頷くサロメの目からは、ぽろぽろと涙がこぼれていく。
「チーロさまの護衛騎士はどうしていたんですか？」
ぴくっとイネスが反応した。
「当時、聖獣の森なら問題ないだろうと一人でいることが多かったようです。護衛騎士なりにチーロを気遣った結果です。チーロにとっても、選抜試験はストレスが溜まる環境だったのでしょう」
そう返事をしたエラルドは、どこかやりようのない表情を浮かべていた。
「アドン卿の仕業ではないと思いつつも、アドン卿に容疑がかかるかもしれない。だから、チーロさまの遺体を森の広場へと移動したということですね？」
「はい。その通りです。二年前、私はちゃんと話すべきでした。言い訳は致しません。私が全て悪いのです」
クロエはまたサロメの背中を撫でる。
エラルドとイネスはぎゅっと拳を握り、何かを我慢しているように見えた。二人とも普段ほど余裕があるように見えないが、殴りかからないだけずっと忍耐力がある。
「では、チーロさまを運んだのは？」
「私と、護衛騎士で」
サロメはまだ床に倒れている女性騎士を見た。他の護衛騎士と違い、この人はとばっちりで気絶しているだけだから申し訳ない。
「護衛としてやってきた彼女には、申し訳ないことをしました。養父の使いとはいえ、私に同情してくれたのです。全て私のせいです」
サロメはもっとクロエに話を聞いてもらいたそうだったが、足元にいる護衛騎士たちが目覚めようとしていた。
「……クロエさま」
サロメはクロエの袖を引っ張る。大人びた女性だと思っていたが、今の姿は幼女のようだ。赤いうさぎのような目は、さらに充血している。
クロエはサロメに抱き着き、彼女の背中を叩く。
「わかりました。アドン卿についてはお任せください。私が調べます」
クロエはハンカチを取り出し、サロメのあふれる涙を拭いた。

クロエは他の護衛騎士たちよりも先に、女性騎士を起こすのが先決だと考える。
「起きてください、起きてください」
クロエが倒れた女性騎士を立たせる。
「あれ？ 私は何を……？」
女性騎士は、まだ頭がぼんやりしているようだ。
「詳しいご説明をしますので、こちらに来てください」
イネスが女性騎士を誘導し、サロメもそれに続いて部屋を出る。
「あれ？ 私たちは一体？」
さっきまで酒でも飲んだかのような聖騎士たちの態度だったが、今は寝起きの顔になっていた。
エラルドは二つの魔道具を片付けると、起きた聖騎士たちににっこり笑いかける。
「皆さん、気分はどうですか？」
「……エラルド卿、ん？ えっと、私は……」
皆が皆、頭を抱えている。正気に戻ったようで、何やら顔を青白くしていた。
「あの、私は一体何を……」
「僕の護衛対象であるクロエ嬢に言いがかりをつけていました」
エラルドはここぞとばかりに言ってくる。全員が全員、記憶はあるようだ。
「ク、クロエ嬢。私たちはどうかしていた。一体、なんでこんなことに」
「申し訳ありません」
「どうして、こんな浅はかなことを……」
それぞれ反省しているようだし、クロエとて追い詰めるつもりはない。
「別にお気になさらず」
クロエは笑顔で対応する。彼等に悪気はなく、不可抗力だとわかっている。
それより、そろそろ疲れてきたので部屋に戻りたい。
「……もしかして、あの魔女が」
聖騎士の一人が、そう口にした。
クロエは『魔女』という言葉に反応する。建国物語にも出てくる『魔女』だが、やはりいい響きではない。
「すみません。今、何か言いましたか？」
クロエは笑顔から相手を威圧するような冷たい表情に変える。もしサロメを『魔女』と言い愚（ぐ）弄（ろう）するのなら、クロエもまた同じ気持ちで対応する気だ。
「いえ。なんでもありません」

空気を呼んだ聖騎士はすかさず首を振ったが、傾国の魅力を持つサロメはこうして勝手に惑い、勝手に正気に戻る男たちの憧れと非難を受けてきたのだろうか。
「今回の件は、できる限り穏（おん）便（びん）に済ませたいと思います。ですが、あなた方次第ですので、よろしくお願いいたしますね」
エラルドの笑顔は完全に商人モードだった。
（ご愁傷様）
彼等は、完全に弱みを握られたようなものだった。

IV

大教会の宿舎に戻ってきたクロエは、思わずベッドに飛び込んだ。
「あー、もう疲れたー」
「おやめください」
無表情のイネスに、ペシッ、ペシッと素早く手（て）刀（がたな）を入れられるクロエ。しかし、イネスは数時間ぶりに会う青い聖獣を見るなり、鼻血を垂らさん勢いの惚気顔に変えた。
その聖獣はクロエたちを待っていたのか、窓の外で首を傾げていた。
「とりあえず着替えましょうか？」
「そうですね。失礼いたしました」
転んだ子どもを抱っこして服が汚れたままだったのだ。
さっさと着替えているうちに、テーブルには夕食が準備されていたので、なんだかんだでイネスは有能だ。
「お疲れのようですので、お部屋で召し上がりますよね？」
「ありがとうございます」
その通りだ。食堂で食べるのも悪くないと思ったが、どうしても疲れたときは人前に出たくない。
「エラルド卿は？」
「色々と後処理、及び情報収集でございます」
大変だなあとクロエは思う。
「あの」
「なんでしょうか？」
「エラルド卿は騎士の中でも腕が立つのですか？」
クロエは、院長室に集まった聖騎士の数を思い出す。
（ひい、ふう、みい……）
クロエに冤罪を吹っ掛けてきた聖騎士は四人いた。たとえサロメの護衛である女性騎士が中立であったとしても、エラルドが四人を相手に立ち回れるのかと心配になった。そんな一触即発の雰囲気だったからだ。
「……ええっと」

「ええっと？」
イネスは青い聖獣ラズの毛並みをブラッシングしながら目をそらす。
「強い方だと思います。中の上くらい」
「中の上？」
クロエは、「ああん？」とガラの悪い声を出してしまった。
「護衛としてどうなんです？ その強さ？」
「護衛としては、まあ。ですが、ご安心ください。エラルドさまの本当の力は武力とは別のところにありますので」
イネスにしては歯切れが悪い。
「なんですか？ 口先ですか？」
クロエは不安になりつつ、フィンガーボウルで手を洗う。
「金の力」
「金の力」
イネスの言葉を思わず反芻してしまうクロエ。
（確かに金の力は強いけど）
かき集めた魔道具で殴る真似でもするのだろうか。
いやいやいや、とクロエは思いつつ、前菜に手を付けた。
「クロエさま。あなたの安全は必ず守りますので、それだけは信じてください」
「……」
食事中に喋るな、と散々イネスに躾（しつ）けられたので、クロエは頷くだけで答える。
「もう二度と、神子候補を失うような真似はいたしません」
「……」
妙にイネスの言葉は深く響いた気がした。彼女の目に嘘偽りはなく、ただ信念を感じられた。

エラルドが帰ってきたのはクロエの夕食が終わった頃だった。
「遅くなりました」
外套を脱ぐエラルド。
クロエは食後の紅茶を飲んでいたので、エラルドにも紅茶が出される。
「どうでしたか？」
「はい。良い知らせと悪い知らせ、どちらがいいですか？」
「なんですか、それ？ とりあえず良い知らせからお願いします」
クロエは早く結論が聞きたかった。
「サロメ嬢が言うアドン卿について、目星がつきました。聖騎士の中でも特殊な、偵察隊にいる者だとわかりました。有能な聖騎士で、『千里耳』の二つ名を持つ者です」
「悪い知らせは？」

「アドン卿はチーロ殺害の犯人ではありません」
「ずいぶんはっきり言いますね？」
「彼は生まれつき目が見えません。そんな彼がクロスボウを使えるわけがないのです」
目が見えない。そして『千里耳』の二つ名を持つ。
クロエは、サロメの話の中で引っかかったことを思い出す。
クロエはかなり耳がいいほうで、しかも五感強化の魔道具も使用していた。だから、耳を澄ませることで外壁の穴に気が付いた。
でも、アドンは城壁の向こうのサロメの泣き声に気が付いた。五感のどれかが欠けている者は、それだけ他の感覚器官が優れることがあるらしい。アドンはその典型であり、目の代わりに耳が非常に良いのだろう。
おそらくサロメとて、一人であっても大声で泣くことはないだろう。声を殺して涙を流していたに違いない。
見た目で人を惑わせるほどの美女と、盲目の聖騎士。
ある意味すごい運命だ。
「どうして彼だとわかったんです？」
クロエは率直な質問をした。
「思い出したんです。『アドン』という騎士が、チーロの墓参りに来たことがあったのです。神子候補が亡くなったと聞いて、何人か貴族や聖騎士が祈りを捧げに来たことはありましたが、僕も有名な『千里耳』とは接点がなかったもので」
「もしかして、アドン卿はチーロさまをサロメさまと勘違いしているのでは？」
「おそらく、その通りでしょうね」
たまに休憩時間中に話していた少女。だが何の連絡もなくいなくなった。それとほぼ同時に、神子候補の死を聞いたアドンがチーロのことを例の少女と間違えても仕方あるまい。
「サロメさま。見た目は大人っぽいですけど、泣きだしたらずいぶん幼く見えますからね」
クロエは泣いたサロメを年上と思えず、養護院にいた子どもたちと同じようになだめた。声だけなら、アドンがサロメを十三の少女と間違えたとしても無理はない。
「アドン卿の聴覚は非常に優れており、剣であれば対人戦もつつがなく行えます。暗闇であれば、勝てる者はいません」
「超人ですね」
「僕よりずっと強いです」
「はい」
クロエは冷めた声で返す。エラルドは不思議そうな顔をしてクロエを見ると、イネスへと視線を移動した。イネスはそっぽを向いている。

「とはいえ、さすがにクロスボウを使っての狙撃は無理ですので、彼にチーロ殺害は不可能という話です」
「これも良い話ではありませんか」
犯人はわからない。でも、サロメにとってこれほどの朗報はなかろう。
（アドン卿について話すべきか否かだけど）
クロエはどうすればいいか判断しづらい。
真犯人はわからなかったが、少なくともサロメはシロだとわかった。
そう思うと、紅茶を美味しく感じる。
「そういえば、サロメさまの護衛騎士はどうだったんです？ 上手く説明できました？」
「私がへまをするとでも？」
自信満々のイネス。
「彼女もまた、サロメさまについて深く同情しているようでした。サロメさまは知られていないと思っていたようですが、逢引していることも黙認していたようです」
「サロメさまに味方がいたのは大きいですけど」
同時にサロメの能力が消えてしまったら、女性騎士はサロメの養父から罰せられるのではないだろうかと心配になる。
「有能そうな方ですので、今回の件が終わったらビルツ家で雇うことも考えております」
補足するようにエラルドが言った。そういうことは抜かりない。
「ただ、一つ気になることがありまして」
「何ですか？」
「あの女性騎士も他の護衛騎士と一緒に倒れたことです」
「えっ？ 目隠しをしていなかったからじゃないんですか？」
てっきりクロエは、あのまぶしい光を見ることで気絶させる魔道具だと思っていた。
エラルドは懐から台座が付いた水晶玉を出す。
「これは、ただの目くらましではありません。精神系の祝福（ギフト）、または魔道具の効力を打ち消すことに特化した魔道具です。神秘の力は同じく神秘の力で打ち消し合うと教えましたけど、これはその強力版ですね」
エラルドは、サロメの魅力が魔道具由来であれば消せると言っていた。確かに、この魔道具なら使えそうだ。
「ですが、副作用として気絶させてしまうんですよ。もちろん、何も精神を侵されていなければまぶしいだけで済みますけど」
「でも、サロメさまの護衛は気絶してしまったと」
どこか腑に落ちない。
「ええっと、護衛の女性騎士もサロメさまに誘惑されていたとした

ら？」
「その可能性も考えたんですけど、違うでしょう。魔道具『夢魔の香水』は異性にしか効かないと記録に残っていますし。何より──」
エラルドはクロエの左手首を見る。
クロエは左手首にはめられたバングルの裏側をのぞき込んだ。刻印された紋様は、昼に見たときと変わらなかった。
「私は何にも魅了されていないようです」
確かにサロメにはドキドキしたが、付き従うほど狂わされていなかった。
「では、どうして？」
クロエは紅茶に口を付ける。
「無意識のうちに、誰かに祝福（ギフト）、もしくは魔道具で操られていた可能性があります」
「いや、それ、大変悪い知らせだと思うんですけど！」
クロエは飲んでいた紅茶をこぼしそうになった。
「もし誰かを操る祝福（ギフト）なんてあったら、それこそ城壁の外にいた誰かを操ってチーロさまを撃った可能性があるじゃないですか？」
と口にして、クロエは止まる。
「どうしました？」
エラルドが止まったクロエをまじまじと見る。
「えっと、あの時チーロさまではなく、サロメさまが狙われた可能性はないかと考えました。そのほうがしっくりきますよね？ いつも石テーブルに座っていたのはサロメさまです。偶然、チーロさまが狙われるのはタイミングが良すぎるんじゃないかと思いました」
同じローブを着ていたら、後ろ姿で誰かわからないはずだ。
「……なるほど。サロメ嬢への怨（えん）恨（こん）は、申し訳ありませんがいくらでもありますね」
クロエが見た報告書ですら、ひどいことがたくさん書かれていた。サロメを巡って乱闘騒ぎが起こるのなら、同時に彼女を殺して自分のものにしようなどと考える不届き者がいるかもしれない。
そして、正気に戻った聖騎士の一人はサロメのことを『魔女』と罵（ののし）った。サロメに惚れた挙句、失敗し取り返しがつかなくなったあとで正気に戻り殺意を抱く。これも考えられる。
混乱しているサロメはともかく、護衛の女性騎士がチーロの遺体を移動した理由も、そこを考慮に入れたらわかる。自分の護衛対象の神子候補の代わりに別の神子候補が死んだとなれば、隠したいはずだ。
『うーん』
クロエとエラルドは唸る。イネスはラズを愛（め）でつつ、何やら準備をしている。

「まー、色々調べることも増えてしまいましたねえ」
エラルドは心を落ち着けるように紅茶を飲む。
「クロエさま」
イネスがラズを撫でつつ、テーブルの上に紙を置く。話がひと段落つくのを待っていたらしい。
「明日の予定です」
「ありがとうございます」
のぞき込むと、明日は終日、王都で行われるバザーの手伝いとある。教会が主催となり、売り上げの一部は養護院の活動費、炊き出しなどに使われるのだそうだ。
「ご一緒されるのはヴィオレットさま、ゾエさまです」
「そ、そうですか」
超一級品しかつけそうにないヴィオレットがバザーとは、あまり想像がつかない。クロエは気を引き締めないといけないと思う。ゾエとは、なんとか上手くやっていけそうだ。
「神子選抜試験って試験という気がしないのですけど、気のせいですか？」
「一度白紙に戻ったとはいえ、クロエ嬢以外は二年前にほとんど終わらせていましたから。もう最終段階の生活態度調査くらいですね。貴族に近いことをやらせるのがほとんどだと思います」
「じゃあ、案外何もしなくていいんでしょうか？」
クロエは、自分が開くお茶会について色々悩んでいた。しなくていいなら、それに越したことはない。
「それについては、はっきりしないので言い切れません。過去の神子選抜試験の最終段階は、七日から最大半年と幅が広いので、終わる日程はわかりません。期間の長さについては、神子候補云（うん）々（ぬん）より背景の力関係と言っておきます」
クロエはふむと頷く。
「私は数に入れられていないということですね」
八百長試合に参加するようなものかと納得する。
「神子候補たちにはもちろん誰が合格か伝えていないので、気を抜かないでください」
なら仕方ない。仕事として参加するのは忘れない。
ついでに、忘れてはならないことを思い出した。
「エラルド卿」
クロエは両手のひらを見せる。
「危険手当ください」
「今言いますか？」
「ええ。とりっぱぐれても困りますから」
貰う物はしっかり貰っておかねばならない。

六章 ―― チャリティバザー

I

バザーは、王都の中央広場にて行われていた。

「ゾエさん、クロエさん。市民の皆様が見ているのですから、しゃんとなさってください」

そういうヴィオレットの豪華な髪は、普段より二段階ほど巻きが強そうだった。

ゾエはヴィオレットの前だからか、おしゃべりでお洒落（しゃれ）な少女ではなく、銀色のストレートヘアが朝日に輝いて美しい神秘的な美少女になっていた。猫被りが上手だ。

王都のバザーは月に一度行われており、かなり大掛かりなものだ。百店舗は軽くあるだろうか。周りには軽食の露店も並び、にぎわっている。

「クロエ嬢、あまり動き回らないでください」

「気を付けます」

人込みに紛れたら、エラルドもクロエを見つけるのが大変だ。

「一応、イネスも遠くから見ていますので、もしはぐれたときはイネスを探してください」

「わかりました」

ところで、早速問題がある。

「私は、何をすればいいでしょうか？」

バザーに行けと言われても、また養護院訪問と同じだ。勝手がわからない。他の皆は知っているということで、クロエへの説明が省略されていることが多すぎる。

「ははは、そうですね。とりあえずヴィオレット嬢に倣（なら）って偉い人に挨拶し、できる仕事でも貰いましょうか？」

「神子選抜試験って、やたら自主性を重んじてますね」

「神子は外交官に近いので、判断力が問われる仕事です」

エラルドに言われた通り、クロエは中央の一番大きなテントに向かう。

テントからヴィオレットが出てきたと思ったら、入れ替わりにゾエが入っていった。

ゾエが出てくるのを待っている間に、クロエは地図を確認する。

円形の広場の中央が、今いる大きなテント。南側は食品関係、西側に衣料品やアクセサリー、東側は骨董品や日用品、その他などだ。北側にはテーブルと椅子が配置されており、休憩できるようになっている。

「楽しそうだな」

バザーの出品の中には、掘り出し物もたくさんある。辺境の教会で

は、良さそうな衣服があれば、子どもたちを使って買いにいかせていた。もちろん、値切り交渉も忘れない。さすがに神官見習いの姿で値切りはできないので、子どもたちに銅貨一枚でも安く買えるよう交渉術を教え込んだ。
「何か欲しい物でも？」
「……いえ、別に」
「遠慮なさらず、僕は成金伯爵の息子ですよ？」
エラルドが自信たっぷり言った。
「では……」
クロエは大きく息を吸う。
「三ピエサイズの服、三着。チュニックタイプ、色はこだわりなし。半トワーズサイズの上着が六着、色は明るめのもの、緑系は却下。スカートは一つ、ズボンは二つ。四ピエサイズの服は四着、色合いは同じ系統で、全部ズボン。五ピエサイズの服、八着。ワンピースは二枚ほど欲しい、色は赤系が好ましい。あと三ピエ一つ、半トワーズ三つ、四ピエ二つ、五ピエ四つ、それぞれ白いチュニックが欲しいです。素材は全て綿が好ましいです」
「えっと、メモを取る余裕をくれませんか？」
エラルドが顔を引きつらせる。
「録音の魔道具を持ってましたよね？ 防音もできるやつ」
クロエは、エラルドが護衛騎士たちを脅した巻貝の形をした魔道具を思い出す。
「ええっと、あれ、ハッタリです。実は、防音機能しかありません。魔法や祝福（ギフト）を魔道具にする際、複雑なものは作りづらいんですって」
「……」
あの場ではエラルドに注目していなかったので、嘘と見破れなかった。
少し悔しいクロエ。
エラルドの持つ魔道具は三つと言っていたが、『物理障壁』、『防音』、『能力無効化』と全部わかった。
クロエは筆記用具を借り、さっき言ったメモをさらさらと書く。
その間に、テントからゾエと護衛の女性騎士がやってきた。
「クロエさま！ 今日は楽しみましょうね！」
ヴィオレットの前での大人しい美少女はどこへやら。元気な少女が顔を輝かせている。
「楽しそうですね」
「ええ。バザーってたまに変わった服が出品されているんですよ。アクセサリーも手作りで、よく面白い作家さんを見かけるんです。しかも今日はなんと、西側のお手伝いを任されたんです！」

ゾエは生き生きしている。楽しそうで何よりだ。
「西側は衣料品が売られている場所ですね」
「はい！ 楽しみで仕方ないです。では、また」
元気よく手を振るゾエに、付き従う女性騎士も会釈する。
サロメに付く女性騎士は印象がやたら薄かったが、ゾエに付く女性騎士は、騎士でありながら華やかで、どこか凛とした花を思わせた。
「同じ女性騎士でも、ずいぶん印象が違いますね」
「まあ、騎士で一括りにできるものではありませんから」
「サロメさまはわかるとして、ゾエさまの護衛も女性騎士なのって面白いですね。案外、女性騎士の割合って多いんですか？」
「うーん、一割にも満たないですよ。その分、しっかりした女性は多いですけど」
やはり神子候補に合わせて、女性騎士を配属するケースが多いのだろう。
「エラルド卿とどちらが強いですか？」
「……」
エラルドの返答はない。イネスが言っていた『中の上』とは身内贔（びい）屓（き）ではないだろうか。
「さあ、行きましょうか」
エラルドはひたすらさわやかな笑みを浮かべ、テントに入っていく。
クロエは大丈夫かな、と不安になりつつエラルドに続く。
テントの中には中年の男性神官とそのお付きの若い神官たち、それと商人らしき人たちがいた。
「これはこれは、聖女候補」
中年神官がクロエに頭を下げる。頭は下げるが、こちらの名前を言わない。
（あー、まだ候補だからね）
名前を覚える必要がないと言う意味だろうか。あと、この神官は聖女派だということがわかる。
クロエは、イネス直伝のお辞儀をする。
「クロエと申します。何か私にできることはないでしょうか？」
神官は商人たちと話し合いをしているようだったので、手短に話すのがいいだろう。
「では、聖女候補には南側を手伝っていただけますか？ ヴィオレットさま、ゾエさまには他の場所を担当してもらっています。何かわからないことがあれば、南入口で焼き栗屋をしている主人に話を聞くといいでしょう」
自己紹介をしたところで、やはり名前を言うつもりはないようだ。
ヴィオレット、ゾエの名は覚えていたので、神子になるかならないかではなく、貴族の子女を優先しているのだとわかった。

その代わり、商人たちは妙にかしこまっているように見えた。
「かしこまりました」
クロエは大人しくテントを出る。
「では、まいりましょうか？」
「はい」
クロエは、エラルドと共に広場の南側を目指した。

II

クロエはずんずんと広場を南下しつつ、周りを見る。
「さあ、美味しい焼きたてワッフルだよ。銅貨一枚追加でクリームをつけるよ」
甘い匂いが鼻孔をくすぐる。
「こんがりチーズたっぷりの芋グラタンはいかがかー。今なら焼きたてよー」
湯気がたつグラタンがテーブルの上に並ぶ。
「ガレットはいかが？ 砂糖とバターたっぷり、もっちり美味しいよ」
ガレットの表面についた焦がしたザラメが、きらきらと輝いている。
「クロエ嬢、何か食べますか？」
「別にお腹は空いていませんけど」
「さっきから唾を飲み込む音がすごいのですけど」
失礼なことを言う護衛騎士だ。
南側は食べ物の店も多く、人通りも多い。クロエでもやれることは多そうだ。
「エラルド卿」
「なんですか、クロエ嬢？」
「私、仕事を貰いに行きますけど、エラルド卿は少し離れたところで待っていてくれません？」
「別にいいですけど。どうしてですか？」
「〝お客さん〟になるのは良くないかなと思っただけですよ」
クロエは一人、南門の焼き栗屋へと向かう。
「すみません」
「ああ。あんたが教会からの手伝いのもんかい？」
焼き栗屋の主人は、やってくるのは神子候補という話は聞いていないようだ。エラルドに離れていてもらってよかったと思う。
「はい。何か手伝えることはありませんか？」
「やって欲しいことは一杯あるよ。とりあえずアレ、片付けてくれる？」
主人が指した先には、大きな木箱とあふれんばかりのゴミがあった。
「……かしこまりました」
クロエの予想通り、主人は遠慮なく仕事をくれた。

大量のゴミを前に、エラルドの笑みが強張る。
「ええっと、僕がついていったら、もう少し華やかな仕事を貰えたかと思いますけど」
「いえ。私が嫌いなものって知ってます？」
「……なんですか？」
「慈愛の心を見せつけるために形だけ優しくして、汚れ仕事を全くしない貴族令嬢の偽善の皮が剥がれた時です。慈善活動を偽善活動だと見破られた時ほど、周りは失望します」
エラルドが微妙な顔をする。
「偽善ではなく、偽善の皮って……。偽善はいいんですか？」
「偽善は実利があれば問題ないですよ。でも、剥げたメッキなら最初から見せないほうがいいんです。子どもたちに『金持ちや貴族が嫌いだ』と思わせますから。そんな子どもは変なプライドをもって貴族にも媚（こ）びなくなる。媚びない子どもって可愛くないので、貰えるものも貰えなくなるんですよ。割り切って、いただけるものはいただけばいいのに」
「なんか、複雑ですね」
理解しがたいという顔をしながら、エラルドは大きな麻袋を持ってくる。
クロエは、ゴミ箱からはみ出たゴミを麻袋に突っ込む。ゴミの種類は、ほとんど屋台で買った食事を包んだ紙や皿だ。
「エラルド卿はやらなくてもいいですけど」
「えっと、僕がやらないと、それこそメッキが剥げた偽善になりません？」
「よくおわかりで」
クロエは、にいっと笑う。この察しの良さと変にプライドが高くないところは、エラルドの長所だと思う。
麻袋を突き破りそうな串は別に集めておく。しかし、ゴミを片付けるそばからゴミ箱にはどんどんゴミが増えていく。誰かがゴミを投げ捨てたとき、クロエのローブにべちゃっとソースがかかる。
「謝らせますか？」
エラルドが確認する。
「別にいいですよ、向こうはお客さん気分なので。それより、イネスさんは近くにいらっしゃるんですよね？」
「はい」
「あとで新しいローブを持ってきてもらえるでしょうか？」
「伝えておきます」
エラルドも服が汚れている。
（あまりばっちぃ恰好してると、どちらの神子候補にも嫌われそうだしなあ）

清潔感は大切にしたい。
「エ、エラルドさま。何をやっておられるのですか？」
驚いたような声が聞こえたので、クロエは額（ひたい）を拭いながら顔を上げると、さっきのテントで見かけた商人の一人がいた。
（エラルドさま？）
知り合いだったのか、とクロエはエラルドを見るが、エラルドはぽかんとしているので、商人が一方的にエラルドのことを知っているのだろう。
（そういや豪商の息子だった）
テントで商人たちが改まっていたのは、エラルドがいたからだろう。アプトビルツ商会の恩恵を受けない人間はこの国には存在しない。商売人なら、なおさらだ。
「見ての通りゴミ箱を片付けています。いやあ、大変ですねえ」
エラルドの袖には、べったりとソースがついていた。
「ともかく、おやめください。あなたがすることではありません」
「どうしてです？ ゴミの片付けは誰かがすることでしょう？ 僕の今の主人たる神子候補がやっているというのに、僕だけ見ているわけにはいかないじゃないですか」
「し、しかし」
クロエはそのやりとりを横目に見つつ、ゴミをどんどん片付ける。手を動かさないと終わらない。
「神子候補も何か言ってください。彼が誰だかわかっているんですか？」
「私はやらなくてもいいと言いました。彼の意思を尊重します」
（だったら手伝えよ）
これを口にしないだけ、クロエは優しい。
商人は何やらエラルドに説得を試みていたが、諦めて掃除係を用意することで決着がついた。
「仕事を取られましたね」
「仕事を取られました」
クロエの手は汚れ、ローブにはソースがあちこち飛び跳ねている。
「一応聞きますけど、仕事を取られる前提で動いてませんでした？」
エラルドの質問に、クロエは何も言わず笑顔だけ見せる。
（エラルド卿のこういうところ、食えないんだよな）
クロエはしみじみ思う。
「テントを用意しましたので、着替えてください！」
商人は困惑を隠せない顔で言った。
「わかりました」
肝心の着替えはどうするのかとエラルドを見ると、エラルドの手にはいつのまにか布の包みがあった。せかせかと去っていく男性の影が見

える。
「着替えを届けてもらいました」
クロエはテントに入ると、エラルドから手渡された服に着替える。ちゃんと糊（のり）がきいたローブだ。しっかりシュミーズの替えまで入っている。
「下着を殿方に預けるんかい」
思うところはあったが、汗もかいていたのでありがたい。汚れた衣服はまたしっかり布に包んで、零（こぼ）れないようにする。
テントを出ると、さっきの商人がペコペコと頭を下げながら茶の準備をしていた。
「申し訳ありません。汚れ作業をさせてしまいまして。掃除を命じた者には、きつく言っておきますので」
商人はエラルドに向かって話しかけていたが、当のエラルドはクロエの方ばかり見る。クロエを立てているのなら、クロエが受け答えしなくてはいけないだろう。
「いえ。焼き栗屋のご主人は、私が誰であろうと関係なく仕事を振ってくれました。すばらしい人です。何か罰するようなことはしないでください」
焼き栗屋の主人を庇う形になるのは、そう仕向けたのがクロエ自身だからだ。変に責められても困る。
「わかりました」
商人は胸を撫でおろす。
クロエは改めて、広場の南側を一望する。食べ物の屋台ばかりなので、他の場所に比べて人通りが多い。にぎわっているが、その分汚い。ゴミ箱はあふれかえっているが、ゴミ箱に入れるだけまだマシで、その場でポイ捨てする者も多い。
「掃除をしてくれる人はいないんですか？」
さっきクロエたちの代わりにゴミ掃除をしにきた人たちは、専門の掃除係には見えなかった。
「いやー、お恥ずかしながら……。前にゴミを引き取ってくれた業者が引き取れなくなりまして」
「新しい業者は見つかっていないんですか？」
つい気になって聞いてしまうのがクロエの癖だ。田舎の教会の懺（ざん）悔（げ）室（しつ）は懺悔ではなく談話になることも多いので、受け答えが基本になっている。
商人は、テーブルの上に茶菓子として置かれたワッフルを前に出す。
「この器をどう思います？」
質問を質問で返す時、人間は話を聞いてもらいたいときだ。
ワッフルの下には木の板が置いてある。丸太を薄く切っただけの、皿とも言えないものだ。屋台で使われているもので、さっきからゴミ掃

除でかさばっていた代物だ。
「屋台の使い捨ての皿としては十分かと思いますけど、問題があるんですか？」
「前は、皿の代わりにパンを使っていたんです。パンはそのまま食べる客もいますし、捨てても家畜の餌として引き取ってもらっていました。でも、今年はパンを使うことができなかったんです」
「小麦の高騰ですね」
口を出したのはエラルドだ。
「うちの商会でもどうするか考えていましたから」
（確かに、今年はパンが少し高かったなあ）
庶民が口にするパンは、雑穀が混じっているので急な値上がりはない。それでも大所帯では、生活必需品の高騰は死活問題だ。
おかげで、クロエは夜な夜な鉱山の町の酒場に出稼ぎに行かねばならなかった。
「他国の小麦輸入を増やす他にも、保存が利くパスタ加工用の小麦をパン用小麦の代用に使ったり、ライ麦やモロコシの含有量を増やしたりしました。なので、比較的市場の混乱は避けられたのですが……」
パンの質は下がったが、人々が食べる分は確保できた。ただ、しわ寄せがないわけではない。
「代わりに、雑穀を使っていた安いパンが作れなくなったというわけですね」
「ええ。作れないわけではないんですけど、作ると赤字になるんです」
パンといった生活必需品の著（いちじる）しい値上げは禁止されているし、基本の価格が決まっている。不作で仕方ない場合は多少値上げをし、混ぜ物などで質を落とすことで調整する。
もちろん、平時に混ぜ物が多い質の低いパンを出すことで利益を得ようとする店もあるが、国はパンの質が低下しないよう監査を入れる。
パン屋は値上げと材料費、その工夫の中でなんとか利益を出す。
ただ、利益率が低い商品になるとそうはいかない。作らないほうがマシというものも出る。
「ということで、先月から安価な木皿に替えてみたところ、こういうありさまです」
「なるほど」
木皿だと、ただゴミになるだけだ。薪としての用途はあるかもしれないが、家畜の餌として使っていたパンより高く引き取られることはないだろう。
エラルドは広場をぐるりと見渡した。
「……」
「どうされましたか？」

エラルドの視線が止まったので、クロエもエラルドが見ているほうを見る。
その視線の先には、子どもがいた。十歳くらいの男女で、お世辞にも綺麗な恰好はしていない。
「またあいつらか」
商人が嫌な顔をした。
「あいつら？」
「ええ、下町に住み着いている子どもで、拾い物を売ることで生計を立てているんです」
「孤児ですか？」
「そうだと思います。子どもたちで集団生活をしているようで、前はパン皿を拾いに来ていたんですよ」
家畜の餌にされるようなパンを狙っているとなると、かなり貧しいことがうかがえる。
「保護はしないのですか？」
エラルドが至極まともなことを聞く。このバザーの主催は教会だ。
「あの子どもたちの半分は、養護院にいたんですよ。ですが、どうにもなじめないというか、大人に不信感があって逃げ出した子どもも多いのです。だから、下手に捕まえようとすると逆効果なんですよ」
商人の目には『面倒くさい』があふれていた。
クロエも商人の気持ちがわかる。大人に反感を持つ子どもは扱いづらいし、可愛くない。面倒ばかりかけて素直じゃない。手負いの獣を捕まえ、手当てをするようなものだ。
でも、同時に保護が一番必要な存在なのだ。
クロエもまた同じだったからわかる。
「炊き出しの時はちゃっかり並んでるんですけど」
呆れ顔の商人だ。
「まあ、貰える物は貰いますから」
腹が空いているときに、恥も外聞もない。
「では、子どもたちの食糧問題も出てきますね」
捨てられたパンを集めれば、数日は食べていけるはずだ。
（悩ましい問題だよね）
助けたいのに助けられない。
どうすべきか考えていると、商人の近くに若い男がやってきた。
「旦那さま」
若い男は何やら面（めん）目（ぼく）無（な）さそうな顔をして、商人に耳打ちする。商人の顔が明らかに歪む。
「どうされました？」
クロエの問いに、商人は苦笑いをする。
「いえ。木皿の発注を間違えたようです。どうにも、もう在庫が尽き

てしまうようでして」
「では、午前中で売り切れですか？」
せっかくの書き入れ時なのにもったいない。
「それが、食材は余っていて、今日使いきらなければ悪くなるものが多いのです。売り切れにすると、食材の廃棄問題が出てきますね」
肌が汗ばむ季節だ。生ものはすぐ傷んでしまう。
「どうしましょうか？ 代わりに皿になるものを出しますか？」
「あるのか？」
「それが……」
若い男が、木製の皿を出す。使い捨ての木皿とは違い、洗って何度も使えるものだ。
「一番安い皿がこれだと言われました」
「これを使い捨てにするのか？」
それはちゃんと皿の形をして研磨がかけられており、一度で捨てるのはもったいない。
「一枚いくらだ？」
「一枚あたり銅貨一枚。百枚ごとに一割おまけすると言っています。数はかなりあるようで、今日のバザー分は問題ないと思います」
使い捨てにするにはもったいないが、食品の原価に皿代を追加すれば赤字になるだろう。
食材を捨てるか、皿代を払うか。悩みどころだ。
「……お皿を返却してもらうのは駄目でしょうか？」
クロエは素人（しろうと）なりの考えで言ってみた。
「うーん。食べ歩きが主流なので、わざわざ返す客はそう多くないかと。半分でも戻ってくれば御（おん）の字でしょうか」
「ですよね」
クロエがため息をついたところ、ポンと肩に手が乗った。
「クロエ嬢。そのアイディア、いけるかもしれません」
エラルドが目を輝かせる。
「どういうことでしょうか？」
商人と若い男は、半信半疑でエラルドを見る。
「デポジット、保証金と言ったらわかりますか？」
クロエには馴（な）染（じ）みのない言葉だが、商人の目が輝く。
「エラルドさま、詳しく説明をしていただけますか？」
商人にはわかっても、クロエにはわからない。
「すみません、何でしょうか、それ？」
クロエは恥じらいつつもエラルドに質問する。
「宿泊施設などに泊まる際、客から事前に保証金を貰うことがあります。そして、保証金は宿泊後の支払いの際に相殺、または返却されます」

エラルドはゆっくりと話す。
「例えば、商品がガレットだとしましょう。ガレット代が銅貨三枚として、皿の保証金が銅貨一枚。合計で銅貨四枚を支払っていただきます。ですが、食べ終わったあとに使い終わった皿を持ってきていただけたら、銅貨一枚を返却するんです」
「はー、なるほど」
クロエは感心する。
「急にやるには、いろいろ制度的に穴もありますが、今のまま大赤字よりマシじゃないですか？」
「……はい！ それならいけそうです」
落ち込んでいた商人の顔が明るくなる。若い男もほっとした顔をした。
確かに、それなら皿の回収率は上がるし、店側も前もって金を貰っているので損はない。客は、返却が面倒ならそのまま捨てればいいだけだ。
「一時的に値上がりしたように見えるのがネックですが、仕方ありません」
クロエは顎に手を当ててうなる。
「どうしましたか？ クロエ嬢」
「これ、返さずに捨てた皿を集めて持ってきてもお金は支払われますか？」
クロエの質問に、商人と若い男は顔を見合わせる。
「どういう意味ですか？」
「いえ。さっきの子どもたちが捨てられた皿を持ってきたとき、お金にしてくれるのかと思っただけです」
皿一枚で銅貨一枚。十枚で銅貨十枚。子どもにとって、貴重な収入源になる。
「んー、そのことにつきましては……」
「もちろん、できますよね」
間（かん）髪（はつ）容（い）れずにエラルドが言った。
「店側はすでに保証金として銅貨一枚いただいています。そして、支払った人物がもういらないと皿を捨てるようでしたら、集めてきた者に感謝すべきですよね？」
「え、ええ……」
商人がたじたじとなりつつ、肯定とも否定ともつかぬ声を出す。
しかしエラルドはにっこりと笑い、商人モードに入った。
「おお、素晴らしい。そうですよね。孤児たちの支援は、ただバザーで売上金の一部を上納するだけじゃないですものね」
エラルドの物腰口調は柔らかいが、有（う）無（む）を言わさぬものだった。

ペラペラとしゃべる豪商の息子に、商人はただ頷くしかできない。
「では、よろしくお願いします。戻ってきた皿は洗えば何度でも使えますから、来月も同じようにできますね」
「は、はい」
商人たちは力なく返事をする。

商人たちが皿の手配に行ったあと、エラルドはクロエを見てニコニコ笑う。
「なんですか？」
「いえ。私の偽善の皮は剥がれていませんか？」
クロエはエラルドの問いに、思わず吹き出してしまった。
「何がおかしいのですか？」
「いえ。エラルド卿は、もれなく面（つら）の皮も厚いと思いまして」
「……生まれて初めて受ける侮（ぶ）辱（じょく）ですね」
「誉め言葉です」
クロエは笑いながら、結局仕事が貰えなかったと、また焼き栗屋を目指した。

III
「面白いことをやっているようね？」
ヴィオレットがクロエのもとに来たのは、バザーがもう終わりに近づいた時間だった。夕方になっても髪の毛の巻きの強さは健在で、顔が揺れるごとにバネのように跳ねている。
クロエは木皿を受け取り、銅貨を返す仕事をしていた。今度は汚れないように前掛けをしている。集めた皿は洗い物に回され、また屋台で使われる予定だ。
「新しい試みです。これはエラルド卿の考案です」
なにせクロエは保証金を取るような宿に泊まったことがないので、思いつかなくても仕方ない。
「あら？ エラルド卿はクロエさんの一言がヒントになったと言っていたけれど」
扇で顔を隠し笑うヴィオレット。
（これは褒められている……ということにしておこう）
上から目線の扱いだろうがなんだろうが関係ない。ただ笑ってやり過ごす。
クロエの仕事は神子になることではなく、チーロ殺害犯を見つけることだ。
「ところでクロエさん。この後、お時間あるかしら？」
「時間ですか？」

あるかないかと言えば、ただ大教会の宿舎に戻るつもりでいた。明日は無働日なので、ゆっくり休みたかったのだが。
傍にいるエラルドからは、何も反応がない。
（特に問題ないのか）
ならば、断る理由はない。同時に、要件を言わずに暇かどうか確認するときは何かあるのだろうとクロエは勘繰った。
「何もなかったと思います」
「そう、ではよかった。一緒にお食事をしない？」
妖艶に笑うヴィオレット。
「喜んで」
（彼女もまた容疑者の一人だし）
ヴィオレットの調査をするのに、その誘いはクロエにとっても都合が良かった。

七章 ―― 舞踏会

I

お食事と聞いて、クロエは何を思い浮かべたか。
素敵なレストラン、白いテーブルクロスにワイングラス、食べたことがないような柔らかいお肉が出てくると想像していた。
多少、息苦しくてもなんとかなると楽観的に考えていた。
クロエの予想は、半分は当たっていた。
問題はそのお食事が立食式で、その他大勢の参加者がいたことだ。
（舞踏会とは聞いてないぞ！）
主催者は、ヴィオレットの実家。侯爵家がやっているともなれば、それは豪勢なものになる。
（一般庶民にはきつい！）
ビルツ伯爵家では、色々豪華なものに慣れるようイネスにしごかれたが、舞踏会の経験はなかった。あくまで習ったのはそういったものを想定したマナーであって、実際に目の前で入場のたびにファンファーレを流されると畏（い）縮（しゅく）してしまう。
ふかふかの絨毯を踏み、クロエは前に出る。エスコート役にエラルドがいるが、クロエの衣装は白いローブ。汗をかいたので、着替えて髪をセットしなおしてもらったくらいだ。
確かにローブはしっかりした作りだが、明らかに浮いている。
きらきら輝くシャンデリア、足が沈みそうなほど柔らかい絨毯、色とりどりの花、宝石のような流行最先端のドレスに、場を盛り上げる音楽。
「聞いてないんですけど」
「僕だって聞いてませんよ」
エラルドも笑いつつ、困った声をしている。
「おかげで、イネスが入り込むのに時間がかかりそうです」
「私の付き人ということで入れないんでしょうか？」
「ちょっと難しいですね。基本、舞踏会は男女一組で入るものなので」
なにか引っかかる言い方だ。
（たまに言葉を濁すよなあ）
クロエは追及したいところだが、仕事に関係ないと言われたらそれまでなので黙っておく。
「ともかく、僕から離れないようにしてください」
「はい」
さっきから、好奇心と食材を値踏みするような視線がクロエに突き刺さっている。
「さすが侯爵家ですね。急きょ参加客を呼んだっていうのに、これだ

けの人数を集めるなんて」
「急きょって？」
クロエは周りを見る。
皆とても着飾り方がすごいのに、これが急ごしらえだと言うのだろうか。
「あのドレスは、昨年流（は）行（や）ったラインです。向こうの貴婦人のジュエリーは見たことがあります。何より、衣装にはっきりとしたテーマが見えてこない」
「テーマに沿って服装を決めなくてはいけませんでしたね」
イネスから教わってはいたものの、そのテーマが見えるほどクロエは舞踏会に精通していない。
「この規模の舞踏会でしたら、あと二割ほど客が多いのが普通ですし、遠方の貴族の名前が今のところ呼ばれていません」
（おおう）
クロエとて主要貴族の名前は暗記させられたが、エラルドは地理も合わせて覚えている。伊（だ）達（て）に生まれつき貴族ではない。
どうやら名前を呼ばれるのは一定階級以上の貴族のみで、クロエの名が呼ばれたのは主催者の娘と同じ神子候補だからだろう。
「おそらく、神子選抜試験のためにやったものですね」
クロエは苦笑いを浮かべつつ、ウエルカムドリンクをいただく。もちろん、アルコールが入っていないものを選ぶ。
「本当、神子って聖職者というより貴族ですよね」
「ええ。実際、神子を引退してから貴族、王族になられる方も多いです」
つまり貴族、王族と婚姻関係を結ぶということか。
「神子が平民でも問題ないんですか？」
「王族に神子の血を入れることは珍しくありません。女王制ではありますが、王族の男子でも妃が神子であれば、その娘を女王にすることができます。元々、初代女王も『魔女』ですからね。だから神子候補も人気があるんですよ」
貴族としては、外交経験がある祝福（ギフト）を持つ女性を身内にすれば心強い。神子は無理でも、神子候補なら唾を付けておくのも悪くないと思う人たちも多いらしい。
「というわけで、クロエ嬢も気を付けてくださいね」
「……なんか見られているのはそういうわけですね」
いくら流行遅れのドレスが多いと言っても、白いローブを着て社交界に出るような人はいない。
（いや、いた！）
クロエは目を輝かせる。
おじさん騎士に守られるように食事をとっているのは、モニクだっ

た。クロエと同じく、普段と変わらないローブを着ている。
クロエは自然とモニクのほうへと向かう。
「モニクさま」
「あっ、クロエさま」
モニクの頬に食べかすがついていたので、クロエはそっとハンカチで拭ってやる。エラルドとモニクの護衛騎士は、二人の神子候補がそろったことで少し離れる。
「クロエさまも招待されたんですね」
「はい。モニクさまがいると言うことは、他のお二人もいらっしゃるのですか？」
（さすがに私だけ呼ばないよなー）
特に、同じくバザーに出ていたゾエを呼ばないということはないだろう。
「サロメさまは欠席です。体調が悪いということで」
「そうなんですか」
（察し）
誘ったヴィオレットの面目を潰すことになるが、サロメとしては断る理由しかない。エラルドがサロメの呪いを解いてしまえば、ヴィオレットのやっかみも減るはずだ。
ただでさえサロメは社交界一の美女なのに、白いローブを着てこの場に現れたらどうなるかたまったものではない。
「ゾエさまがまだ来ていないようですけど、クロエさまは知りませんか？」
「私と同じ時間にバザー会場から出たと思うんですけど」
ゾエも欠席かなと思っていると、ファンファーレが鳴った。
入口から白いドレスの女性が見える。いや、ドレスに見えるがギリギリローブだ。
その女性は、ローブを改造しまくった服を着ているゾエだった。
丈は普段のローブと変わらないが、ドレープで立体的に仕立てている。アシンメトリーなのは、最近の流行を追った形だ。
ゾエはドレスのような装いに合わせて、髪型も変えていた。神子候補のアクセサリーは派手な貴金属類が許されていないので、緑のレース糸で編んだ蔦のようなリボンを髪に垂らしている。
なお、クロエの左手のバングルはシンプルなデザインなので、ギリギリ問題ないらしい。
神子候補としてドレスコードに反しないようにしながら、舞踏会のドレスとも引けを取らないデザインを身に纏（まと）ったゾエは、クロエたちと同じく、いやそれ以上に注目を浴びる。
ゾエはクロエたちの存在に気付くと、優雅に近づいてくる。
「遅くなりました。聞いてください、うちの護衛騎士だとエスコート

役に不適格だって言うんですよ！ こんなにかっこいいのに！」
ゾエはクロエたちに凛とした恰好の女性騎士を見せる。女性騎士は恥じらう様子でもなく、にっこりと笑う。確かに下手な貴族男性よりかっこいい。パーティは男女一組で参加なのに、受付は困っただろう。
「きれいです、ゾエさまー。騎士さまもかっこいい」
モニクは目をきらきらさせる。
「クロエさまもそう思いますよね？」
モニクが同意を求めるので、クロエは素直に肯定する。
「はい。同じ素材を使っているとは思えないです。見事に規則の穴をついたお洒落です。何よりエスコート役とも合わせてきていますね」
ヴィオレットの改造とは違い、モニクの改造はあくまで神子としての品位を落とさぬよう敬意が感じられる。
「ふふふ、クロエさま。褒めてます、それ？」
ゾエは笑いつつ、クロエとモニクをじっと見る。
「お二人は急な舞踏会のお誘いで、衣装の準備は全くできませんでしたよね？」
「はい、このとおり」
クロエは返事をし、モニクはくるりと回って見せる。
「今日は聖騎士団の訓練見学と馬術指導だったので、おふろに入って着がえるのでせいいっぱいでした」
（騎士団見学とかあるんだ？）
クロエは、ふとサロメの思い人のことを思い出した。盲目の聖騎士というからには、聞けばすぐわかりそうだ。
同時に、まだ聖騎士団にチーロを殺害した犯人がいる可能性がある。
「お二方、お時間ありますか？」
「お時間って？ どうしたんです。今からパーティですけど？」
クロエの質問に、ゾエは胸を張る。
「私、実は二人のために衣装を作っているんです。是非着ていただきたいんです！」
ゾエの目は輝いていた。その目には一点の曇りもなく、ただ純粋にクロエとモニクの衣装を着せ替えたいと思っているようだ。
「三十分、いえ十五分。主催者挨拶が終わる前に終わらせますから！」
クロエはチラッとエラルドを見ると、お好きにどうぞ、という顔をしていた。
「わ、わかりましたから、少し離れて」
「はい！」
ゾエはとてもいい笑顔をしている。おかげで、近づこうにも近づけない周りの貴族たちがほわっと間抜けな顔をしている。

もちろん、鼻の下を伸ばしたまま近づこうものなら、ゾエの護衛騎士が目を光らせて追い返していた。

II

世の中には、サービス業向きの性格がある。ゾエという少女はまさにそれだった。
「あー、これならもっと違うラインも用意しておくべきだった。ショルダーラインがもっとすっきりしたもののほうが、クロエさまには合っているわ。モニクさまは二年前よりだいぶ大きくなりましたね。また測定させてください。目算で作りましたが、微妙に長さが違うわ。ああ、細かい調整がしたいけど今日は我慢。リボンは好きな色を選んでください。素材はシルクです。モニクさまにおすすめなのは若葉色。クロエさまにはカーキがお似合いだと思います。実はこのリボンに実を散らしたいと思っているんですけど、どう思います？ 宝石は駄目ですけど、赤みの強い琥（こ）珀（はく）ならいいのではと思いません？」
「さすがに実をつけるのは私には分不相応かと」
クロエは首を横に振る。
アルブ教において、蔦の成長過程はそのまま神官の位を示す。実をつけるということは、神官見習いには過ぎたる装飾だ。
「聖女になれば問題ありませんよ」
ゾエはクロエの手を掴んで、爪を染める。速乾性の塗料で、つやつやと美しい爪ができている。
後ろでは、ゾエの侍女がクロエのくせっ毛を見事に編み上げていく。モニクの髪は先にアレンジを終えていて、モニクは暇そうに椅子に座って足をぶらぶらさせていた。
「前も、何度もゾエさまがお洋服を採寸してくれたんです。皆を着飾らせたいからって」
「ヴィオレットさまも誘ったんですか？」
「もちろん！ 断られましたけどね。サロメさまは一度だけ採寸させてくれました。ええ。たった一度だけ」
「皆、誘ってたんですね」
チーロのことを聞きたいが、どうだろうか。
「あの……、もう一人候補がいたと聞いたんですけど」
「あっ、チーロさまですね」
ゾエが視線を逸らす。やはりあまり触れたくない話題らしい。
「チーロさまは意外に頑固で、全然来てくれなかったってよくぼやいてましたね。何度も誘ってましたよね」
「はい。でもいいんです。今は二人がモデルをやってくれているので。お二人が聖女になった暁には、付き人として雇用を考えてくださ

いね」
そう言ったゾエの声に嘘はない。本心からそんなことを思っている。
「ゾエさまは神子ではなくて、付き人になりたいんですか？」
クロエの質問に、一瞬ゾエの表情が曇った。
（私、何か変なこと言った？）
「ええ。聖女にはなりたくないんです」
ゾエは消え入りそうな声で言った。だが、そんな声色は一瞬ですぐさま明るい声に変わった。
「さて。お二人ともできたので、どうぞご確認を！」
ゾエが侍女に頼み、大きな姿見を持ってきてもらう。
ゾエは、見事にクロエを変身させてくれた。化粧はほぼ変わらないが、服と髪を上げるだけでだいぶイメージが変わってくる。
「すごーい」
モニクは楽しそうにくるくる回る。
クロエも彼女の気持ちはわかる。ただでさえ美少女、野に咲く花のような可（か）憐（れん）なモニクだが、今の装いは洗練された温室の花を思わせた。
クロエですら、普段の三割増しに仕上がっている。素通りされる一般人から、たまに振り向かれる程度の美人に変身しているのではなかろうか。
「さあさあ、お色直しも済んだところで早く行きましょう」

舞踏会会場に戻ると、ちょうど主催者挨拶が始まっていた。
壇上にいるのは、すらりとした中年男性、その隣には美しい女性。周りには中年男性によく似た美形の青年が二人と、白いローブを着た女性、ヴィオレット。
クロエは、侯爵家についての報告書を思い出す。家族構成は当主であるヴィオレットの父、母、二人の兄、そして末娘のヴィオレットだ。
ヴィオレットはいつにも増して、改造を繰り返したローブだ。色も相まって、ウェディングドレスを思わせる。
「ご両親はどう思っているのかしら？ 素材がもったいない」
ゾエは深くため息をついた。ヴィオレットのファッションセンスには物申したいらしい。
しかし、ヴィオレットに対して一言あるのはゾエだけじゃないらしい。
『あれね。侯爵家の末娘』
『ええ。美人だけどセンスがひどいとは噂に聞いていたけど、あれじゃあねえ。神子としての品位を感じないわ』
クロエの耳はいい。さらにエラルドに借りた魔道具のバングルによって、五感が少しだけ強化されている。

扇で口元を隠しつつ、ひそひそ話をするご令嬢たち。
（この場に来られたのは、ちょうどよかったのかもしれない）
クロエが知る神子候補たちの情報は、報告書の紙面のみだ。こうして噂を直接聞けるのはありがたい。
『ねえ、あれが追加された神子候補よ？』
『へえ。普通ね』
『私も立候補すればよかったかな。神子選抜試験』
別に聞かなくてもいい声まで聞こえるのは仕方ない。
主催者挨拶が終わり盛大な音楽が流れると、ホールにはくるくると円を描いてダンスをする男女が現れ、機械人形のように揃って舞う。
（確か舞踏会の基本の流れは、オープニングのダンスのあと、食事や談笑。そして、フリーのダンスタイムか）
クロエの傍にいたゾエとモニクは、いつの間にかどこかの貴族に話しかけられていた。どちらに話しかけているのも男性貴族で、ダンスのお誘いをしているようだ。
（ダ、ダンス……）
クロエはダンスレッスンでもイネスにしごかれたが、一朝一夕で上手くなるわけがない。相手の足の無事を考えると、ダンスなどしたくない。
しかし、ちょうど余っていると言わんばかりに笑みを浮かべてクロエに近づいて来る男性が数人。
（エラルド卿は止めないの？）
護衛騎士を探すと、エラルドはエラルドで貴族令嬢に囲まれていた。
（役立たず！）
クロエは心の中で悪態をつく。
とうとう、誰かがクロエの前に立った。
「クロエさま」
やってきたのは、貴族男性ではなく長身の女性だった。ふわりと花の香りがする。
「は、はい」
泣きぼくろが特徴的な、ものすごい美女だ。凛としたたたずまいで、美しいラインのマーメイドドレスを着ている。ふんわりとスカートをパニエで膨らませたドレスが多い中で、流れるようなラインが目立っていた。
「お話がしたいのですが、よろしいですか？」
返事をどうすべきか迷っていると、美女は近づいてクロエの耳元に口を寄せた。
「まだわかりませんか？ 私です、クロエさま」
低く落ち着いた声だった。ここ数か月、何度も聞いた声。
（イ、イネスさん？）

クロエは驚きをなんとか顔に出さぬように心がける。確かあとから来ると言っていたが、まさかこんな恰好で来るとは思わなかった。
（高位貴族の侍女は、下位貴族がなることが多いって聞くけど……）
普段の切りそろえられたボブの金髪は、烏（からす）の濡れ羽色の柔らかいウエーブに。切れ長の涼しい目は黒目がちになり、ゴージャスなまつ毛に縁どられていた。薄い唇も、たっぷりと桜桃のようなふっくらしたものに変わっている。まるで別人だ。
「ここでは、アイズ嬢とお呼びいただけると幸いです」
イネス、いやアイズは普段は見せないような極上の笑みを浮かべる。クロエを小ばかにする嫌味な笑いでも、聖獣を見る緩み切った気持ち悪い笑みでもない。
「クロエさま。アイズ嬢とお知り合いでしたの？」
ゾエが貴族男性のお誘いを断り、目を輝かせてクロエの元に駆けてきた。振られた貴族男性は、恨めしそうにクロエたちのほうを見ている。
「えっ、ええ……」
一応、肯定の意を示すクロエ。ゾエは意外だという顔をしている。
「アイズ嬢は一年前の電撃デビューで社交界をにぎわせ、今やファッションリーダーなんですよ！ まさか、クロエさまがお知り合いだったなんて！ 教えてくださればよかったのに！」
ゾエは純粋にアイズのファンのようだ。確かにクロエも中身がイネスだと知らなければ、純粋に憧れの目を向けていただろう。
「是非、次のトレンドはどうなるか教えていただきたいわ」
クロエを押しのけるようにゾエが前に出る。
サロメが完全に異性を釘付けにする傾国の美女であれば、アイズというキャラは女性が理想とする女性を体現した美女だ。美しいが媚びることなく、凛としてかっこいい。
『アイズさまだわ。どうしよう、今日も素敵』
『本当。絵になるわー』
感嘆の声が聞こえるが、どれも女性からだ。クロエよりもアイズ嬢の噂のほうが耳に入ってくる。
（いっそイネスさんが神子を目指せばよかったんじゃない？）
クロエはそう思いつつ、笑みを絶やさない。アイズとゾエの三人で話をするふりをしながら、クロエは四方の声を聞き逃すまいとする。
『誰だよ、ゾエ嬢なら簡単に落とせるって言ったのは？』
ゾエを狙っていたどこかの子息だろうか。
『気さくに挨拶してくれるって話だったぞ。ガード固いじゃないか』
いやいや、どこでそんな話を聞いてきたのだろうか。ゾエはどちらかと言うと、男性を得意としていないタイプに見える。
『モニク嬢が最有力候補らしいけど、まだまだ子どもだな』

品定めしている声ばかりだ。クロエはイライラしつつも、情報収集を怠らない。
『アイズ嬢もいいが、サロメ嬢は来ないのか？ 彼女も聖女候補だろ？』
やはりサロメは有名人だ。どうしても噂に出てくる。
『欠席らしい。まあ、妥当だろうな』
『そうだな。あいつが聞きつけてくるからな』
（あいつ？）
一体誰だろう。サロメに執着している殿方ならいくらでもいそうだが、こうして話題になるだけあって、余程ひどい奴なのだろうか。
『いくら伯爵家の令息でも、やっていいことと悪いことがあるよな』
（伯爵家の令息？）
ビルツ伯爵家のことではないだろう。ミュトス王国の世襲貴族の数は三百ほど。その内、五十ほどが伯爵位についているはずだ。
（早く名前を言え）
クロエがイライラしていると、目の前にエラルドの顔があった。
「おっ」
「クロエ嬢。フリーのダンスが始まりました。一緒に踊っていただけますか？」
そっと手を差し伸べるエラルド。
「ク、クロエさま。踊っちゃうんですか～？」
ゾエがなんだか悔しそうに言った。恨めしいを通り越して、睨みつけるいきおいでエラルドを見ている。
「あら？ なら私と踊ります？」
アイズがそう言うと、ゾエは顔を真っ赤にする。
「い、いいんですか!?」
「はい。よろしければ」
膝を付き、騎士のようにふるまうアイズは、妙にはまっていた。洗練された騎士の所作となんら変わりない。
クロエはクロエで、エラルドに手を取られ妙な気分になる。
「ええっと、別に私、踊りたくなんてないんですけど」
「きっと一回は踊れって言われますよ。そういう社交の場ですから」
「でも、お約束のようにエラルド卿の足を踏みますけど」
「いいんですよ。騎士として、足の甲くらい鍛えています」
そこは鍛えられる部分なのだろうか。
「それより、神子候補に変な虫がついては困りますから」
「わかりました」
クロエは諦めつつ、エラルドと共にホールの中心に向かう。
ゾエもアイズに手を取られ、満更でもなさそうだ。しかし、こういった場で女性同士で踊るのはありなのだろうか。

（エスコート役を女性にやらせるくらいだもんな）
ゾエにとって、それくらいなんてことはないのだろう。
（適当に踊ったら、料理を食べつつ聞き耳に専念しよう）
明るい曲と共に、クロエとエラルドはホールの真ん中に出る。
軽やかにクロエをリードするエラルド。クロエがエラルドの足を踏みそうになると、タイミングよく手を引っ張って避けさせてくれる。足を踏まずに踊れるだけで、ずいぶん自分のステップが上達したと錯覚するものだ。
くるくる回りローブのドレープが舞う。リードが上手いと、クロエまで上手くなったように感じるから困る。
「さっき何か聞いていたようですけど、どうしたんです？」
ダンスで密着し、音楽で周りには話し声が聞こえない。エラルドはそのためにダンスに誘ったのだろう。
クロエはなんとも言えない気分になりつつ、口を開く。
「サロメさまを狙っている貴族がいるって話が聞こえたんです。相手は伯爵家の令息って話までしか聞けませんでしたけど」
クロエは唇を読まれないように、最小限の口の動きで話す。
「伯爵令息でサロメ嬢を狙っている？ それはどっちの意味で？」
愛情なのか殺意なのか、どちらかと聞いているようだ。
「……んー。どっちともわかりませんけど。元々、サロメさまを狙う男性ってがっついてますよね？ その男性が引くってことは、かなりひどい態度だったのかなと。前にも言っていましたけど」
「過去、サロメ嬢関連で騒ぎを起こした伯爵令息は七人いますね」
「七人って、よく覚えてますね？」
「サロメ嬢に殺意を持つ人物がいないか改めて調べ直しましたから」
犯人はチーロではなくサロメを殺害しようとしたのであれば、外部犯でも説明がつく。
「その中でも、傷害事件にまでなったのは三人。一人は……あー、関係ないですね。三年前にへき地に飛ばされています」
クロエたちは踊りながら話を続ける。何度も足を踏みそうになったが、エラルドは見事に避けてくれた。剣術はそこそこでも、ダンスはかなりの上級者だ。
「二年前、サロメ嬢が狙われたが誤ってチーロが殺害されたと仮定します。その場合、伯爵令息のどちらかが犯人と言いたいのですね？」
「はい。もちろん、その伯爵令息とは言い切れませんが。でも、エラルド卿はとうに調べ終わっているみたいですね」
しかし、クロエには報告がなかった。
「エラルド卿は確信がないようですね？」
「ええ。疑わしきは罰せずなので。生憎、容疑者として名前があがっても、確実にやった証拠が残っていません。実は調べ直してわかった

ことなんですが、不思議なことに、チーロ殺害推定時刻に城壁付近で訓練をしていた聖騎士が一人もいなかったのです」
「えっ？ それって、偶然なんですか？」
「偶然と言わなければならないですね。一人二人ならともかく、十数名はいるはずの聖騎士たち全員が示し合わせるとは思えません」
クロエはエラルドの爪（つま）先（さき）を踏みそうになり、エラルドが間一髪でよける。
「何より、教会の内部情報を知った人間がいないと成立しない話です。誰が内部犯か暴かないといけません」
「サロメさまが消えて喜ぶ犯人……」
クロエは、真っ先にヴィオレットを思い出す。クロエの思考を読んだのか、エラルドが軽く笑みを浮かべる。
「残念ながら、ヴィオレット嬢と伯爵令息たちとの接点はありません。少なくとも、今調べた時点では」
「そうですか」
エラルドにリードされて、クロエはくるりと回る。ゾエに着せてもらったドレスが計算されたかのように綺麗に翻（ひるがえ）った。
ラストのターンが決まったところでダンスが終わる。
視界の端にゾエが見えたが、彼女はアイズと踊ったあとは誰とも踊る気がないらしい。ドリンクを持って壁の花になろうとしている。
（他の誰かとは踊らないのかな？）
近づこうとする殿方は、護衛の女性騎士が止めている。変な虫がつかないように徹底していた。
クロエは一休みするために壁側に移動し、ノンアルコールドリンクをいただいた。ダンスは一回踊ると休憩を挟ませてくれるらしい。
だが、クロエの周りに数人の殿方が近づいてきた。
「是非、次は私と踊っていただけませんか？」
次々と、どこどこ地方のなんたら伯爵子爵の次男や三男が近づいてくる。
にこやかな笑顔だが、クロエは知っている。「あの地味な候補もキープしておこうか」などという不届きな声は、しっかり耳に届いていた。
こういう人たちを防ぐのがエラルドの仕事だと思うが、当のエラルドといえば──。
「次は私と踊ってください！」
「いえ、ぜひ私と！」
きらびやかな女性たちにからまれていた。本人は成金貴族と言うが、一応名家の出身だ。しかも、華やかな容姿も伴っていて、パーティ会場で声をかけられないわけがない。あと一番推せる点といえば、この国で五本の指に入る金持ちなのだ。

（女性からダンスを誘うマナーってあるんじゃなかったっけ？）
イネス曰く「目配せして相手から誘ってもらうよう促しましょう」なのに、ずいぶん直接的だ。
エラルドはにこやかに笑う。
「申し訳ありません。ただいま護衛中ですので」
エラルドは礼を忘れず笑みを絶やさず、クロエの元にやってくる。残念そうな貴族令嬢に恨みを買う気がしつつも、彼が帰ってきて安心するクロエ。
エラルドは、クロエの周りにいる殿方たちにも笑みを浮かべる。
「神子候補はお疲れのようです。申し訳ありません、僕が先に踊ってしまったもので」
成金とはいえ宮中伯の息子に文句を言うわけにもいかない子息たちは、すごすごと帰っていく。妬ましそうにこちらを見ているが、エラルドに文句を言える地位と度胸はないらしい。
「ええっと、今から侯爵以上の方々に挨拶しに行きます。そろそろ空いてきたところでしょうから。クロエ嬢、名簿に載っていた内容は覚えていますか？」
「名前と簡単なプロフィールなら」
「結構です。では、行きましょう」
クロエはエラルドと共に、目上の人に挨拶に行く。まずは、主催者である侯爵の元へ向かう。
侯爵の前には何人も人が集まっていて、クロエはいつ挨拶すればいいのか悩む。だが、侯爵のほうがクロエの存在に気が付いたらしく、侯爵から近づいてきた。
（こういう場合、どうするんだったか？）
クロエはちらっとエラルドを見る。エラルドは頭を下げつつ、侯爵が来るのを待っている。クロエも真似をする。
「ようこそお越しくださいました、神子候補クロエさま。私はロバン家の当主……いや、名前よりもヴィオレットの父と言えばわかりやすいでしょうか？」
侯爵は丁寧に頭を下げる。
（き、気さくだー）
娘からは想像できない父親だった。末娘だと甘やかしたのだろうか。
「初めまして。クロエと申します。お招きいただきありがとうございます」
クロエも舌を噛まないように、精一杯挨拶する。斜め後ろで変装したイネスことアイズが、クロエのお辞儀の角度を確認していた。
由緒ある侯爵家、しかもヴィオレットの家族とくれば、もっとがちがちの貴族かと思っていた。なのに、神子候補とはいえ平民のクロエにも丁寧に接してくれる。

（そういえば、当主のロバン侯爵は人格者とか報告書に書いてあったなあ）
ロバン侯爵の奥方も丁寧に挨拶してくれた。凛としているが、高慢な雰囲気はない。
（どこでどう教育を間違えたのだろうか？）
侯爵夫妻は忙しそうなので、クロエたちは挨拶だけで下がる。
クロエはエラルドに促されるまま、お偉いさんの貴族たちに挨拶をしていく。
一番緊張するロバン侯爵のところが終わったのでいくらかマシだが、それでも気疲れする。
（我慢我慢）
どうせ神子選抜試験が終われば会うこともないのだが、あくまで今の段階では神子候補として最大限の努力を見せなければならない。
クロエは顔が引きつらないよう笑みを浮かべ続け、疲弊していった。
そんな中、これまた疲弊しそうな相手がクロエたちに近づいてくる。
「楽しんでいるかしら？ エラルド卿にクロエさん」
真っ白かつ派手なドレスを着た巻き髪の美女、ヴィオレットだ。護衛であるエラルドの名前を先に出すあたり、クロエは平民扱いなのだなと思う。さっきの親御さんとは大違いだ。
今日は、護衛騎士を一人だけ後ろに連れている。三人いる護衛の中で一番の男前をエスコート役に選んだようだ。
エラルドは一歩後ろに下がり、クロエを立てる。あくまで自分は裏方なので話すのはクロエだと言いたいらしい。
「ヴィオレットさま。本日はお招きいただきありがとうございます」
クロエはイネスの詰め込み教育を思い出しながら、貴族令嬢のような挨拶をする。
「いえ、クロエさんには一度くらいこんなパーティに参加してもらえたらなと思った次第です」
（つまり『今後参加できねえだろ、こんなパーティ』という意味か）
ずいぶん直接的な言い回しだ。クロエの存在は、さほど重要ではないと言いたいのか。ヴィオレットは目を細めて口を扇で隠しているので、クロエにも表情が読みにくい。
（深い裏はないと信じたい）
「サロメさんが来られなかったのは残念ですが、仕方ありません。彼女がパーティに来ると、どうしても騒ぎが起こりますからね」
やはりわかっていて招待したのか、とクロエは呆れそうになった。媚びるべきか媚びないべきか考えて、クロエはぴしっと背筋を正す。
「きっとサロメさまがいらっしゃっても、侯爵家の警備ならちゃんとならず者を追い出していただけるのですよね？」
つまり、サロメが来ても大丈夫だと太鼓判を押すのが主催者の義務だ

という嫌味だ。嫌味だが、どうとでも捉（とら）えられる。
「ええ。もちろん、サロメさんと過去に問題を起こした人たちには、招待状を送っていません。招待状なしに部外者を屋敷に入れるような真似はしませんわ」
「さすがですね、ヴィオレットさま」
クロエは口元を隠しつつ、ヴィオレットを立てる。ヴィオレットはともかく、侯爵家の警備は信用したい。
「以前のように、神子候補に何かあってはいけませんもの」
妙にしおらしい言い方に聞こえた。
（ここで、チーロさまの話を出していいだろうか？）
クロエは躊躇（ためら）いつつ、口に出す。
「二年前にいた神子候補について、お話を聞かせてもらえませんか？」
「私でなくとも、エラルド卿のほうが詳しいのではなくて？」
ヴィオレットは扇で口元を隠しつつ、エラルドに視線を送る。
「僕は神子選抜試験を受けていたチーロの姿を知りません。是非、ヴィオレット嬢に二年前のチーロの話を聞かせていただきたいです」
エラルドが助け船を渡してくる。
ヴィオレットは、また少ししんみりした顔をしている。その目には、普段の高飛車な印象は消え、妙に落ち着いていた。
「チーロさんは、正しい意味で神子になるべき人だったかもしれません。ただ、サロメさんと仲が良かったのはどうかと思いましたけど」
また、サロメ下げが出た。
「では、私はこれで。他に回るところがありますので」
護衛騎士を連れてサロメが去る。
「どう思いましたか？」
エラルドが聞く。
「どうと言っても。ただ、ヴィオレットさまは意外に複雑な人間じゃないかなと感じました」
「……そうですか」
エラルドは、それだけを言った。

III

一通り挨拶が終わったところで、侯爵家の侍従がエラルドに話しかけてきた。
エラルドは神妙な面持ちになり、クロエを見る。
「クロエ嬢」
「どうかしましたか？」
「これから僕、席を外さないといけないのですが」
さすがにホストに呼ばれては断れないのだろう。雰囲気からして、エ

ラルド一人に用事があるようで、クロエはついていけないらしい。
「エラルド卿。私は問題ないので、行ってきてください」
「うーん……」
エラルドはまだ心配らしく、顔を曇らせている。イネスがいるから問題ないかと思うが、心配性のようだ。
「少し疲れたので、休憩室を借りることはできますか？」
クロエは侯爵家の侍従に提案してみる。情報もこれ以上入らないだろうし、少し休んでも問題ないだろう。
「休憩室はこの先にございます」
侍従は赤い扉を示す。
「休憩室に行くのでしたら。せめてそこまでお供します。そのあと向かいますけど、問題ありませんか？」
「かしこまりました」
侍従はエラルドに頭を下げる。
クロエたちはパーティ会場を後にして、近くにいた使用人に話しかけて空いている休憩室に入る。
「終わり次第、戻ってきますので」
「わかりました」
クロエは休憩室の扉を閉めると、大きく息を吐いた。『使用中』の札をかけておけば、貸し切りになる。
少し耳鳴りがする。情報を集めるために、ずっと耳をそばだてていたからかもしれない。
「便利だけど、疲れるなあ」
クロエは手首につけた古びたバングルを見る。さっき衣装替えをしたとき、ゾエに外すように言われたらどうしようかと思った。
とりあえず猫足のソファに横になり、靴を脱ぐ。立ちっぱなしで爪先が痛い。だらしない恰好だが、入口からは衝（つい）立（たて）で見えないので気にしない。
（見えなくなっているのは、密会用なのかなあ）
クロエは下世話なことを考えながら、テーブルの上のナッツを摘まむ。軽く塩が振ってあって美味しい。
つい手が伸びてしまいポリポリと食べていると、隣でカリカリという音が聞こえた。
なんだ、と横を見ると、金色の目をした青い聖獣がナッツを食べている。
そこにいたのは、ラズだった。
「!?」
クロエは思わず叫びそうになり、慌てて自分で口を押さえる。
ラズはつぶらな瞳をクロエに向けて、大きな頬袋を横に傾ける。
「な、なんであんたがここにいるの？」

思わず小声でラズに話しかけてしまうが、ラズは口をもごもごさせているだけだ。保護区にいるはずの聖獣がクロエの隣でナッツを貪っていたら、まるでクロエが保護区から持ち出してきたみたいではないか。
ラズはどうやってここまで来たのだろうか。誰か神子候補の馬車に潜り込んできたのか。
（困った、困ったぞ！）
クロエは頭を抱えながら、この聖獣をどうしようか考える。誰かに見つかる前に、上手い具合に聖獣の森に戻してやらねばならない。
そう思っていると、ガシャッと扉が開く音がした。
クロエはラズを抱っこしながら、衝立の端からそっと覗（のぞ）く。
「ああっ、ちょっと……待って」
「いいだろ、なあ」
二人の世界に入りまくった貴族の子息と令嬢がとても仲睦まじく休憩室に入ってくると、いちゃいちゃと壁伝いに別のテーブルに向かっていく。
（うわーーーーー！）
やめてくれー、とクロエは思いながらも、ちょっとじっくり見てしまう。今にも婚前交渉を始める勢いだ。二人の世界に入りまくって、表の『使用中』の札が見えなかったのか。こんなことなら鍵もかけておけばよかった。
クロエはどうしようかと思いつつ、そっと部屋を出て、足音を立てないように扉も静かに閉める。
「ふぅ」
息を吐いたところで、クロエの懐には青い聖獣がおさまっていた。クロエは何もやましいことはしていないのに、なんでこんなにこそこそしなくてはいけないのか。
「ラズ、なんであんた来たの？」
このまま青い聖獣を持ち歩くわけにはいかず、だからといって置いていくわけにもいかない。せめてエラルドかイネスと合流できたらいいのにと考えて、少し思い直す。
（イネスさんは駄目だ）
せっかく完璧な変装が決まっているのに、ラズを見たら本性が出てきてしまいそうで怖い。社交界のファッションリーダーが、鼻血を垂らした変質者に変わる。
ともかく、人目のつかない場所へと移動するに限る。
「ねえ、ラズ。ちょっと移動するんだけど、ここに隠れてくれない？」
クロエはスカートをたくし上げる。ガーターベルトにつかまってもらおうと考えた。ラズを隠せるような場所はそこしかない。

ラズは賢いのでわかってくれるかなと話しかけてみたのだが、予想外な反応が来た。
青い聖獣は小さな前足を両頬に当て、首を横に振っていた。まるで「いやいや」しているようだ。
「いやって……。ちょっと不愉快かもしれないけど、頼むから隠れて。見つかるとやばいの。わかる？」
青い聖獣に対してクロエは説得を試みると、ラズはしぶしぶクロエのスカートの中に入ってくれる。内側のフリルが重いので、そこにつかまっているようだ。ガーターベルトにつかまったほうが楽なのに、そこは避けていた。
（本当に人間の言葉を理解しているのでは？）
疑問に思いつつも、今はそれどころではない。
「ありがとう」
クロエはほっとしながら、廊下を歩く。
パーティ会場に戻るのは、貴族にからまれたりラズの存在がばれそうで怖いので、人目のつかない中庭に出るしかない。他の休憩室で休むという手もあったが、生憎他も先客がいた。
クロエはあくまで平静を装いつつ、使用人を探す。
「すみません」
通りかかった使用人に、エラルドへの言（こと）伝（づて）を頼む。
（ったく、私がいること知らなかったのか）
さっきのカップルに腹を立てつつ、クロエは中庭へと向かった。

IV

侯爵家の中庭は素晴らしい。アーチや噴水、それから色とりどりの花。本来、月明かりだけでは見えないのだが、淡い光源が各所に置いてあり、それらを照らしている。
他（よ）所（そ）ではお目にかかれないほど素晴らしい庭だが、また休憩室のように二人だけの世界を作っている奴らがいないかと、クロエは目を光らせる。
幸い中庭にはそんな人たちはいないようで、ほっとする。
少し離れた東屋へと向かったクロエは、設置してあるベンチに座って、テーブルに肘をつく。行儀が悪いと言われようが、疲れているので仕方ない。
スカートから出てきてクロエの体を上って肩に止まったラズが、休憩室から拝借したナッツをまた食べ始める。
「エラルド卿、早く戻ってこないかな」
クロエは、エラルドと侯爵夫妻が一体何を話しているのだろうかと想像してみる。
（もしかして、結婚話？）

エラルドの見た目は最上級、本来の家柄も悪くない。さらに結婚適齢期ときたもので、結婚話の一つくらい上がっていないほうがおかしい。
（だとしたら、相手はヴィオレット嬢になるんだろうけど……）
いやいや、とクロエは否定する。
正直、二人の性格が合うようには見えない。何より、ヴィオレットが神子になったら、しばらく結婚話から遠のくはずだ。今の時期に話を進める必要はないだろう。
（いや、私には関係ないし）
否定しつつも、一度考えてしまうと離れないのが人間の性（さが）だ。
実際どうなのだろう、あとで訊ねても問題ないだろうかと考えていると、ガサッと音がした。
誰かがこちらに近づいてきている。
（誰!?）
クロエは肩に乗ったラズを掴むと、テーブルの下に隠す。エラルドならよかったのだが、生憎そこにはクロエの願望とは違う人物がいた。
「聖女候補の方でしょうか？」
現れたのは、二十代半ばの青年だ。背は高めでがっちりしている。こげ茶の髪にとび色の目、特に変わった特徴はないが、パーティ用の衣装と言うより騎士のような恰好をしている。
（騎士か、それとも貴族の次男、三男坊か）
暗記するようにと渡された貴族名簿の中には、青年の特徴はなかった気がする。相続権のある高位貴族ではないだろう。
中堅以下の貴族なら、神子候補に話しかけてくるというのは考えられる。だが、クロエは今、エラルド以外に会いたくない状況だった。
（こんなところまで来る必要ないのに）
クロエは心の中で悪態をつきつつ、表向きの笑顔を作る。
「はい。ビルツ伯爵より推薦をいただきました、クロエと申します」
ここで『ビルツ』という名前を出して、しっかり威（い）嚇（かく）しておく。エラルドは成金というが、まだまだ社交界では名家として名が通る。相手が大した貴族でなければ、牽制になる。
しかし青年はひるむことなく、むしろ目には熱気のようなものが湧いていた。
「私は、デュモン伯爵家の次男で──」
（自己紹介はどうでもいい！）
クロエは立ち上がってこの場から去りたいが、テーブルの下、膝の上にはラズがいる。指先でラズをつついてスカートの中に隠れるよう促すが、動かない。
（ちょっと、撫でてるわけじゃないんだから！）

クロエの指がツボにハマったのか、ラズはぐるぐる言っている。
（だから、違うって！）
強めにツンツンすると、ようやく事態に気付いたのかラズはスカートの中に潜りこんだ。
「そろそろパーティ会場に戻らないといけませんから」
クロエは早急に切り上げようと立ち上がり、スカートを持って一礼した。
（あれ？）
その時、伯爵令息の足元が目に入る。暗くて見えづらいが、彼の靴はやたら汚れているように見えた。
聴覚と同じように、視覚も魔道具で強化されている。もっと確認しようと目を凝らすと、今度は暗くて見えないところまで鮮明に見える。
やはり泥だらけの靴で、まるでぬかるみを歩いてきたかのようだ。靴だけでなく、ショースも汚れている。
（あんな足元じゃ、パーティ会場にまず入れない）
ドレスコードで出禁を食らうはずだ。
クロエは頭を上げつつ、平静を装う。
何事もなかったかのようにパーティ会場に戻ろう。そして、早くエラルドに合流しようと焦る。
「失礼します」
「お待ちください」
青年は、クロエの手首をぎゅっと掴む。
痛い、力が強い。呼び止めるのに、こんな力で掴む必要はあるのか。
「サ、サロメ嬢は来ていないのですか？」
青年に体を引き寄せられ、耳元でそうささやかれる。
クロエは一瞬で鳥肌が立った。思わずのけぞり、手を振り払い距離を取る。
この青年が、さっきダンスで話していた伯爵令息のうちの一人だと気付く。
「彼女は来ていませんよ」
クロエは今更だと思いつつも、声色が変わらないように応対する。
青年の目は血走っていた。唇は渇いており、心臓の鼓動がクロエの耳まで届く。
（普通じゃない……！）
いかに逆上させずに彼の元を離れるか、クロエは頭を巡らせる。青年に背を向けないように、でも違和感のないように歩く。
「サロメ、サロメ嬢は……」
青年は屈強な手をクロエへと伸ばす。クロエはずりずりと移動しながら、周りをうかがう。
（エラルド卿、まだ⁉）

クロエは視線だけ走らせるが、エラルドの姿はない。
いない、誰もいない。誰かいてくれてもいいのに。
この場をどう切り抜けようかクロエが考えていると、スカートに妙な重さの移動を感じる。ラズがスカートの中から出て、クロエの背中に移動していた。
賢い青い聖獣は何を思ったのか、クロエの手のひらにナッツをのせる。
「私はサロメさまのことは知りません！」
クロエははっきり言うと、ナッツを指ではじいた。
（いけ！）
普段からカードゲームで鍛えた指先だ。勢いよく飛んだナッツが、青年の目に当たる。
クロエは背中に張り付いたラズを掴むと、一目散に走って逃げる。
（振り向くな！ 走り抜けろ！）
そう思っているのだが、困ったことにクロエが履いている靴のヒールは、無慈悲なまでに走るのに適していなかった。
普段ならなんてことはないような、敷き詰められた煉瓦の隙間に踵（かかと）がはまり、まるで幼い子どものように、クロエは無（ぶ）様（ざま）にこけてしまう。
クロエは、持っていたラズを地面に衝突する前に手放すので精いっぱいだった。
せっかくゾエが用意してくれたパーティ用のローブが、ビリッと嫌な音を立てる。
膝が痛い。顔も擦りむいている。
痛みをこらえ立ち上がろうとするが、もう遅い。
「サロメ、サロメ、俺のサロメは!?」
青年はクロエに馬乗りになると、うつ伏せになっていたクロエを仰向けにし、首をぎゅっと絞めてきた。
「俺は、俺は、ただサロメに会いたいだけだ。なんで、なんで俺の邪魔をする!?」
節くれだった手が、ぎゅっとクロエの首を押しつぶす。訓練された男の手は、クロエがいくら爪を立てようと離れない。
「っ!?」
大声を出そうにも、声が出せない。クロエは足を無様にバタつかせ、クロエの倍はあろうかという太さの青年の手首を引っ掻くことしかできない。
（やめろ、やめろ！）
月明かりの逆光で、青年がどんな表情をしているのかさえわからない。だが、目が赤く輝いているのだけは目視できた。
酒か薬にでも溺（おぼ）れたかのような、あのクロエを陥（おとし

い）れようとした聖騎士たちの目によく似ていた。
でも、その激情は何倍も濃く、異常だった。
苦しくて何もできない。クロエは自分の無力さに打ちひしがれつつも、このまま死んでたまるかと思った。
（まだ、後金を貰ってないんだよ！）
クロエは左手を伸ばす。どうせ殺されるなら、相手の目くらいえぐってやろうと指を突きたてようとした。
しかし、よけられて青年の顔にクロエの手首がぶつかる形になり、魔道具のバングルが青年の右目に当たる。
（ちっくしょう！）
まだ貰ったお金を全然使っていない。
子どもたちの新しい服も、教科書も買っていない。
身内のいないクロエが死んだら、お金はそのまま国の物になってしまう。
これなら遺言書の一つでも書いておくんだった、と後悔する。
（私、もうすぐ死ぬわ）
そう思った時、クロエは喉にかかった力が弱まっていることに気付いた。
青年の正気を失ったような赤い目が、元のとび色に戻っている。首にかけた手が震えながら離れ、あわあわと口が開いていた。
「な、なんで俺はこんなことを……」
（ど、どういうこと？）
クロエが聞く前に、青年の体はクロエの前から消えた。
何が起こったのかと思えば、エラルドが青年を殴っていた。
「クロエ嬢！」
エラルドは青年をクロエから引きはがし、もう一発拳を食らわせる。
（エラルド卿、慌ててるな）
クロエは頭の中は冷静に、体はげほげほとせき込み、不足した酸素を吸うので精いっぱいだった。
騒ぎに気付き、駆け付けた人々の足音が響く。
その中で、エラルドはまだ襲ってきた青年を殴っているようだった。
（エラルド卿、似合わないよ）
力ではなく口が達者でいればいい。
エラルドとはそういう青年だ。
クロエはぼんやりする視界の中でそう思うと、ゆっくり目を閉じた。

八章 ―― お見舞い

Ⅰ

「俺はどうせ長生きできねえ。クロエ、おまえは俺が生きているうちに、一人で生きられるようになるんだな」
父の口ぐせ。酒を飲んだ夜は毎回聞かされた。
正直、ろくでもない男だった。宵越しの金は持たない主義で、毎日飯と酒を買ったら、あとは博打の元手となる銀貨を一枚とっておくだけだった。
クロエには母の記憶はない。こんなろくでなしの父なので、さっさと見限ったのだろう。
人間として駄目な父だったが、博打には強かった。そして、クロエに飯を食わせるだけの甲（か）斐（い）性（しょう）くらいはあった。
「子どもくらい、ちゃんと育ててぇよ。飯と寝床くらいは与えてやんなきゃいけねえだろ」
ろくでもないが、それがくそ親父とクロエが言い切れない理由だった。ろくでなしとは何度も言ったけど。
ならば真っ当に働けばいいのに、父には運と度胸しかなかった。
父は養護院で育ち、十五になると追い出された。まともな教育を受けておらず、比較的できたのは数字の計算くらいだ。
計算ができても文字が書けないので、商家では雇ってくれない。雇ってくれても、二束三文の給料しかもらえない。
かすかな給料を博打に使い、そして博打が仕事になった。
クロエは毎日の博打の結果で、飯の豪華さ、宿の豪華さが変わる。
「俺は聖女には感謝してるんだ。おかげで、俺の趣味が商売になる」
博打で勝つと、父は酒臭いだみ声でいつもクロエにそう話した。
「おまえは読み書きくらいちゃんとしておけ。相手に馬鹿にされると、運気も逃げちまう。ついでに計算もできると嬉しいかな」
そう思うなら、ちゃんとした学校に通わせてくれてもいいのだが、父には博打しか取り柄がない。
クロエは擦り切れた聖書で字を覚え、買い出しの値切りで計算を覚えた。
「俺がいなくなったら、都会で真っ当な仕事を見つけろ。俺と違っておまえならできるはずだ」
強すぎる博徒は、常に流れないといけない。博打が合法とはいえ、常に勝っている博徒は嫌われる。ある程度稼いだら場所を変えないと、命を狙われることもあるからだ。
クロエが博打を覚えて勝率が上がったのも原因で、一時期は父子連れの博徒は賭場に出入り禁止になったこともあった。

そんな父も、酒と老いには勝てなかった。
ある日、父は欲張り過ぎた。さっさと切り上げてしまえばいいのに、勝ち過ぎてしまった。
老いによって判断力が弱まったのか。それとも、もう流浪の旅は潮時だからと金をかき集めようとしたのか、どちらかはわからない。
クロエは父の帰りを待っていたが、何日経っても父は賭場から戻らなかった。それどころか、クロエもならず者に追いかけられるようになった。
まだ十二歳だったクロエだが、どういう世界に自分たちが生きていたかは、十分知っていた。
父は、もう死んでいる。
そう悟った時、クロエの行動は早かった。
髪を丸刈りにして少年のように振る舞い、父子の博徒だとばれないように変装した。
その日の賭け金として使うはずだったなけなしの銀貨一枚を握りしめて、クロエは辺境の地までやってきた。
父がいつかは行ってみたいと言っていた『幸運の聖女』の地。カードゲームで領地を取り戻した聖女は、父にとっての憧れだった。
教会が運営する養護院には、一時的に身を寄せるだけのつもりだった。
でも、丸坊主に髪を刈り取り、何日も風呂に入っていないみすぼらしいクロエを、神官たちは温かく迎え入れてくれた。
神官たちは、粗末だが温かいスープと、簡素だが清潔なシーツが敷かれたベッドを用意してくれた。
親切で優しい人たち。でも、養護院にお金がないことは明白で、クロエを受け入れることでもっと貧しくなると簡単に想像できた。
父は嫌いではなかった。でも、ろくでなしだってわかっていた。
父には博打以外に何もなく、クロエに教えられることも似たようなことだった。
父は愚かだった。他の生き方ができなかったのは、どうしてだろうか。
クロエは何年も考え、結論に至る。
父の生きる術（すべ）が、博打以外になかったから。他の生き方を教わったことがなかったからだ。
何も持たないことは、弱い。
逆に言えば、持てば持つほど強くなれる。

成長したクロエは、養護院の子どもたちを見る。孤児は、十五になると出て行かねばならない。それまでクロエが教えていた勉強を、誰が教えられるだろうか。

養護院は貧しく、神官たちは子どもたちを飢えさせないようにするので精いっぱいだ。
このまま、ただ寝所と食事だけを与えられた子どもが養護院を出ると、どうなるだろうか。
きっと、父のような大人がたくさん生まれる。
そんな大人を作らないためには、何が必要だろうか。
クロエは一枚の銀貨を転がし、酒場に向かうようになった。
奇しくも、父と同じ方法しか思いつかない自分を呪いつつも──。

II

クロエは、ゆっくり目を開ける。
宿舎の寝室の天井、それから黒髪の後頭部が目に入る。
（誰だよ、重い……）
クロエは視線だけ移動させる。黒髪の持ち主は男性で、騎士のような恰好をしている。寝ているクロエの上に覆いかぶさっているようだ。
（……寝てる？）
姿勢からして、椅子に座ってクロエを看病してくれていたらしい。
（騎士……。黒髪……。エラルド卿か）
いや、重いし邪魔だし、なんでこんなところで寝ているんだ。
そう思いついたとき、クロエは飛び起きた。
（あの伯爵令息！）
クロエはデュモン伯爵令息に首を絞められていた。エラルドが助けてくれたが、そのまま気を失っていたのだ。
あまりに勢いよく起き上がるものだから、勢い余ってエラルドの後頭部に頭（ず）突（つ）きする羽目になる。ガチンという音と共に、眠っていたエラルドも目を覚ます。
『いてててて』
二人そろって声を上げ、そして顔を上げる。
「ク、クロエ嬢！」
エラルドは慌てた顔で立ち上がった。普段の余裕ある顔が崩れていて、なんだかおもしろいとクロエは思う。ただ、両拳に巻かれた包帯が痛々しい。
（あの青年を殴っていたな）
ぼんやりする視界の中で、エラルドが助けに来てくれたことは覚えている。普段の温厚で商人気質な彼とは打って変わって、別人のような勢いだった。
（顔はグーで殴るもんじゃないのに）
拳を痛めてしまうし、実際にそうなっている。
とはいえ、それだけエラルドが慌てていたのだろうとクロエは推測する。

「申し訳ありません。僕が来るのが遅かったばっかりに」
きっちりと頭を下げるエラルド。本当に申し訳なさそうで、眉が情けなく下がっている。
クロエはエラルドの言葉で、ようやく自分がどうなったかを思い出す。首には包帯が巻かれ、頬や足には擦り傷、鏡を見たら卒倒しそうな姿だろう。
（ひっでー恰好だろうな）
服は着替えさせられ、ネグリジェを着ている。泥だらけの体も拭かれているようだ。
「エラルド卿」
「なんですか、クロエ嬢？」
「心配なさるのはわかるのですが、護衛騎士とはいえ寝間着姿の淑女の前にいるのはどういうことでしょうか？ なにより私の上で寝てましたよね？」
「あっ……、いえ、ええっと」
下がり眉から慌て顔に変わるエラルド。
（からかうのはこれくらいでいいかな？）
クロエとしては色々エラルドに文句を言いたいところだが、現状を把握するほうが大切だと頭を切り替える。
「冗談です、エラルド卿。それより青い聖獣、ラズはどうしてますか？」
まず、あの場にいた聖獣のことを聞いてみる。
「ラズなら、こちらに」
エラルドが部屋の隅を示すと、そこにはイネスが作った特製ベッドにリスのような生き物が丸まっていた。
「クロエ嬢の伝言で呼び出されて中庭に向かうと、ラズが飛び掛かってきて驚きました。あの子が案内してくれなかったら、僕が到着するのはもっと遅かったでしょうね」
クロエが首を絞められている時、ラズがエラルドを探してくれたらしい。
（あとでいっぱいナッツをあげなきゃ）
とは言え、慌てて休憩室を飛び出す羽目になったのはラズのせいでもあるので、少し複雑だ。
「クロエ嬢は自分の心配をしたほうがいいですよ。二日も目を覚まさないので大変でした」
「二日⁉」
そんなに経っていたのかとクロエは慌てる。
「これ以上目を覚まさないようであれば、『癒しの神子』を要請する話まで出ていました。生憎、手持ちに回復機能がある魔道具はないので」

「『癒しの神子』って、我が国が誇る外交最終手段じゃないですか？ 私なんかが治療を受けられる相手ではありませんよ」
『癒しの神子』とは、その名の通り、傷や病を治す神子だ。『癒しの神子』がいるだけで、諸外国ではミュトス王国に手を出すなというお触れが出るほど、権力を持った神子である。現役の神子の一人で、任期を終えたあとも引っ張りだこになるだろう。
「教会も、これ以上神子選抜試験を延期するわけにはいきませんから、惜しみはしないでしょう。何より、侯爵家の舞踏会で起きた惨事です。侯爵家がクロエ嬢に傷一つ残すわけにはいかないと豪語していました。ヴィオレット嬢はとうに癒しの神子の手配を終えたと言っていましたけど」
「私は大丈夫ですから！ それより、私が眠っていた二日間に何があったのか教えていただけますか？」
ラズが無事に戻ってきたとわかったので、クロエは本題に移る。
「クロエ嬢を襲った暴漢、デュモン伯爵家の次男は、二年前の神子候補殺害を自供しました。証拠が全くないながら、彼の証言が当時の状況と一致していることで、実行犯には間違いないということがわかりました」
「やっぱり」
クロエは納得する。あの青年は、サロメに対して異常な執着を見せていた。ただ、クロエが首を絞められたとき、なんだか彼の様子はおかしかった。
「デュモン家は、本来このパーティに招待されていません。警備をかいくぐって水路から入り込んできたようです。ものすごい執念でした」
ヴィオレットも、サロメが原因で問題があった貴族は呼んでいないと言っていた。サロメを困らせるつもりなら呼んでいてもおかしくないが、それくらいの分別はついていたらしい。なのに、貴族が恥も外聞もなく水路から侵入するなんて、誰が考えるだろうか。
クロエのために癒しの神子を呼ぼうとしたのは、侯爵家の顔に泥を塗らないためにも必要なことなのだろう。
しかし、クロエは妙に引っかかる。
（なんかヴィオレットさまの行動に違和感があるんだよなあ……）
クロエの勘違いであればいいのだが。
（そういえば……）
襲われた際、暴漢の行動にも違和感があった。たしか左手で暴漢の顔を叩いたあとだ。
クロエは左手首につけたバングルを見る。
「⁉」
バングルの裏側の刻印が『I』しか残っていなかった。

「エラルド卿、これは一体？」
「魔道具が消耗していますね。あと三回は持つと思っていたのに、一回しか持たないなんて。二回分の激しい消耗があったようですが、いつ消耗したか覚えていませんか？」
「実は……」
クロエは伯爵令息の顔にバングルが当たったあと、彼の様子が変わったことを説明する。赤い目が正気に戻ったように見えたと正直に伝える。
エラルドはふむ、と顎を撫でる。
「彼は水路から侯爵家に侵入し、サロメ嬢の行方を聞くためにクロエ嬢に襲い掛かった。その割には、捕まった時は大人しく、僕に殴られるままでした。まるで憑（つ）き物が落ちたかのようでした」
「実際、落ちたのではないですか？」
クロエはバングルを撫でる。
「伯爵令息は誰かの祝福（ギフト）によって操られていた。魔道具に触れたことで、その祝福（ギフト）が弱まったと考えたら、辻褄が合いますよね？」
「そうですね。クロエ嬢の言う通りです。伯爵令息はこの二日間で自分のやったことに対して自供はしていますが、どこの誰から情報を得たのか曖昧でした」
「と言うと？」
「伯爵令息が言うには、全て偶然情報を得たそうなのです。まず、二年前にサロメ嬢が神子候補になったことを知人から聞き、サロメ嬢が大教会のあの場所によくいたことも偶然耳にした、と。そして──」
エラルドは一拍置く。
「サロメ嬢が誰かに恋心を寄せているということも」
「それって、かなりサロメ嬢に近しい人間しかわからないことじゃないですか!?」
そう言ってクロエはベッドから思わず身を乗り出すと、うめいた。クロエの体には、擦り傷の他に打ち身もあるらしい。
無理するな、とエラルドが目線で訴える。
「ど、どこの誰がそんなことを？」
「それがはっきりわかれば苦労はしないんですけど、不思議なことに彼が情報を仕入れた先はどれも接点がない人ばかりでした。商人だったり、聖騎士だったり、貴族だったりと共通点がなかったのです」
「たまたまサロメさまが神子候補になったのを知り、教会内の彼女の動向を把握し、事件当時に伯爵令息が誰にも目撃されなかったのは、すべて偶然だったということでしょうか？」
「ええ」
確かにエラルドの言うとおり、偶然にしてはできすぎている。誰かが

お膳立てしたような舞台だ。
「あくまで、伯爵令息は単独犯という考えなんでしょうか？」
「ええ、少なくとも捜査班はそう思っています。このままでいくと、伯爵令息が犯人として二年前の事件は解決、という形になりそうです。まだ事情聴取は続けていますが、これ以上伯爵令息からの情報は得られないでしょうね」
エラルドは腑に落ちない顔だ。実行犯が捕まったとしても、他に計画犯がいて捕まらなければ、また何か起こってしまう可能性もある。
「もし計画犯がいるとして、その人はそんなにサロメさまが気に食わなかったのでしょうか？」
「そうですね。でも、彼女はもうすぐ神子候補を辞退する予定ですから」
真犯人がいるかもしれない、それが捕まらないのは気に食わない。
だが、サロメを狙う理由として考えられる神子候補という立場を彼女自身が辞退することで、もう狙われなくなるかもしれない。
また、エラルドが魔道具の呪いを解いてくれたら、彼女の美貌によって事件が引き起こされることもなくなるだろう。
「ところでイネスさんを見かけないのですが、どうしたのでしょうか？」
「……イネスは伯爵令息の事情聴取に立ち会っています」
「どうしてまた？」
「イネスは前の神子候補、チーロの時も一緒に来ていました。チーロが死んだことで一番責任を感じているのは、イネスなのです」
クロエは何も言えなかった。イネスは、チーロのことで時折複雑な表情をしていた。彼女が社交界のファッションリーダーとして別の顔を持ったのも、二年前の事件の情報を集めるためだろう。
「ところでクロエ嬢。お腹は空きませんか？」
（そういえば）
クロエは腹を撫でる。二日も寝ていたということは、二日も食べていないということだ。
「消化の良い、軽いものを準備してきます」
「ありがとうございます。あっ、エラルド卿」
「なんですか？」
「そういえば、神子選抜試験は短い時は七日で終わると言ってましたよね？ 私は二日寝込んでいましたけど、あと何日くらい続くのかわかりませんか？」
「実は、神子の最終決定は三日後になりました」
そう言って、エラルドは困った顔をする。
「このままだと八百長試合で神子が決まりますね」
至極残念そうにエラルドが言う。

「クロエ嬢の仕事は終わりです。あとの三日は、ゆっくり休養なさってください」
「終わりって……」
クロエは、あまりにあっけなさ過ぎる気がした。
それと同時に、ほっとする自分もいる。
（そうだ）
「もう一つ確認していいですか？」
「なんでしょう？」
「このような場合、私に後払い金の報酬は入るのでしょうか？」
クロエは目を光らせる。これは確認しなくてはいけない。
成功報酬金貨五百枚、これがあるのとないのとでは大きく違う。
まだ事件が完全に解決されたとは思えない。でも実行犯は捕まった。
成功か失敗か、はっきりさせてもらいたい。
エラルドは呆れた笑いを見せた。
「ちゃんと危険手当も込み込みで、しっかり色を付けてお支払いさせていただきます」
「ありがとうございます！」
「うわあ、いい返事ですね」
クロエはぴしっと敬礼すると、また横になった。
お金は大切で必要なもの。とりっぱぐれてはいけないのだ。

III

クロエが目覚めた翌日、モニクとゾエがお見舞いに来てくれた。
「なんて奴なの！ 犯人は死刑にすべきです！」
声を荒らげているのは、ゾエだ。
（さすがに過激派すぎじゃない？）
クロエは苦笑いを浮かべる。
「ああ、私がずっとクロエさまと一緒にいればよかったわ。ごめんなさい」
ゾエは心底悲しそうな顔でクロエに謝りつつ、たまにエラルドを睨む。
「護衛騎士はまともに働かなかったのかしら？」
チクチクした声が、ドアの横に立っているエラルドに突き刺さっているようだ。
「このリンゴのコンポート、とても美味しいです」
モニクはモニクで、クロエの療養食を美味しそうに食べていた。侍女が毒見したものの、一応ライバルの部屋で出された物を簡単に食べていいものだろうか。確かに、モニク一人に外交を任せると大変不安で仕方ない。
二人の護衛は部屋の入口で待機し、代わりに侍女が付き従っている。

「お二人とも、ありがとうございます」
クロエとしては、二人がいては逆に休めないのだが、お見舞いに来てくれること自体は嬉しい。養護院で風邪をひいた時、子どもたちがクロエのもとにわいわいやって来たことを思い出す。
クロエはお見舞いついでに、二人に伝えたいことを言うことにした。
「お二人とも。私はこのような状態で、もう神子候補として失格だと思います。なので、お二人が選ばれることを願っています」
「そんなこと言わないでください！」
ゾエがクロエの手を握る。
「私は、クロエさまこそ聖女にふさわしいと思っています。ヴィオレットさまがなるより、ずっとふさわしいです！」
ここでサロメの名前が出てこないのは、すでに彼女が辞退した後だからだろうか。
「サロメさまもいらっしゃいますよ？」
クロエは確かめるように聞いた。
「サロメさまももうやらないと言っていますし、本当に残念です」
ゾエが伏目がちに言った。
「きのう三人で話したの。クロエさまをまきこんでしまって、気を落としてらっしゃったの」
モニクも口を開く。
ヴィオレット以外は連携を取っているようだ。ある意味、ヴィオレットが可哀想になってくる。
「クロエさま、まだ聖女になることを諦めないでください」
ここまで言われると、クロエとてリップサービスくらいしたくなる。
「わかりました。まだ選抜試験は終わっていないですものね。なら、最後まで神子になるのは諦めません」
（嘘だけど）
普段、嘘を暴く立場としては少し心苦しい。
それから二人はしばらくクロエの元でおしゃべりを続けるが、侍女たちの顔色を見る限り、時間に余裕はなさそうだ。
「そろそろクロエさまの休息の時間ですので」
空気を読んでかイネスがやってきて、二人に帰るよう促す。
「ああ、申し訳ありません」
「ゆっくり休んでください」
労（ねぎら）いの言葉をかけつつ、モニクはじっとイネスを見る。
ゾエが先に行っても、じっと見ているものだから、クロエは訊ねてみた。
「モニクさま、イネスが何か？」
クロエはちょっとドキドキする。もしかして、パーティ会場にいた貴婦人がイネスだと気付かれたのではないかと思った。

「知っている人に似ているなあって」
（やっぱり！）
ドキドキしつつ、クロエは平静を装う。イネスはイネスで落ち着いている。
「前回、お茶会でご一緒させていただきましたので。モニクさまとは初対面ではないですから、そのせいでしょう」
イネスはごく自然に嘘をついた。クロエじゃないとわからないくらいの自然な嘘だ。
「そうですか。それより前に会った気がするけど」
「二年前もいたので、そのせいじゃないですか？」
クロエは会話に入る。
「あっ、そっか」
モニクは、納得してくれたらしい。
「いました、いました。雰囲気が変わっていて、びっくりしました！」
クロエはほっとする。
（うまく誤魔化せた）
クロエはどうだ、という顔をイネスに向ける。
しかし、イネスは妙に複雑な顔をしていた。
「お二人とも、ありがとうございます」
もう起き上がっても大丈夫そうだ。ドアの前で、もう一度頭を下げるクロエ。
「では、お大事になさってください」
ゾエがそっとクロエの手を握る。
「わたしもわたしも」
モニクともぎゅっと握手し、ついでに抱（ほう）擁（よう）された。
妙に高い体温が、養護院の子どもたちを思い出させた。
「それではまた」
モニクとゾエが部屋を出ていき、パタンとドアが閉まる。
喧（やかま）しい少女たちが去ったことで、部屋が妙に静かになったように思えた。
「クロエ嬢」
入れ替わるように、エラルドが居心地悪そうにクロエの前にやってきた。
「ゾエさまにめちゃくちゃ言われてましたね」
「あんなに言われるようなこと、僕しましたか？ ……いや、しましたね。すみません、護衛失格です」
急にエラルドが自己嫌悪に陥る。かなり気にしているようだ。
「それはそうとして、ゾエさまは余程聖女になりたくないんですね」
「神子になりたくないのは、結婚が関わってくるからでしょうね」

「王族との政略結婚ですか？」
神子や神子候補は祝福（ギフト）を持っている場合、結婚相手に事欠かないと聞く。確かに男性嫌いなゾエにとっては嫌な話だろう。
「祝福（ギフト）の有無によっては、確実に外堀を埋められるでしょうね」
「それでも、次代の聖女と交代するのは十年先ですよね？ 聖女候補も似たようなものだと思いますけど」
「神子候補だと、最悪出家すればいいですから。神子の付き人になるため、神官になる神子候補も多いですし」
神官は結婚を許されるが、権力を持ってはいけないとされる。なので、結婚する相手はおのずと平民になる。平民になってまで聖女候補と結婚しようとする貴族はいない。
「ああ、そういうことですね」
妙にゾエがクロエたちに売り込みをかけるわけだ。聖女の付き人になれば衣装のプロデュースもしやすいし、出家して独身も貫ける。一石二鳥だ。
「なんでそこまで男性嫌いなんですかね？」
そこまでは、詳しく報告書には書かれていなかった。なんとなく聞いてみただけだが、エラルドは複雑な顔をしている。
「……ゾエ嬢の生い立ちですね」
「生い立ち？ 伯爵家の一人娘ですよね？」
クロエは好奇心がわくと共に、なんとなく聞いてはいけないような気がした。
「やっぱ聞かないでおきます」
「聞いておいてください。社交界では一度は耳にする話ですから」
エラルドに代わり、イネスが口を開く。
「今後、私に社交界は関係ないですよ」
「もし神子になれば、あらかじめ知っていたほうがいい話です」
（ならないってば）
クロエはそう思いつつも、黙っている。
「ゾエさまは伯爵の本当の娘ではなく、その妹の娘なんです。伯爵夫妻は子どもに恵まれなかったそうです」
「養女ということですか？」
別に珍しくもない。貴族間ではよくあることだろう。
「伯爵の妹は、処女受胎でゾエさまを授かりました」
「処女受胎、って……」
処女受胎。神聖な言い方にも聞こえるが、要は父親がわからない妊娠のことを言う。
「ゾエさまの本当の父親はわからない、とされています」
「されています、って？」

「ゾエ嬢の銀髪と青灰色の目は、母方の遺伝ではありません。珍しい色合いなので、当たりがつくのです」
クロエは何も言えない。
「ゾエさまの母親が熱心な『聖女派』になったことを考えると、どんな相手だったか想像がつきやすいかと思います」
「そういうわけでしたか」
明るいゾエの性格からは想像できない話だった。
「それにしても、モニクさまの話、一瞬どきどきしました。まさか、アイズさんのことを言われているんじゃないかって」
「イネスの変装は僕でも見分けられないですよ。そうそうバレるわけありません」
エラルドが妙に誇らしげに言ってくれる。
「ああいう天然な性格が、一番勘が良いのです。私としても、心臓が飛び出るかと思いました」
イネスらしくない発言に聞こえたが、慌てるのも無理はないとクロエは思う。
（イネスさんはチーロさまにも仕えていた、か……）
イネスの話は聞くが、チーロの護衛騎士の話はあまり聞かない。
「そういえば、チーロさまの護衛騎士は今はどうしていますか？」
エラルドとイネスが一瞬硬直する。
「……責任感が強い彼は、聖騎士をやめて第二の人生を送っています」
「そうですか」
（触れてはいけない話題だったか）
しかし、無責任だとクロエは思う。聖騎士をやめれば責任が取れるとは思わない。
クロエは椅子に座ると、茶菓子の残りを摘まむ。イネスは追加で茶を出す。
「クロエ嬢、イネス。僕は今からサロメ嬢のところに向かおうと思います」
エラルドがクロエの前に改まった姿勢で立つ。
「サロメさまのところへ？ 例の呪いを解きにいくんですか？」
エラルドは頷く。
「それ、今すぐいく必要はありますか？」
イネスは難色を示している。
「今すぐですね。ここでサロメ嬢の呪いを解いておかなければ、今後解けなくなりますので」
「聖女候補を辞退したと聞きましたけど、試験のあとでは問題があるのですか？」
さっき来た二人もそう言っていた。

「神子候補の辞退は、サロメ嬢による独断です。神子選抜試験が終わり次第、無理やり家に帰らされるでしょう。家に帰ったら、サロメ嬢に自由はありません。彼女の養父が僕との面会を許してくれるとは思えませんので」
「確かに」
サロメにとってはいらない呪いでも、サロメの養父にとってはいくらでも結納金を吊り上げることができる魔性の力なのだ。下手をすれば、自分の愛人にする可能性もある。
「エラルドさま」
イネスが宝石箱を持ってくる。中には指輪やら、ネックレスやら、大量の装飾品が入っていた。
「これ、何ですか？」
「表面をよく見ればわかります」
クロエが目を凝らすと、何やら紋様が彫りこまれている。
「これって全部、魔道具ですか!?」
「はい。がんばってかき集めました」
クロエは恐ろしくなった。
魔道具一つで家が一軒建つぐらいの値段が付くというのに、この宝石箱の中身は町が一つ買えるくらいの額ではないだろうか。確かにエラルドが身に着けているのは三つしかないが、他に持っていないとは言っていない。
「サロメ嬢の呪いはかなり強いものなので、完全に消すにはかなりの量の魔道具が必要になります。さすがに、これだけあれば足りると思いますけど」
「でも、これ全部使い物にならなくなるんですよね？」
クロエは鳥肌が立った。
他人の呪いを解くためにこれだけの魔道具をそろえるのも、それを躊躇なく使える感覚も、庶民には理解できない。
「うわー、うわー。もったいない」
クロエは手をばたばたさせ、魔道具を名残惜しそうに見る。
「はい、クロエさま、品位が保てていません」
ピシッと敏（びん）腕（わん）侍女イネスの指摘が入る。
これだけ惜しみなく魔道具を使える人間なら、クロエの成功報（ほう）酬（しゅう）なんて微々たるものだろう。やはり、もっと報酬を上げてもらうよう交渉しておけばよかった。後悔先に立たず。
「もったいない、もったいない」
イネスに何を言われようとも、クロエのつぶやきは止まらない。
「では、サロメ嬢の呪いを解くのをやめますか？」
「いえ！」
クロエはまっすぐエラルドを見る。

「サロメさまの呪いは解いてください」
いくらお金がかかろうと、これは大切なことだ。魔道具によって壊された人生なら、魔道具を消費してでも取り戻すべきだ。
サロメによって事件が複雑になったことは確かだが、それ以上に彼女には幸せになって欲しいとクロエは思わずにはいられない。
「商人なら、一度かわした契約を反古にしてはいけませんよね」
にいっと笑うクロエ。
「はい、その通りです」
エラルドも返すようににっこり笑いつつ、両手の包帯を解く。そして、指に魔道具の指輪をはめていく。
「まるで成金」
「成金ですから」
両手の指に、ごてごてした指輪が余すことなくはめられる。
「それだけ魔道具を付けていたら、怪しまれませんか？」
「サロメ嬢の部屋には行けないので、別の場所で待ち合わせをしています。もちろん、認識阻害の魔道具もつけていますので、ばれることはないです」
「サロメさまが見つかったらどうするんです？」
「彼女にも、認識阻害の魔道具を渡しています」
なら安心だと思いつつ、クロエは首を傾げる。
「質問です」
「なんですか？ クロエ嬢」
「サロメさまが魔道具を身に着けて、魔道具の能力がなくなったりしないんですか？」
「サロメ嬢は異性にのみ発動する魔道具と化しています。男性が魔道具を付けてサロメ嬢に近づけば魔道具は消耗しますが、彼女自身が身に着ける分なら問題ないです」
「なるほど。では、エラルド卿とサロメさま、二人きりで会うのですよね？ サロメさまはよく了承されましたね」
男性不信のサロメにとって、かなりの勇気が必要だったのではないだろうか。
「そこは頑張って説得しました。僕としても、魔道具をぶつけて呪いを相殺するところなんて見られては困りますから」
クロエはエラルドを信じることにする。
「サロメさまを自由にしてあげてください」
「わかっていますよ」
そこのところは抜かりないとエラルドは言う。
「エラルドさま、念のため最低一つは護身用の魔道具を残しておいてください」
イネスが神妙な面持ちでエラルドを見る。

「なんか僕は子どものように扱われている気がしてきました」
「エラルド卿の剣の腕は中の上と聞いたもので」
クロエがさらに畳みかける。
「上の下くらいはありますよ！」
どちらにしても、護衛騎士としては情けなく聞こえる。
「両手の拳をそんな風に痛めるような騎士は、それこそ中の下ですらありません」
イネスにきっぱり言われて、エラルドは妙に決まりが悪い顔をする。
「わかってます！ では、いってまいります」
そう言って、エラルドは逃げるように部屋を出ていった。

IV

パタンとドアが閉まるのを見てから、クロエはイネスを見る。
「本当に護衛を付けなくて大丈夫ですか？」
クロエが心配そうにイネスに聞く。
「護衛騎士に護衛を付けるというのは、面白い冗談ですよ」
確かに、とクロエは思う。でも、護身用の魔道具を残しておけと言ったのはイネスだ。
「とりあえず、着替えたいんですけど」
クロエは、お見舞いが来たので着替えられなかったネグリジェをパタパタさせる。
「まだ病人のふりをしていても問題ありませんが？」
「病人じゃありませんし、擦り傷くらい怪我のうちに入りませんよ」
「病人のふりをしておいたほうが、神子に選ばれる確率が減りますけど。まあ、なれるならなってもいいんじゃないですか？」
と言いつつ、イネスは着替えを用意してくれる。
クロエはネグリジェを脱ぐと、白いローブに着替えた。
このローブともあと数日でおさらばだ。さらりとした感触を気に入っていた。辺境に帰れば、またごわごわとした神官見習いの服に戻る。
「最初から私は、聖女になるつもりなんてありませんから」
クロエの言葉に、イネスは首を傾げる。
「どうかしましたか？ イネスさん」
「いえ、さっきから『聖女』という呼び方に戻っているなと思いまして」
「聖女？ あれ？」
クロエは、確かに以前は『聖女』と言っていた。だが、エラルドが『神子派』だと聞いて、できる限り『聖女』と言わず『神子』と言っていたつもりだった。
（気が抜けたのかな？）
いや、とクロエは思い直す。

そういえば、さっきから妙に聞こえる音が静かだ。いつもならドアを閉める音も耳障りに感じるのに、先程エラルドが出ていったときはさほど気にならなかった。
（……まさか!?）
クロエはバングルを外して裏側を見ると、『I』の刻印が完全に消えていた。妙に静かに思えたのは、魔道具の『五感強化』の効果がなくなってしまったからだろう。
おかしい、クロエはこの部屋を出ていない。そして、部屋にいた人間は限られる。
エラルド、イネス、そして見舞いに来てくれたモニクとゾエだ。
『二回分の激しい消耗があったようですが、いつ消耗したか覚えていませんか？』
クロエは、エラルドの言葉を思い出す。
パーティの夜、三回持つかと思っていた魔道具は残り一回分まで消耗していた。あくまで回数の目安なのでずれていてもおかしくないと思っていたが、今考えると話が違ってくる。
この魔道具は、クロエが伯爵令息に襲われる前にも消耗していたのだろう。
いつ消耗したのか。
舞踏会の日、魔道具が消耗する前、クロエはいつもゾエとモニクに会っていた。
『聖女になれば問題ありませんよ』
クロエの周りで最も『聖女』にこだわっていたのは誰か。
それはゾエだ。
クロエは信じたくなかったが、その感情に流されるつもりはない。
（賭け事と同じだ）
騙（だま）されたほうが負ける。冷静に状況を判断し、行動しないといけない。
そして、エラルドから聞いた祝福（ギフト）の説明を思い出す。
『何かしらの言葉なのか、行動なのか、それとも自動的に発動するのかは、祝福（ギフト）の使い手によって異なります』
祝福（ギフト）をかけるのに必要な動作。
ゾエはよくクロエの手を握っていた。
ごく自然に、何度も手を握られていたが、そのあとにバングルの数字が減っているのと見事に一致する。
先ほどの訪問でゾエがクロエの手に触れた回数は二回。
そして、クロエの中で『神子』が『聖女』に置き換わった。
ささいな、されど大きな違い。
クロエとて今、イネスに指摘されなければ気付かなかった。
（いや、ちょっと待って。おかしい）

クロエは髪をかき上げる。
（サロメさまを狙う理由がわからない）
ゾエが過激な『聖女派』なのはわかる。だが、ゾエはクロエに『聖女』になって欲しいと言っていた。そこに嘘はない。彼女はクロエの前で嘘はついたことがなかった。
なのに──。
ゾエが狙うのが、ヴィオレットならわかる。ヴィオレットの家は『神子派』だ。『聖女派』であるゾエとは考えが違う。思想として相（あい）容（い）れぬものがあるのかもしれない。
でも、サロメはどうだろうか。
「イネスさん。サロメさまのご実家は『聖女派』ですか？ それとも『神子派』ですか？」
「サロメさまは『聖女派』です。新興貴族はほとんど『聖女派』で、ビルツ家は中立に見せかけた『神子派』ですね」
クロエは言葉として、『聖女』『神子』とあるのは知っている。だが、その差がわからない。ただ言葉で区別しているだけとは思えない。
（もしかして……）
サロメが狙われたということ自体が、フェイクだとすれば。
すると、前提が崩れていく。
クロエの中で、『聖女』『神子』が何を意味するのか仮定してみる。
その仮定が正しいと立証するなら、ある確信が必要だ。
（聖女派であるゾエさまが、神子候補チーロさまを狙った理由……）
思い出せ、思い出せと記憶をさかのぼっていく。暗記力には自信があるはずだ、何かヒントを聞いていたかもしれない。
『神子』と『聖女』の違い、それを思い出せ。
「……」
「どうしましたか？ クロエさま？」
黙りこくったクロエをのぞき込むイネス。
「イネスさん。一つお聞きします」
「なんでしょうか？」
「イネスさんは、神子候補だったチーロさまに仕えていたんですよね？」
「はい」
では、イネスは知っているはずだ。
クロエはごくんと唾を飲み込み、己の突拍子もない仮定を口にする。
「チーロさまは、男性だったのではないでしょうか？」
イネスは微動だにしない。
だが、クロエの目がイネスの瞳の動きを逃すわけがなかった。

九章 ―― 神子候補の正体

I

一拍置いて、イネスは呆れたような表情を浮かべる。
「何をいきなり、おかしなことをおっしゃるんですか？」
やれやれと首を振るイネスだが、クロエには通じない。
「イネスさん。私に嘘が通じると思っていますか？」
「……」
イネスはクロエを見る。
「何か根拠はあるのですか？」
クロエは記憶の引き出しを開ける。
「チーロさまの遺体は詳しく検分されませんでしたね。医者が反対派閥の者だったので、ビルツ伯爵が拒んだと聞いています。つまり『聖女派』の医者だったという認識でいいですよね？」
「よく覚えていましたね」
「カードの暗記に比べれば簡単ですよ」
クロエの記憶力はいい。
そして、ゾエが何度もチーロをドレスの採寸に誘ったけど、来なかった。今思えば、男とバレるのを警戒してのことだろう。
だが、何らかのきっかけでチーロの性別の秘密がゾエにばれてしまった。
ゾエがクロエやモニクをやたら着せ替えさせようとしたのは、性別を確認するためだったのかもしれない。ヴィオレットやサロメとなると、服を脱がせずとも女であるとはっきりわかるからだ。
（平べったくて悪かったな）
チーロという前例があるからこそ、ゾエはしっかり確認したかったのだろう。もちろん、彼女の服のセンスについては言うまでもない才能の塊（かたまり）だっただけに、悲しくなる。
「私は貴族社会にありがちな派閥だと思って、深く考えませんでした。でもそれが『神子派』と『聖女派』の派閥だと考えれば、もっと早く答えが導きだされたんでしょう。『聖女派』と『神子派』、もし男性が神子に擁立されたら『聖女派』の立場はありませんよね？」
祝福（ギフト）を持つのはほとんどが女性だ。だが、稀（まれ）に男性も祝福（ギフト）を持つことがある。なので、元々『神子』と呼ばれていたものが、女性ばかり選出されるようになって『聖女』と言われるようになった。そして、あたかも男性が『神子』として選ばれることが問題視されるようになる。
クロエの話に、イネスは黙ったままだ。ただ、ふうっと息を吐く。
「もう誤魔化しはできませんね。その通りです。チーロさまは男性でした。さらに、その祝福（ギフト）は年々弱くなっていく他の候補者

の祝福（ギフト）に比べ、強いものでした」
神秘の力は、年々減っているらしい。祝福（ギフト）だけでなく、魔法使いもどんどん減っている。魔道具が値上がりするわけだ。
「チーロさまの祝福（ギフト）は、確かモニクさまとよく似た力、動物と心を通わせるものと聞きました」
「ええ。正しくは『精神交換』。動物と一時的に器を交換することでした」
イネスは窓の外を眺める。彼女が見るのは聖獣の森だ。
「ビルツ伯爵、エラルドさまのお父さまは、貴族らしい貴族です。成り上がりと言われぬように、貴族社会を生きようとしていました。身内を聖騎士にしたり、神子を擁立しようとしたのも、商人である父親に対する劣等感の表れでした。だから、二年前、数百年ぶりに男子を神子にすることで貴族社会にビルツ家の健在を示そうとしました。ビルツ家の血縁には祝福（ギフト）持ちが多く生まれたので、都合が良かったのです」
結果、選ばれた候補がチーロだった。男性でありながら神子候補に選ばれたのは、その祝福（ギフト）が有能だったからだろう。
「でも、周りはチーロさまのことを女性と思っていたのでは？」
「はい。あえて言う必要がないですから。選抜試験の試験官の中には『聖女派』も含まれているので、仕方ありません。神子に選ばれたあと、発表するつもりでいたみたいですけど」
しかし、それは叶わなかった。
「チーロさまが男性なら、誰が黒幕かわかりました」
「誰ですか？」
イネスの声は、ほんのかすかに震えていた。
「ゾエさまです」
クロエは、銀髪のおしゃべりな神子候補の名を口にする。
「ゾエさま……。確かに実家は『聖女派』ですが」
「このバングルは、ゾエ様に手を握られるたびに効力が消えていきました」
そして、クロエは『神子派』から『聖女派』に変わりそうになっていた。
「おそらく、ゾエさまは何か暗示系の祝福（ギフト）持ちだと思います。洗脳ほど強くはないでしょう」
クロエが完全な『神子派』ではないことが、ゾエにはばれていたのだろう。理由はわからないが、少しずつ暗示を加えて、クロエを『聖女派』に変えようとしたのなら納得がいく。クロエくらいなら暗示で変えられるが、ヴィオレットともなると無理だったのだろう。
「ゾエさまの暗示で、聖騎士たちが『外で訓練をしたくない』と誘導。聖騎士であれば、養護院の訪問や大教会の警備でたくさん会いま

すから。きっと、心の中にかすかにでもある願望を膨らませる能力なのだと思います」
「そう上手くいくでしょうか？」
確かに全員を一度に誘導するのは難しいかもしれないが、人間の心理を読めばできないことはないはずだ。
「時間をかけて聖騎士たちが訓練を怠りたくなるように暗示をかけ、チーロさまが殺害されたその日は、誰か一人が『今日は無働日にしようか』とでも言ったのではないでしょうか。種さえ撒いておけば、実行したい当日に一人に働きかければいいだけですから」
「それなら、不可能ではない気がします」
イネスが眉間にしわを寄せつつ納得する。
「実行犯も同じように、前々から、それこそ前回の神子選抜試験の最終選考が始まる前から暗示をかけられていたのかもしれません」
最初は、『サロメさまはあなたとお似合いかもね』と軽口を叩いただけかもしれない。
その種を元に花を咲かせるのは、ゾエにとって造作もないことだろう。使わないのであれば、種を芽吹かせなければいい。
サロメの情報を耳にするたびに、その暗示は大きく作用する。実行犯の中で、サロメはいつの間にか自分の恋人へと変えられた。神子候補になったと知った時は自分を裏切って置いていったと思い、他に誰か好きな人がいると聞いたら愛から憎しみに変わる。
実行犯の伯爵令息は、数多く撒かれた種の一つだったのだろう。サロメだけでなく、ヴィオレットやモニクの周りにも、何かしら暗示をかけられた人がいたかもしれない。
おそらく『聖女派』の神子を擁立するための準備だったのだろう。
「あまりに都合よくありませんか？」
「ゾエさまは上手なんです。私も何度もごく自然に手を握られて、気付きませんでした」
他人の心の機微を読み、行動を誘導させる。賭場ではそんな人間など数多くいる。
しかも暗示なので、あくまで自分の意思だ。クロエを襲った伯爵令息は、自分が何かに誘導されているとは思っていなかっただろう。
「もしかしたら、月日が経つほど強力になる暗示なのかもしれません」
でないと、二年後もああやってサロメを追いかけてくるとは思えない。そう考えると、利用された伯爵令息はついていない。
しかし、事前に祝福（ギフト）を使って暗示をかけていたとなれば、どれだけゾエは用心深い人間なのだろうか。
「ゾエさまはチーロさまが男性であると知って、彼の殺害を考えた。でも、チーロさまを恨むような人間は周りにいない。しかし、神子候

補の中に、呪いによって不特定多数の異性に熱い恋愛感情を向けられているサロメさまがいた。重すぎる愛情は、裏返せば憎しみにも殺意にも変わります。ゾエさまは、そこを利用した」
クロエはサイドチェストの引き出しからカードを取り出すと、ハートと三つ葉のエースをチェストの上に置いた。
「サロメさまとチーロさまは仲が良かったそうですね。もし、この二人もゾエさまに誘導されていたとしたら？」
クロエは二枚のエースを重ね、もう一枚ダイヤのエースを置く。
ゾエがモニクを連れてヴィオレットと茶会を繰り返せば、自然とサロメとチーロが仲良くなる。
「しかし、祝福（ギフト）持ちには他の祝福（ギフト）は効きませんよ。特にチーロさまの祝福（ギフト）は強固です。ゾエさまが祝福（ギフト）持ちでも効かないと思います」
「ええ。だからサロメさまを狙います。サロメさまの呪いは、異性にしか効きませんから」
さっきエラルドが言ったことだ。
イネスは軽く口を開ける。
呪いが男性にしか向かないのであれば、ゾエがサロメに祝福（ギフト）を使ったとしても打ち消すことができない。
「サロメさまの思い人、アドン卿の存在については、偶然か必然かはわかりません。ただ、ゾエさまにとってサロメさまの心の隙をつくくらい朝飯前だったのでしょう。心配ごとがあるなら、誰かに相談すればいい、と誘導すればいいのですから」
養父の使いである護衛騎士も侍女も完全に信用できないサロメは、必然的にチーロに相談することになる。
クロエの説明に納得したらしく、イネスが神妙な面持ちになっている。
「じゃあ、早くゾエさまを……」
捕まえなければ、と思い、クロエはふと止まる。
今回の神子候補には、もう男性はいない。
これ以上、ゾエが命を狙う相手はいないかに思えたが──。
クロエは、エラルドの妙に飄（ひょう）々（ひょう）とした笑顔を思い出す。
「イネスさん。エラルド卿はサロメさまのところへ呪いを解きにいきましたね？」
「はい」
「その呪いを解く行為は、あえてエラルド卿がやらなくてもよかったのではないでしょうか？」
もし魔道具が呪いを相殺するのであれば、魔道具さえ揃えればいい。
あえてエラルドが行く必要はないかに思える。

「それは……。エラルドさまは他人に契約者の秘密を漏らすような真似は致しませんから」
もっともらしく聞こえる台（せり）詞（ふ）だが、クロエはイネスが何か隠しているように思えた。
だが──。
「サロメさまより、優先事項であるはずの護衛対象、つまり私を残してまで？」
そう揺さぶりをかけると、きゅっとイネスが唇を引き結んだ。
クロエは間髪容れずにイネスに問いかける。
「サロメさまの解呪は、エラルド卿にしかできない仕事ですか？」
エラルド以外にサロメの呪いを解けるのは、呪いが発動する対象である男性であり、魔道具が使えて、かつエラルドが信頼できる人間であることが条件だ。大教会の敷地内に潜入するので簡単ではないとはいえ、エラルドの人脈を使えばできる人は見つかるはずだとクロエは考える。
クロエは神妙な面持ちでイネスを見るが、イネスは目を瞑っている。
エラルドはクロエに嘘をつかない、ただ、真実を全部言っているようではなかった。何かしら切り札となるものを隠しているように思えた。
それが確信に至る。
「エラルド卿にも、何らかの祝福（ギフト）があると思って間違いありませんか？」
ビルツ家の血縁を考えると、エラルドが祝福（ギフト）を持っていてもおかしくなかった。
男性が祝福（ギフト）を持つことは滅（めっ）多（た）にない。だが、皆（かい）無（む）ではない。
「……」
イネスの沈黙が答えだとクロエは確信する。
「もしエラルド卿が祝福（ギフト）を持っていると知ったら、ゾエさまはどうすると思いますか？」
（私がゾエさまなら……）
男性でありながら祝福（ギフト）を持った『聖女派』が忌（い）むべき存在。
そんなもの、消してしまえと思うのではないか。
「エラルド卿の魔道具は、サロメさまの解呪でほとんど使い切ってしまいますよね。狙うならその時だと思いますけど」
「エラルドさまとサロメさまがどこで落ち合うのか、ゾエにはわからないでしょう。呪いを解く際には、認識阻害の魔道具を使って見えないようにするはずですし」
イネスはゾエと呼び捨てにした。

「ですが、サロメさまがすでにゾエさまの祝福（ギフト）にかかっているとなれば、話は違ってくるんじゃないですか？」
祝福（ギフト）は魔道具で防げるが、すでにかかっている場合はどうだろうか。ゾエはクロエの見舞いの前に、サロメの元を訪れたと言っていた。
イネスの顔色が変わり、すばやく部屋を出ようとする。
だが、開けたドアの先にはすでに人がいた。
「モ、モニクさま。それにラズも？」
モニクが、青い聖獣を抱っこして立っていた。
さすがのイネスも、この状況でラズにデレデレできるわけがなく、神妙な面持ちでモニクを見ている。
「モニクさま。どうかされましたか？ これから用がありますので、お相手はできません」
イネスの口調は丁寧だが、慌てているのがわかる。
モニクはぎゅっとラズを抱きしめる。
「ずっと黙っているつもりでした。そういう約束で……。でも、今回はそんなわけにはいかないと思って」
「何を言っているんですか？」
イネスだけでなくクロエも、何を言っているのかわからない。
「ええっと、直接見せたほうが早いですね」
モニクはラズをそっと自分の頭の上に乗せる。
『あー』
モニクの口から、声変わり前の少年のような声が聞こえた。
『久しぶり、カミ……じゃなくて、ええっと、イネス？ だっけ、今の名前。それから初めまして、クロエさん』
（えっ？ えっ!?）
モニクの頭上で、青い聖獣がぺこりと頭を下げる。
『僕はチーロ。二年前に死んだ神子候補だって言えばわかるかい？』
クロエは混乱しつつ、モニクとラズを交互に見た。

II

鬱（うっ）蒼（そう）とした森の中、エラルドは解呪に成功したと実感した。
指という指にはめた指輪、首に下げたネックレスが、ふしゅうっとただの装飾品に変わるのを感じる。
場所は奇しくも、チーロの遺体が発見された現場だ。サロメがチーロの遺体を移動した場所で、彼女はここで呪いを解くのを躊躇っていた。
「時間がありません」
エラルドとしても、サロメの呪いについては同情する。呪いを解くの

はあくまでサロメの情報との引き換えであって、彼女がやらないと言えば解く必要はない。
神子選抜試験が終わるのは二日後。サロメはすぐさま実家に連れ戻されるだろう。彼女の養父は、呪いを解くことを良しとしないはずだ。エラルドは接触できず、その前に誰か別の資産家にでも嫁に出されるに違いない。
ひたすら異性に追いかけまわされる呪いと共にいたいなら、エラルドは止めやしない。エラルドとて、サロメの行動によりチーロ殺害事件の捜査が錯（さく）綜（そう）したことに思うところがないわけではない。あくまで商人として、約束をたがわぬようにしただけだ。
エラルドは実家にある魔道具という魔道具を持ってこさせた。その際、荷物検査に引っかからないか本当に冷や冷やした。
そこのところは、商売で培（つちか）った手回しでなんとか誤魔化し、この場所に来るのも魔道具を使って隠れてきた。今も、周りに隠（おん）密（みつ）の魔道具を使って隠れている。
エラルドのできる解呪方法は簡単だ。
呪われた対象に、ひたすら別の魔道具の効力をぶつけて消滅させるだけだ。サロメには背中を向けて座ってもらい、ひたすら魔道具と呪いをぶつけていた。
昔からエラルドは魔道具と相性がよく、魔道具の力の流れを感じることができた。簡単そうに見えるが、加減を間違えるとサロメに魔道具の力がかかり大変なことになってしまう。
これを調整できることが、まさか祝福（ギフト）だとは思わなかった。
『魔道具調整』。地味だが、かなり使い勝手がいい祝福（ギフト）だ。魔道具を使うときに微細な調整ができると共に、消耗した魔道具も少しずつだが回復することができる。
高価な魔道具を使い捨てにするとクロエには呆れた目で見られたが、エラルドのこの祝福（ギフト）があってこそできるのだ。
「これで終わりです」
エラルドは大きく息を吐く。
「ほ、本当ですか？」
エラルドの方へと振り返るサロメ。
そこには、以前と変わらぬ美しい容姿であるが、明らかに違う雰囲気の誰かがいた。目は赤から、はしばみ色に変わっている。完全に、魔道具の効力が抜けた証拠だ。
以前は香り立つ薔薇のような雰囲気であったが、今は見た目が同じだけで香りが消えている。まるで造花にでもなったかのようだが、これはサロメにとって何事にも代えられないことだろう。
元々呪いが効かなかったエラルドでさえ、これほど違いが見えるの

だ。他の男性たちには、まったく別人に見えるだろう。
「もう蝶も蜂も寄ってきません」
「はい。ありがとうございます」
サロメはぽろぽろと涙をこぼす。鼻をすすり、喜んでいるが、エラルドとしてはなんとも居心地が悪い。
サロメの呪いは解けても問題は残る。子爵家はサロメの魅力を買って養女にしたのだ。神子選抜試験を辞退し、異性を籠絡する魅力も失ったとなれば、彼女はどうなるだろうか。
だが、エラルドは彼女の願いを叶えるために十分動いた。
サロメの解呪のために、ほとんどの魔道具が使えなくなってしまった。祝福(ギフト)持ちであるエラルドでなければ間違いなく破産する額の損害だが、サロメに請求するつもりはない。
エラルドも疲れてしまった。祝福(ギフト)と道具頼りに見えるがなかなかの精密作業で、変に魔道具の使い方を誤れば、エラルドにもサロメにも害が出る。わざわざ森の中を選んだのも、失敗したときのリスクを減らすためだ。
エラルドがさっさと認識阻害の魔道具を外して帰ろうとした、その時だった。
バチッと火花が散ると認識阻害の魔道具が壊れ、その先に女性騎士が現れた。
「あなたは!?」
見たことがある顔──そこにいたのは、ゾエの護衛騎士だった。普段からあまり話す相手ではないが、今日の彼女の目は妙に血走っている。
「エラルド卿! これはどういうことでしょうか!?」
女性騎士は、エラルドの喉元に剣を突き付ける。その目は、赤く輝いて見えた。
「一体、何を……」
「しらばっくれないでください。サロメ嬢と密会し、ここで何をされていたのでしょうか?」
「あー」
エラルドはそっと後ろを見る。
呪いが解けた喜びで泣くサロメに、人目を隠れるようにして展開された認識阻害の魔道具。この状況は、やましいことをしているようにしか見えなかった。
「誤解です。ちゃんとサロメ嬢に話を──」
「話など聞きたくない。この婦女子の敵め! 私の手で、断罪してくれる!」
エラルドも腰の剣に手をかけるが、鞘(さや)から抜く暇もない。エラルドの剣は見栄を張ったところで人並でしかない。なにより暴漢を殴った手がまだ痛いし、ごてごてした指輪が邪魔だ。

防戦一方になりつつ女性騎士の後ろを見ると、そこにはエラルドを睨んでいるゾエがいた。
その目には、まぎれもない侮（ぶ）蔑（べつ）と殺意が込められていた。
「ち、違います。エラルド卿は何もしていません！」
サロメが声を張り上げて主張する。しかし、女性騎士の耳には届かない。
ゾエがサロメに近づく。
「サロメさま、あんな男の話を聞かなくてもいいですよ。ほら、今まで散々ひどい目に遭ってきたではありませんか？」
ゾエがサロメの手を握りながらささやくと、怯（おび）えるサロメの目がだんだんとゾエに吸い込まれているようだ。
ゾエはなんらかの祝福（ギフト）持ちだ。そして、今サロメを取り込もうとしている。
しまったな、とエラルドは思った。
エラルドは認識阻害の魔道具をサロメに渡していたが、それ以前に祝福（ギフト）をかけられていたのなら、相殺する能力はない。サロメがゾエになんらかの形で精神を操られて、この場所のことも話したのだろう。サロメの護衛騎士にも祝福（ギフト）がかけられている形跡があったが、それもゾエによるものだったと考えれば合点がいく。
サロメは自身が魔道具化していたが、同性からの祝福（ギフト）や魔道具の効力は打ち消すことができない。クロエに説明したばかりだったのに、油断していた。
この女性騎士もまた、ゾエに祝福（ギフト）を使われたのだろう。何かしら元からある感情を増幅するような、そんな精神系の祝福（ギフト）だろうか。男性そのものを嫌悪しているように思える。
「そういうことですか」
エラルドは理解した。
なぜチーロが殺されたのか。
なぜエラルドが命を狙われているのか。
ゾエは『聖女』を否定する、祝福（ギフト）持ちの男性を憎んでいるのだ。
伯爵令息のサロメに対する異様な執着も、ゾエが促したものであると考えれば理解できた。
チーロを殺害した真犯人は、ゾエだったのだ。
エラルドは逃げつつ、指を確認する。どれももう使えない魔道具ばかりだ。
『念のため最低一つは護身用の魔道具を残しておいてください』
イネスの言う通りだったとエラルドは思う。女性騎士が剣を大きく振りかぶった瞬間、エラルドはまだ輝きが残るネックレスを握った。

バチンと大きな音がして、ネックレス型の魔道具が障壁を作る。これで、女性騎士の攻撃を防ごうとしたが──。
「残念でした」
女性騎士はエラルドを見下したまま、剣を振り下ろす。
「この剣も魔道具なんです」
バチンと障壁が割れる。
エラルドは身をよじり女性騎士の剣を避け、なんとか剣を構える。
「鞘を抜いてください」
「女性に抜き身の剣を向けろと言うのですか？」
「そういうのが一番腹立つんですよ」
女性騎士の剣速がさらに早くなる。エラルドの言葉は、女性騎士を愚弄するものだったらしい。騎士の中で女性の割合は低い。その中で護衛騎士に抜（ばっ）擢（てき）されるほどの力量の持ち主なら、エラルドとはくらべものにならないほど修練を積んだのだろう。騎士道では女性には親切にすべきとあるが、目の前の女性騎士は女性として扱われたくないらしい。
何度も打ちあい、後退する。女性騎士の目には嗜（し）虐（ぎゃく）の色が見えていた。エラルドなど、その気になればいつでも心臓を一突きにできるだろう。
だが、いくらでも侮（あなど）るといい。エラルドは逃げれば勝ちだ。いくらでも逃げ回ってやる。聖騎士として後ろ傷がカッコ悪いなんて言ってられない。エラルドの性根は商人向きで、利益のためなら戦略的撤退などいくらでもやる。
「そろそろ飽きてきた」
ゾエが言った。
「かしこまりました」
その瞬間、エラルドの足が切りつけられた。焼けるような痛みとともに、無様に転ぶ。
なんとか大きなどんぐりの木を背にして、エラルドは顔を上げる。
これでもう終わりか。
もう少し、まともに剣術の訓練をしておけばよかった。
そう思っていると──。
「やめなさい！」
大きな声が聞こえた。
エラルドはそっと声のするほうを見ると、そこには白いローブを着た赤毛の少女が立っていた。
「クロエ嬢……」
クロエは走って、エラルドと女性騎士の間に入る。
エラルドは自分の前に立つ女性を見る。癖のある赤毛にやや緑がかったとび色の目。やたら器用な手のひらを大きく広げ、まるで子どもを

庇う親猫のような態度だ。

養護院の子どもを育てるために、博打に手を出すような女性。
金にがめつくリアリストで、同時にひねくれている。
『投資なんてギャンブルみたいなものですから』
子どもたちを育てる理由に、そんなことを言うなんて。
素直に、健やかに豊かに育って欲しいと言えばいいのに。
ビルツ家は『神子派』の家柄だ。
なのに、エラルドは目の前に『聖女』がいると思った。

III

クロエは両手を大きく広げて、汗をかいていた。

なんだろう、この場違い感は。

子どもの喧（けん）嘩（か）の仲裁じゃないのに、抜き身の剣を持った人間の前に丸腰で立つなんて、斬ってくださいと言っているようなものだ。

クロエは青い聖獣に案内されて、聖獣の森を探し回った。何か話し声が聞こえて駆けつけたら、こんな状況なのだ。

馬鹿なことをやっている。

遠巻きに、安全なところで見物していればいいのに。

普段ならこんな馬鹿なことはしないのに、なんで動いたのかクロエにもよくわからない。

ただ、エラルドが死んでしまうのはもったいないと思ったのだ。

『孤児が教育を受けずにそのまま世間に放り出されるのはもったいない』

この話をまともに聞いてくれた貴族はいなかった。

貴族の中にも優しい者だっているし、養護院に善意で寄付をしてくれる人もいる。

でも、施しを与えることだけが孤児を救うことにはならない。それを理解してくれるのは、ある意味商人の目を持つエラルドなのだ。

「やめなさい！」

クロエはもう一度怒鳴る。女騎士の剣の切っ先が、クロエの鼻先に突き付けられている。

「どいてください」

「どきません！ 何をやっているのかわかっているのですか？」

クロエは汗だくになりつつ、なんとか女騎士にそう言い切った。

「クロエさま。その騎士はサロメさまに暴力を働いたのですよ」

ゾエがクロエに言い放つ。ゾエはサロメの手を握っており、サロメの目の焦点は合っていない。

クロエには、サロメの雰囲気が違って見えた。普段はもっと匂いたつような色気を醸し出していたのに、今の彼女にはそれがない。目の色も魅惑的な赤ではなくなっている。

エラルドはちゃんと仕事を全（まっと）うしたのだ。

「エラルド卿はそんな真似はしません」

クロエは、はっきり言う。

「わかりません。サロメさまほどの美女であれば、エラルド卿といえど変な気を起こすかもしれませんよ。信じられますか？」

ゾエがクロエに言い聞かせるように言った。まるで、男は女を騙すものと決めつけているようだ。

「信じますよ。そして今、ゾエさまが私に嘘をついていることもわかっています」
クロエは、あまりにわかりきった嘘だと思った。
ゾエは焦っていた。彼女の声は震えて、瞬きが多い。見破れないクロエではない。
ゾエの生い立ちについて、どんな境遇で生きてきたのか詳しくはわからない。でも、彼女がやっていることは八つ当たりで、関係ないチーロやエラルドを傷つけている。
（文句を言いたい）
でも、クロエの言葉は届かないだろう。
クロエはゾエではないし、ゾエもクロエではない。互いに生きた環境が違うからこそ、わかり合えるものとわかり合えないものがある。クロエはゾエの生き方を否定できるほどの正義感は持っていないし、だからといって内包してやれるほど聖者でもない。
ただ金貨が大好きの小市民クロエだ。
（あー、もう無理）
なんで前に出たのか。
足が震える。対（たい）峙（じ）している女騎士は今にも飛び掛かってきそうだ。何の武器もないし、魔道具もない。弱くて犠牲者を増やすだけなら、遠巻きに見ていたほうがいいのに。
「クロエさま、そこをどいてください」
「無理！」
なのに即答するのはなぜだ。
泣きたくなり鼻をすすりつつ、手を広げたままだ。
ゾエの目が次第に冷たくなっていく。
「クロエさまなら、私と同じ考えに至ってくれると思ったのに」
軽蔑するような声。
「やってください」
ゾエの言葉と共に女騎士が剣を振り下ろす。
「クロエ嬢！」
エラルドがクロエを抱きしめ、覆いかぶさる。
クロエは無力にも目を瞑ることしかできない。このままエラルドごと斬られて終わり、そのはずだった。
ガキンと音がする。金属音は何度か響き、何かが地面に突き刺さる音と共に終わる。
（し、死んでない……？）
クロエはそっとエラルドの腕の隙間から顔を出すと、侍女服の女性が剣を女騎士に向けている。女騎士の持っていた剣は、柔らかい地面に突き刺さっていた。
「もう二度と、主人を殺させません」

無機質でハスキーな声が響く。
「騎士の道は捨てても、その誓いはまだ捨てておりません」
鉄（てつ）面（めん）皮（ぴ）の侍女は冷たい美貌をゾエに向けつつ、女騎士を薙（な）ぎ払う。
一体何が起こっているのか、クロエは目をパチパチさせるしかない。
「エラルドさま。今後、剣の修練を増やしましょう」
「お手柔らかにお願いします」
目の前には、イネスが大剣を持って立っていた。

形勢逆転と言いたいところだが、まだサロメはゾエと共にいる。
「どうして！ どうして私の邪魔をするの！」
ゾエが目を吊り上げる。手を握られたサロメの目は虚（うつ）ろだ。
「汚（けが）らわしい男に、聖女になる資格なんてないの！ ここで殺すのが正解なのよ！」
クロエはゾエの叫びに目を細める。
「ゾエさま！」
クロエは声を張り上げると、覆いかぶさっていたエラルドを押しのけた。まだ怖さで体が震えるが、それでも伝えたいことがあった。
「あなたの服のセンスは素晴らしいです」
「いきなり何を言い出すのか、わけがわからないんですけど」
呆れるゾエの声、だがクロエは続ける。
「モデルと衣装を組み合わせ、どれが一番ふさわしいか決めていたゾエさまは、とても生き生きされてました。お洒落が好きで、上手。好きなものと才能が一致するのは、どれだけ価値があることかわかっていますか！」
クロエは拳を握る。
「下準備を怠らず、ある材料を組み合わせて、最高のものを仕上げる。ファッションで培った才能と技術を、なんでこんなくだらないことに使うのですか。もったいなくて仕方ない。なんて無駄な才能の使い方をするんですか！」
クロエなら、そんなもったいないことは絶対しない。それが言いたかった。
「無駄なんて、そんなことない！ 私はあるべき『聖女』を支え、いつか私たちの祖先を追いやった者たちに、鉄（てっ）槌（つい）を下さねばならないの！ それが母さまの願いだった！」
（母さまの願い……）
それがゾエの行動指針だとすれば、迷惑すぎる。モニクやクロエを聖女に、と言い続けてきたのも、その傀（かい）儡（らい）とさせるためか。
「隣国と戦争なんてしたら、シルクのリボンも赤みの強い琥珀も、手に入らなくなりますよ！ それでいいんですか？ あなたの行動が、好きなものを全部焼いてしまうんですよ！」
「それでも！」
「親の言うことなんて、占いと一緒です！ いいところだけ聞いていればいいんです！ 楽しいバザーも新しいクリエイターも、戦争なんて始まったら何もなくなってしまうんですよ！」
「あっ、そ、それでも私は……」
ゾエが困惑している。
それくらい、ちょっと考えればわかるはずだ。

なのに、ゾエは気付かなかった。
幼い頃からずっと教え込まれてきたことは、たとえどんなにおかしくてもわからないことがある。
「嘘を言わないでください！ あなたの好きなお洒落を、無駄なことで台無しにするんですか？」
ゾエが頭を抱える。
「ゾエさまを惑わせるな！」
女騎士がクロエに襲い掛かるが、イネスによって止められる。
「クロエさま！」
その時、モニクがおじさん騎士を連れて合流した。他に数人の聖騎士たちもいる。
ゾエと女騎士はすぐさま捕（ほ）縛（ばく）され、駆け付けた聖騎士たちに連行されていった。
その間も、ゾエはずっと困惑した顔をしていた。

Ⅳ

「こちらへどうぞ」
クロエがイネスに案内されたのは、自室ではなく教会の会議室だった。
とりあえず落ち着くようにと、ホットミルクをいただいている。ほんのりシロップを入れたほのかに甘いミルクだ。
「ゾエの本当の父親について話しますね」
イネスがぼそっと言った。
「別に知らなくてもいいですけど」
「ゾエの父親は──」
だが、イネスは続ける。
「隣国の王族の可能性が高いです」
「王族ですか？」
「ええ。特徴的な銀髪と青灰色の目が、その証拠です。ゾエの母親は、過去に他国の王族と接する機会がありました。その際、お手付きになったのでしょう」
他国とはいえ王族の隠し子だとしたら、ゾエの複雑な家族関係も理解できる。
「その王族とやらは、ゾエさまを認知しなかったんですね」
だから、ゾエは恨んでいるのだろうか。
「いえ。ゾエを渡さなかったのは、ゾエの実家の方です。ゾエの家系は、ビルツ家と同じく祝福（ギフト）を持つ者を多数輩出していました。隣国の王族は、あわよくば祝福（ギフト）持ちを手に入れようとしたのでしょう」
「そういうことですか」

隣国はかつて栄華を極めた国であり、魔女として祖先を迫害し追い出した国でもある。だが、数百年の月日は立場を逆転させた。かつてたくさんいた魔法使いはほぼ途絶え、対して迫害した民はミュトス王国として繁栄している。
「きっと『癒しの神子』のような祝福（ギフト）持ちが手に入れば、と思ったのでしょうね。残念ながら、そんなに上手くいくはずもなかったようですけど」
ゾエは処女受胎で生まれたと言われた。そして、隣国へと連れ去られないよう、祖先を迫害した国を建国童話を通して何度も聞いたに違いない。
その中に、王族によってもてあそばれたゾエの母の恨みが込められていたのだろう。ゾエが好戦的な『聖女派』になり、極端な男性嫌いに育つのもわかる気がした。
「ままならぬものですね」
やるせない気持ちでいっぱいだ。
クロエは、ふうっとミルクを飲む。
「……美味しい」
「クロエさまの好みに合わせて、調整しておりますから」
さすが最高の侍女だと思いつつ、クロエはイネスを半眼で見る。
「クロエさま、何か？」
先ほど、身の丈はあろうかという大剣を振り回していた人と同一人物とは思えない。美しい所作で、高らかに紅茶をカップに注いでいる。
ちなみに、エラルドは怪我の治療中だ。
「あのー、イネスさんってチーロさまに仕えていたんですよね？」
「はい」
イネスは一拍置く。
「護衛騎士として」
（そっちかー！）
クロエは、どこをどう突っ込めばいいのかわからない。
「なんで侍女をやっているんですか？」
「主人を守り切れなかった私は、騎士失格です。ですが、せめて次の神子候補には侍女としてお仕えしようと、頑張って四十リブラの減量と自分磨き、社交界の礼儀を覚えました」
「四十リブラって……」
八歳くらいの子ども一人分の体重だ。
それで社交界の花として存在するのだから恐ろしい。この二年間でどんな変身を遂げたのだろう。
少なくとも、他の神子候補たちは気付いた様子がなかった……いや、一人だけ引っかかっていた人物がいる。
「あー、やっぱりカミーユ卿ですよねー」

青い聖獣を抱っこしたまま、モニクがやってきた。少し離れたところで、おじさん護衛騎士が温かい目で見守っている。
「誰かに似ていると思ったんですよ、これですっきりしました」
これがモニクがイネスについて引っかかっていた理由の答えだった。てっきり、クロエは社交界のファッションリーダー、アイズ嬢と勘違いしていると思っていたのに。
「はい。挨拶もまともにできずに申し訳ありませんでした」
「いえ。すごいイメチェンですね。髪だけでなく目の色まで変わってる。今まで気付きませんでしたよ。あと性別まで変わっているんですか？」
（イメチェンで済ませるの？ ってか、今さらっとすごいこと言わなかった!?）
クロエはツッコみたい気持ちをなんとか抑える。名前が違うということは『イネス』の方が偽名だろうか。
（いや、その前に）
クロエは、カミーユ卿ことイネスをまじまじ見る。性別はどっちとして扱えばいいのだろうか。散々、風呂や着替えを手伝ってもらったのだが。
「モニクさまに気付かれるなんて、私もまだまだです」
「へへ。あっ、それより」
モニクは青い聖獣をイネスに見せる。
ラズ……いや、チーロは恥ずかしそうに小さな前足で顔を隠す。
「カミーユ卿、チーロさまのこと、話していなくてごめんなさい」
モニクは、ぺこりと頭を下げる。
「エラルド卿も」
ちょうどエラルドも治療を終えてやってきた。大した傷ではなかったようだが、中の上の剣のプライドはズタズタになっているだろう。
エラルドは、ラズの正体がチーロであることをすでに聞いたらしい。まだ困惑した表情で、チーロを見ている。
「モニク嬢。チーロのことについて、詳しく話していただけますか？」
エラルドが青い聖獣をのぞき込む。
「チーロさま。いいですか？」
モニクがチーロを見る。チーロはちらちらと周りをうかがいながら、こくりと頷く。
「……はい。チーロさまは、二年前にサロメさまの願いを叶えるために、聖獣と『精神交換』を行いました。その最中に殺されたそうです」
「チーロさま……」
何か言いたそうなイネスだが、これ以上は口をつぐんだ。

「本当なら、精神が死んだ肉体に戻れず消えるはずでした。でも、乗り移っていた聖獣のおなかには赤ちゃんがいたので、そのままその赤ちゃんとして生まれたそうです。聖獣の森にいる赤い聖獣が、おかあさんだそうです」
そういうことだったのか、とクロエは青い聖獣を見る。本来ならありえない、信じられない話だが、辻褄は合っている。
「どうして、最初から話してくれなかったんですか？」
エラルドが悲しそうにチーロを見る。
「エラルド卿もカミーユ卿も、過去のことにしばられている。だから事件のことを忘れてほしかったそうです」
だから、聖獣の森で意味深な発言をしたのかとクロエは思った。彼女がチーロの遺体の第一発見者だったのも、聖獣の声を聞いてたどり着いたからだろう。
「それに、チーロさま、じゃなくてラズは今の生活も気に入っているので、そんなに気にするなと言っています。すみません、彼の口から言ってもらったほうがいいんですけど、ラズが乗り気じゃないもので」
イネスはラズを見ると、軽く鼻をすすった。鉄面皮の侍女には似合わない仕草だ。
「何か負い目があるようなら、聖獣の森に毎月ナッツを百リブラ持ってきてと言っています」
「……かしこまりました」
イネスは片膝をつき、聖獣に頭を下げる。
「イネスはいいとして、僕はどうすればいいでしょうか？」
青い聖獣は「きゅるっ」と可愛い声を上げてエラルドを見る。
「エラルドにいさんは、もっと剣術の修練をしたほうがいいよ、と言っています」
「チーロまでそんなことを言うのかい？」
青い聖獣は小さな指を立てて振る。
「チーロじゃない、今はラズだよと言っています」
（モニクさま、すごい）
神子最有力候補だけのことはある。これだけ動物の言葉がわかるのなら、いくらでも使い道はあるだろう。思い返せば、モニクは最初から青い聖獣をラズと呼んでいた。
（チーロさまじゃなくて、ラズと呼んだほうがいいのか）
モニクはラズを頭にのせる。
『エラルドにいさんもイネスも、僕のことに責任を感じなくていいよ。僕は自分の判断で神子候補になった。おじさんを恨まないで。僕は、エラルドにいさんの身代わりになったつもりはないんだから』
どういうことだろうかと、クロエはエラルドを見る。

「本当なら、僕が神子候補として選抜試験に出るはずでした」
エラルドはかすかに微笑みクロエの手首のバングルに触れると、バングルが軽く熱を持つ。
「裏側を見てください」
クロエがバングルの裏を見ると、すでに消えたはずの刻印『I』が戻っていた。
「僕の祝福（ギフト）は、魔道具の能力を調整する『魔道具調整』です。魔道具の力を最大限に引き出し、失った効力も多少回復させることができます。地味ですが、かなり役にたつ祝福（ギフト）でしょう」
クロエはまた目を白黒させる。今日は一体何度驚けばいいのだろうか。
（景気よく魔道具を使い捨てにするのかと思ったら）
クロエも納得するしかない。こんな能力があれば、一生食べていける。
「僕の父であるビルツ伯爵は、僕を神子候補にしようとしました。ですが、祖母と母は反対し、僕も断ったため、代わりにチーロが神子候補に選出されました」
ラズはモニクの頭からエラルドへと移動する。エラルドはラズの毛並みをゆっくり撫でる。
「チーロ、いや、ラズは僕がこんなことをするのは望んでいなかったんですね。クロエ嬢には僕の個人的な感情のため危険な目に遭わせてしまい、申し訳ないです」
素直に謝られてもクロエは困る。
「ちなみに、僕が死んだとしても契約書は生きていますので、ビルツ伯爵に請求すればちゃんと報酬は渡せたんですけどね」
なんだかいらっとする言い方だった。
「エラルド卿。私は中途半端な仕事をするのが嫌だったんです。だから、エラルド卿を庇ったことは契約のうち。別に他意はないので、申し訳ない気持ちがあるなら追加報酬をください！」
クロエはどんと胸を叩く。素直に本音も言いたくないし、もうこの成金に金のことに関して遠慮はしないと決めた。
「私は報酬を貰って、早く辺境の悪餓鬼どもに新しい毛布を買ってやらなくてはいけないんで」
クロエはそう言い切ると、ふうっと息を吐く。
そうだ、クロエの契約は神子選抜試験と共に終わる。
あと二日で、ここにいる皆ともお別れだ。
ほんの少し、ほんの少しだけ寂しかった。

終章 ―― 聖女と騎士

I

神子選抜試験の最終結果は、予想通りだった。
「次代の神子は、モニクを選出する」
まだあどけなさが残る栗色の髪の少女が前に歩み出て、大神官の前に跪（ひざまず）く。
大神官の横には、ミュトス王国の美しい女王が立っていた。
向かって左の列は教会関係者、右は貴族。教会関係者の中の女性陣はおそらく先代、先々代の神子たちだろう。
ステンドグラスに照らされた少女は、それこそ神に祝福されているようだった。
ただ、クロエの予想が当たったのはそれまでだ。
二人目の神子の名は呼ばれることはなかった。
（どういうことだ？）
クロエは首を傾げるしかない。確かに一人は辞退、一人は捕まるという不測の事態には違いない。おかげで、クロエはサロメと同じように辞退することができなかった。
（あのヴィオレットさまでも、モニクさまとなら上手くやっていけるはずなのに）
どきどきしながら、クロエは横に立っているヴィオレットを見る。
もっと慌てているかと思いきや、ヴィオレットは何食わぬ顔をしていた。
「もう一名の神子については、神子モニクとの協議の上、追って発表する」
そういう方式なのかとクロエは思いつつ、モニクが就任される姿を見る。
とはいえ、八百長試合なのは決まっている。
もう二度と見られないであろう光景に、クロエは涙は出ないもののそれなりに感動していた。辺境の教会に戻ったとき、悪餓鬼どもに土産話くらいは持っていけるだろう。
クロエは、まだ幼さが残る新しい神子の背中を眺めた。

II

青い空、白い雲。
そして、何もない田舎。
クロエはガサガサのローブを着て、洗濯をしていた。
たらいの中には、おねしょのしみをつけたシーツがある。
「この、いくつに、なっても、おもらし、しやがって！」
クロエは素足でたらいのシーツを踏み、汚れを落とす。しみだらけの

シーツだが、そのうち買い替えてやるんだとクロエは思う。
クロエは、辺境の教会に帰ってきた。
エラルドたちはもう少し王都にいるように言っていたが、契約が終わった以上、長居をするつもりはない。結果がわかっている神子選抜試験に、クロエが残る必要はないだろう。
もちろん、報酬は受け取り済みだ。
クロエの手元には、前金の金貨がある。残りの金貨については現金で持つのは危ないと判断し、預金証書で貰っている。
（さーて、院長たちにはどう説明するべきか）
こまごました物を買うのならともかく、大きな買い物をすると金の出どころについて追及されるだろう。
クロエは神子候補として大教会に行ったのに、大金をせしめて帰ってきたとなれば、善良すぎる院長や先輩神官はクロエが何かやらかしたと勘繰るはずだ。二人は、いつまで経ってもクロエを子ども扱いしてくる。
これなら、寄付という形で教会に送ってもらえばよかったとクロエは思う。
「クロエ姉（ねえ）」
シーツを絞っていると、子どもの一人が駆けてきた。
「どうしたの？」
「ええっとね。懺悔室に誰かいるんだけど、院長も母さんもいないんだよ」
先輩神官は、よく子どもたちに『母さん』と呼ばれている。
「どちらも？」
「うん、お客さんが来てるみたい」
「わかった」
田舎の懺悔室に来る人なんて、大したことない愚痴を聞いてもらいたいだけだ。だからと言って放置するわけにもいかず、クロエは懺悔室に向かった。
教会の一画に設けられた小部屋には、確かに誰かがいた。
懺悔室に入るなり、神官などいなくても勝手にべらべら話して自己完結する者もいれば、誰か神官がやって来なければ頑として立ち退（の）かない者もいる。
クロエは、聖職者側の入口から懺悔室に入る。
懺悔室では、基本聖職者は何も答えない。ただ、聞くだけだ。悩みが解決するわけでもないのに懺悔をする行為をクロエは無駄と思いつつ、それが必要な人もいるのだと理解している。
間はしっかり区切られているので、どんな人が懺悔しているのかはわからない。声もくぐもって聞こえるようになっている。ただ、田舎の懺悔室では、懺悔というより愚痴をこぼしにくるのに近いので、誰な

のかはすぐわかる。
（それでも、話は聞かないといけないんだけどね）
カタッと音がして、壁の向こうから懺悔が始まる。
『仕事を失敗してしまいました』
声は若い男性のものだ。
（よくあるよね）
珍しく、姑の愚痴を言うおばさまでも、飲んだくれのおじさんでもない。
まともそうな人だが、正直こんなところで嘆くくらいなら、仕事の失敗をフォローするほうがよほどいいのではないだろうか。
とはいえ、クロエはただ座って話を聞くのが仕事なので、黙っている。
『とても優秀な人を雇っていたのですが、契約終了の際、実は更新の依頼が来ていたのです。それを上手く伝えることができずに、困っています』
（あー、あるある）
クロエは足を組んで頷く。
この辺境の教会にも、何人か神官が派遣されてやってきた。だが皆が皆、任期を終えると帰っていく。何もない田舎にいるのは、左遷と同じなのだろう。院長たちは引き留めることができずに、この教会は万年人手不足だ。
クロエとて人手不足でなければ、もっと違う形で養護院と関わり合っていくだろう。
（院長たち、貧乏を清貧と勘違いしてるところがあるからなあ）
つつましく生きるのは悪くないが、お金は使うところで使うもの。使うためには、集める努力もしないといけない。
『困ったことに、当初の契約では全くそのことに触れておらず、僕としてもどう切り出していいものか』
どこかで聞いたことがある口調だった。
『職場の同僚が思った以上にその人を気に入ったらしく、是非採用したいと言っており、僕はどう話していいのか悩んでいます』
（さっさと話せばいいから）
思わずツッコみそうになる。何を悩んでいるんだとクロエは思いつつも、話しかけないよう口を押さえる。下手に口を開いてしまった挙句、近所のおばさまの世間話に数時間付き合わされることもままあるのだ。
『っていうのは前置きで、本当は僕自身が彼女ともっと一緒にいたいという気持ちが強いのです。今まで、彼女ほど価値観が一致し、同時に合わないところは上手く折り合いをつけてくれる人はいなかったので。僕が勝手に思っているだけかもしれないですけど……。でも、僕

の中身にがっかりせずにいてくれたのはとても嬉しかったんです』
仕事の話をしていたのではなかったのか、とクロエは思う。
同時に、懺悔室の男性がもしかしたらクロエの知り合いではなかろうかという気持ちになってきたが、確信が持てない。
（いや、自分を無能だとは思わないけどさ）
話にある『彼女』がクロエだと思ってしまうのは、さすがに自意識過剰じゃないか。少し居心地が悪くなりつつ、足を組みかえる。
『彼女の今の仕事が大変だとは重々承知しています。再契約を行うためには、どうすればいいでしょうか？』
完全に問いかける形になっていた。
クロエは悩む。普段なら何を言われても黙っているし、それが正解だと思っているが、クロエの口は思わず動いていた。
「忙しい今の仕事を抜けても問題ないようにしてくれるといいでしょう」
『では、具体的に何をすればいいでしょうか？』
「その『彼女』を取り囲む環境を理解することですね」
『ではあなたの立場なら、どうしてもらったらいいですか？』
「私は関係ありませんから。これで終わりでよろしいですか？」
クロエははっきり言った。
壁一枚挟んだ相手の表情を想像する。妙に愉（ゆ）悦（えつ）な顔をしている気がした。相手の顔が見えないのと、声がくぐもっているので、いつものように嘘か本当かわからない。
クロエはふうっと息を吐く。
もう大体何をしたいのかわかってきた。
（からかうのはやめて欲しいな）
冗談にしても心臓に悪い。クロエが何か勘違いしたらどう責任を取ってくれるつもりだろうか。
懺悔室のドアを開けると、反対側から癖のない黒髪の青い目の青年が出てきた。紳士的な笑みを浮かべた男性は、商人気質の聖騎士だった。
クロエが懺悔室に呼び出されたのは、どうやら仕組まれたものだったらしい。
「お久しぶりです」
「それほど時間が経ったとは思えないんですけど」
精々半月ほどだ。
「もう一人の神子について報告しに来ました」
「わかっています。八百長でなくとも、ヴィオレットさまに決定ですよね？」
「ええ。ヴィオレット嬢に最初から決まっていました。他の神子候補たちの基準が想定に満たない場合、ですが」

「想定に満たない場合？」
なぜ条件付けされているのだろうか。クロエは疑問に思う。
「クロエ嬢。神子は何人もの意見を取り入れて、二人選ばれます。王族、貴族、聖職者。一人目の神子は才能で選ばれ、二人目の神子はもう一人の神子を補佐する能力を見られます。なので、神子同士の関係性が重要視され、一人目の意見を踏まえつつ選ぶのですが──」
エラルドは遠まわしな言い方をする。
「単刀直入にお願いします」
クロエはきっぱり言った。
「ヴィオレット嬢は、試験官の一人です。正義を重んじるロバン侯爵家の人間は、何らかの形で神子選抜試験にかり出されます」
「……ちょっと待ってください。理解が追い付かないんですけど」
クロエは額を押さえる。
ヴィオレットは高飛車な貴族至上主義のお嬢さまで、選抜試験中はサロメをあからさまにいじめていた。
「もしかして、あの行動も全てフリだったってことですか？」
「ええ。本人はノリノリでやっていたようですが。サロメ嬢を相手にしているときは、こっちも心が痛みました」
「いや、なんで試験官がサロメさまをいじめる必要があるんですか？」
クロエだって、見ていて気持ちはよくなかった。
「神子にとって、メンタルの強さは重要です。特に二人目の神子は、不安定になりがちな祝福（ギフト）持ちの神子を支える必要があります。生（なま）半（はん）可（か）な人がなるべき役職ではありませんから、彼女のふるまいが試験の一環なのです」
「そう言われると、確かに」
毎回派手なローブを着て、顔がいい護衛騎士たちを侍（はべ）らせて、他の神子候補を威圧する。それを周りの目を気にせずノリノリでやる精神。確かに、ヴィオレットはメンタルが強すぎる。
というか、話の流れ的にエラルドは最初からそのことを知っていたのか。
（そういえば舞踏会の時、侯爵に呼び出されていたな）
結婚話でないとしたら、その関係だろうか。
しかし、クロエにも黙っているなんてひどい話だ。
「それで、試験官のヴィオレットさまが神子に決まったと報告に？」
「ええっと。さっきの僕の懺悔は聞いていましたか？」
「ええ。聞いていましたとも」
「その中に『職場の同僚』が出てきたと思いますが、それがヴィオレット嬢だと言ったら？」
『職場の同僚』は、契約切れの『彼女』が気に入り、採用したいと

言っている。
クロエは首を一時の方向へ傾ける。
「ヴィオレット嬢はクロエ嬢を評価しています。礼儀作法などまだまだ改善の余地はありますが、養護院の子どもの才能を見抜いた洞察力、バザーで汚れ仕事でも平気でやる行動力、それから自分より強い者の前に立ちふさがる胆力、と言っておりました」
「いや、そう言われても」
クロエとしては、別に何か評価のプラスになるためにやったわけではない。
「あのヴィオレット嬢に気に入られるなんて、滅多にありませんよ」
「嬉しいような嬉しくないような」
「というわけで、再契約いたしませんか？」
エラルドはにっこり笑う。
「再契約って、また何かやらせる気ですか？ この通り、辺境の教会は貧乏かつ人手不足なんですけど！」
クロエは呆れて古い教会の柱を叩く。もう報酬は十分すぎるほどもらった。しばらく出稼ぎに行く必要はない。
「王都には、世間のしがらみから解放されたい優秀な神官がたくさんいます」
「私がいなくなったら、子どもたちが困りますよ？」
「そうですか？ さっき会った子どもは、クロエ嬢が出稼ぎ中は静かでよかったとか話していましたけど」
（あの悪餓鬼）
普段はクロエの話を全く聞かないくせに、なんたる言いぐさだ。
「なおかつ、子ども好きで金銭管理が得意な人も心当たりがあります」
「……」
どことなく、クロエには行き場がなくなってしまったような気分になった。ちらっと窓を見ると、子どもたちが覗きこんでいる。
「子どもたちは、僕に『やっぱりクロエ姉はちゃんと都会で働けるんだね』って聞いてきました。これ、どういう意味かわかりますか？」
「さあ。都会じゃ何もできないとでも思ったんですかね？」
「いえ。違います」
エラルドは子どもたちを見る。
「『クロエ姉はどこに出てもおかしくないのに、僕たちのせいでどこにも行けない』と言っていました」
「……」
クロエは目を細めて窓を見る。隠れているつもりでも、バレバレだ。
「クロエ嬢。子どもたちは投資次第で価値が上がると言っていましたよね？」

「そんな人身売買めいた言い方はしてません」
「してましたよ。その価値が上がる人の中に、クロエ嬢は含まれていないんでしょうか？」
クロエはきゅっと唇を噛み、父の言葉を思い出す。
『俺がいなくなったら、都会で真っ当な仕事を見つけろ。俺と違っておまえならできるはずだ』
「……私は」
「僕にはクロエ嬢が必要です」
いきなりのエラルドの言葉に、クロエは思わず酸っぱいものを食べた顔になった。
「クロエ嬢は、自分の価値を蔑ろにしていませんか？」
「そんなことは……」
「僕は、あなたの正しい価値を示したいと思っています。それこそ、国で一番大きな養護院を立て直すことができるくらいに」
演説めいたエラルドの言いぐさだが、その目に嘘はなかった。
クロエは思わず笑う。
「つまり、雇用主が破産するくらいの高給取りになれということですか？」
「ええ。僕が報酬を支払えないくらいの大物になっていただけたら」
「その時は、反対に私がエラルド卿を雇用しますね」
「よろしくお願いします、レディ」
エラルドは片膝を付き、妙にかしこまった動きでクロエの手を握る。そっと口づけをする気（き）障（ざ）な態度だが、クロエは気恥ずかしさを感じながらも受け入れた。

「クロエ姉！」
子どもたちが、クロエたちの元に走ってくる。
「騎士の兄ちゃんところに働きにいくのか？」
「……まあ、そういう流れになるんだろうねえ」
クロエは申し訳ない気持ちを子どもたちに感じた。
だが、子どもたちは目を輝かせる。
「すっげー！ 姉ちゃん、聖女さまになるんだってさ！」
「すごいすごい。きれいなおようふくきるんでしょ？」

「大丈夫なの？ 引き立て役にならない？ クロエ姉、普段はブスだって言ってるけど、まあ本当は中の上くらいだと思うよ」
子どもたちが口々にとんでもないことを言い出した。
クロエは顎が外れたまま、エラルドを見る。
「はあ。どうなるかと思いました。これでなんとか上に報告できます」
「ええっと、どういうことですか？ エラルド卿？」
「そのままの意味です。試験官であるヴィオレット嬢が神子を辞退、代わりにクロエ嬢を推薦しました。クロエ嬢の能力は、それこそ神子としての基準を満たしていました。貴族の一部では反対があったものの、ロバン侯爵家が推したことと特定の思想に染まっていないという点が評価され、受理されました」
「いや、再契約って……」
「その再契約が神子になることですよ」
何を当たり前のことを言っているのだと言わんばかりに、エラルドがクロエを見る。
クロエは顔をひきつらせた。
「ええっと、辞退させていただきます！」
「な、何言っているんですか!? もう国家レベルで決まった話ですよ！」
いや、そっちこそ何を言っているんだとクロエは頭をかきむしりながら、周りを見る。
今更、断られても困ると言うエラルド。
目を輝かせる子どもたち。
よく見ると、柱の陰で院長と先輩神官がハンカチで涙を拭いている。
そして、その後ろでは性別不詳の侍女が無表情で親指を立てていた。
「いや、嘘だと言ってよ！」
クロエの叫びもむなしく、エラルドの青い目に偽りはなかった。

電子限定オリジナルショートストーリー
『動物屋敷』

「それにしても豪華ですね」
クロエは、与えられた宿舎の部屋に改めて感嘆の声をあげていた。
エラルドは、にこにこしたまま茶を注いでいる。
なぜ、護衛騎士が侍女の真似事をしているかといえば、本物の侍女が青い聖獣に首ったけになっているからだ。
「手触りを考えればこちらの生地がいいのですが、吸水性を考えるとあちらの生地が優れています。いかがしますか？」
イネスは至極真面目な顔で、しかし鼻血をたらしながら尋ねていた。
誰にかといえば、青い聖獣にだ。
聖獣の森からやってきた珍客は、今やクロエよりも部屋の主人のような顔をしている。
「まさかイネスさんがこんなに動物好きだとは……」
「そうなんですよ。昔からこうで、我が家では一時期、子猫を二十八匹、子犬を七匹育てたこともありました。あの時は、一日中ミルクと排泄の補助とで大変でした……」
エラルドは遠い目をしている。
なお、イネスは特製ベッドに横たわる青い聖獣をひたすら観察していた。
「いやいやいや、いくらなんでもやりすぎじゃないですか？ 家主のビルツ伯爵は何も言わなかったんですか？」
「祖母も母も猫好きで、なによりチーロがいたもので」
「チーロさま、確か動物と心を通わせることができたんですよね？」
「はい。子育てが難しいという母猫から子猫を託されていました。子猫は子猫で、無邪気かつ、ここで捨てられると生きていけないという野良猫世界の掟をつらつらと語ってくれたそうです」
「ねこー」
「ある母犬からは、自分の子どもたちを育ててくれたら忠誠を誓うなどと言われて、断ることもできなかったのです。なお、成長した犬たちのうち数匹はうちで番犬をしています」
「いぬー」
エラルドは、きっと何も言えなかったに違いない。
今のように、何事もないように小動物と戯れる侍女の代わりに茶でも入れていたに違いない。
「エラルド卿、大変ですね」
「ええ、本当にもう。そのうち、家に動物好きな貴族やお得意先が集まるようになりまして」

「里親になってくれたんですか？」
ビルツ伯爵家の客人なら、金持ちばかりだろう。
「いえ、可愛がるだけ可愛がって帰っていくんですよ。何人かは引き取ってくれたんですけどね」
「……」
クロエは唖然とする。
「家で飼うと壁や家具で爪とぎする、匂いが気になる、散歩が大変、などなど……。一時的に愛でるのであれば問題ないと、けっこう高級な手土産を持ってこられるんですけど、引き取ってくれるかたはごく少数でしたね」
「結局、どうしたんですか？」
「はい。つまり彼らは、一時的に可愛がるのであれば多少の出費があってもかまわないのだと理解しました」
「ん？」
「飲食店を開き、猫、犬をそれぞれ接待役として店舗に置きました。飲食代の他に入場料や、接待役のおやつを販売しました。客人の中には接待役を引き取りたいという方もいらして、ペット用品売り場も併設しました」
「……エラルド卿」
「いやー。結構悪くない稼ぎでして、現在三店舗経営しております」
「……そうですか」
転んでもただでは起きぬ、エラルドはそんな男なのだとクロエは改めて痛感した。

聖女に嘘は通じない

発行日 ２０２２年５月20日
著者 日向夏
イラスト しんいし智歩
発行所 株式会社フロンティアワークス